

『死霊術師と屍少女』

学校: 仙台デザインコミュニケーション専門学校

専攻: ライトノベル・小説作家専攻

3年

氏名: 有田 翔平

プロローグ

生きるべきか死ぬべきか、この場合それは問題じゃない。

生きているのか死んでいるのか、それが問題だ。

抱きしめたいのか突き飛ばしたいのか、これがさらに問題だ。

「棺桶はどこにあるんだ？」

「……僕の部屋」

華奢な体つきに優しげな黒い瞳、髪は長く、ちらと見ただけでは少女に間違われてしまいそうな程の少年の名は如月イズミ。高校での終業式を迎えた、ごく普通の高校一年生。そう——この日までは——、

自宅二階のイズミの部屋の中央には、棺桶が鎮座していた。

「まったく、死体商の奴め。なんだってこんなトコまで運び込んだんだ？」

父は苦々しげな表情を浮かべながら棺桶を見下ろす。

死体商がこの部屋を選んだのは分らないでもなかった。湿気が多くて気温が高い季節に、冷房の効いてない部屋に死体を置くのはご法度だから、少しでも涼しい部屋を探して置いたのだろう。まあ、人の部屋に許可なく死体を置くこと自体ご法度なのだが、家長が了承しているらしい以上、そのあたりはなんとも言えない。

「イズミ、棺桶の蓋を外してごらん」

イズミは若干たじろぎながらも、言われるがまま棺桶まで歩み寄り、無言で棺の蓋に手を掛け、勢いよく持ち上げたまま硬直する。

それは過去に経験してきた恐怖に対する硬直ではなく、まるっきり別次元のモノだっ

た。

美しいものに心奪われて硬直するような、そんな感じ。いや、まるっきりソレだった。

棺桶の中には確かに死体が入っていた。それは、安眠と美を体現していると言い表したくなるモノだった。

年の頃は十代の半ばを過ぎたくらいの少女。肌理の細かい透き通るような白い肌に、艶やかな亜麻色の髪。白いワンピースを纏った体の線は細く、それでいて女性的だった。

しかし、どこか違和感があった。少女の顔の造りはどう見ても日本人ではない。手を組んで横たわっている姿は異国の童話に出てくる麗しき眠り姫のようであるが、その眠り姫が白木造りの棺桶に納まっている様は、どこかシュールだ。

それに、あまりに死体らしさが無い。血色がいい、とまでは言わないが、この年齢で死に至るといことは、大病か不慮の事故しかない。それなのに、体にはその痕跡がまるでない。本当にただ眠っているだけのようだ。突然動きだしてもなんの不思議もないほどに。

そこからイズミは一つの可能性を見出した。父がイズミを驚かせようとしているという線だ。

イズミはそう考え、タヌキ寝入りをしている可能性の出てきた少女をじっと見つめた。

しばらく観察しては見たものの、呼吸している感じはなかった。

この少女は確かに死んでいる。信じたくはないが、それが結論だった。

「どうした？ あまりの美しさに声もでないのか、イズミ」

蓋を抱えたままのイズミの肩に手を置き、父はからかうような笑みを浮かべた。

イズミは半分当たっているその発言にムツとしたものの、表情に出せば付け込まれることは目に見えていたので、胸の内にとどめた。

「この子、誰なんだよ」

代わりに疑問をぶつけてみる。

生まれてから一度も異国の人間と関係した事のないイズミは、当然ながら棺桶の中の少女に見覚えがなかった。

世界を飛び回る父ならば何かしら異国の少女と関係があっても不思議ではないが、自宅にその死体を運び込む理由は、見当がつかない。

「この子はお前への贈り物だ。綺麗だろ？」

父は棺桶に眠る少女を見つめて微笑む。

イズミは手にしていた棺桶の蓋を床に叩きつけ、父の胸倉に掴みかかる。

「おいっ！ いい加減にしろよ！ 毎年フザけたプレゼントのせいで息子がどれだけ嫌な思いをしたか想像できないのか？ ああ、綺麗だよ、びっくりしたよ。でもな！ お生憎様、僕は死体もらって喜ぶ趣味はないんだよ！」

イズミはこれまでのプレゼントに対する鬱憤をも晴らすかのようにまくしたて、父の胸

倉から突き飛ばすように手を離した。それでも、へらへらしている父を本当に殴ってやろうかと拳を握り締めると、

「お父さん？」

部屋の隅で事の成り行きを見守っていた母が、口を開く。

「わかった話す、話すから。そんな怖い顔しないでくれ、母さん……」

イズミは母の顔を見るが、表情は笑顔のまま。だが、心なしか黒いオーラが見え隠れしている。

イズミは拳を解き、父の次の言葉を待った。いま母の前でふざけた事を言えば体の穴が増えることになる。そんな状況で嘘をつくほど父は愚かではないはずだ。

「我が如月家はネクロマンサーの家系なんだ」

父は至極真剣な表情で言った。

イズミは特に反応を示すこともなく胸中に呟いた。

穴開き決定だな、と。

イズミは釘と鉄鎚を取りに行くために踵を返しているであろう母を見つめた。しかし、母は一向に動く気配がない。それどころか父と同じように真剣な表情に変え、イズミの顔を見つめている。

「ど、どうしたの？ 母さん。早く父さんに釘刺さなきゃ。こんなフザけた冗談言ってるんだから」

「イズミ。信じられないとは思うけどお父さんの言ってることに嘘はないのよ」

すがるような声で言ったイズミに、母が悲しげな視線を向けた。

「そ、そんな馬鹿な話がある？ ネクロマンサーってあれだろ？ ゲームとかに出てくる、

死者を操る、あの」

「そう、まさしくソレだ。如月家の人間は十六歳を迎えると死者を蘇らせる力を持つようになる。そしてお前は今日十六歳になった、だから彼女を持ってきた」

黙り込んで言葉を発しないイズミに、父が棺の中の少女を指し示し、続けた。

「その眼で見れば信じるだろ？ お前がこの子を蘇生させるんだ」

「なっ!? そんなこと出来たらそこの医者よりよっぽど凄いじゃないか……まさか父さんはその力で？」

「父さんの話を信じてくれたのならありがたいが、父さんの医者としての腕は努力によるものだ。人を蘇らせるのにはそれなりに代償があるからな」

イズミが目を見開きながら尋ねると、父は力なく笑って肩をすくめた。

イズミは父の言葉に「代償？」と半ば独り言のように呟いた。

「ネクロマンサーなんてのはオカルトの世界だ。イズミだって、何もメスや機械を使って蘇生させるのを想像した訳じゃないだろ？」

父の言葉にイズミは黙って頷く。

「ネクロマンサーってのは魂が特別なんだ。その魂を死者に分け与えることで死者は蘇る。

その分ネクロマンサーの魂は減る、魂ってのは寿命みたいなものだから、死者を蘇らせる度にネクロマンサーの寿命は減っていく。そうまでして名声を得る馬鹿はいないさ」

父の言葉は信じられないような話だが、あの母がドッキリの類に付き合うとも考えられなかったイズミは、ひとまず信じることにしてみた。

だが、信じてみれば新たな問題が頭に浮かぶ。

少女を蘇らせたなら自分の寿命は縮むのではないかと。

「なぜわざわざ息子の寿命を縮めようとしているのか、ってことだろ？」

イズミの顔に浮かんでいた杞憂を読み取ったらしい父が微笑む。こういう観察眼は医者ならではのモノなのだろうか。

とりあえずイズミは頷いて返した。

「ネクロマンサーの魂が特別なのは、死者を蘇らせられるという事だけじゃない。ネクロマンサーの魂を喰らった者は不老不死になれるんだ」

死者を蘇らせる存在の次は不老不死。まったくもって話題が早回しのビデオのように移り変わる。

「……はあ？」

「つまりはお前の命が危ない。だからこの子を連れてきた」

父の言葉がいまいち飲み込めないイズミは再び曖昧に頷く。

自分の命が危ないからこの女の子が連れてこられてて、自分はこの女の子を蘇らせなきゃいけないと、蘇らせたなら寿命が縮んで……意味がわからない。

命が危ないなら、こんな美しい女の子じゃなくて屈強な黒服でも大量に連れてくればいいのだ。

「あ、あのさ！ 命を守るんだったら、お、女の子よりいかつい黒服とかの方がいいんじゃないかなあ？」

「その黒服がこの子より強ければ、の話だがな」

父は肩をすくめてニヤリと笑う。

イズミは自然と、棺の中の少女に目をやっていた。どう見ても強そうには見えない。というか、戦えるのか自体が怪しい。やはり、塔に閉じ込められているお姫様の方が適役という外見だ。

「銃火器をもった黒服二十人ぐらいと相当するのがこの子の強さだ。まあ、素手や近距離戦闘用の武器を所持しているだけの黒服だったら、千人ぐらいは倒しきるんじゃないか？」

父は何やら頭の中で計算し、まんざら冗談でもないかのように言い切る。

「じゃあ、なんでそんな強い子が死んでるんだよ。そもそも病死にしては健康そうな体だし、事故死にしては綺麗だし、不自然なんだよ」

「すまんすまん。その子の死に様が不自然なのはな、生き返るために死んだからだよ」

「生き返るために？ どういうことだよ」

「嫌な言い方ではあるが、この子はネクロマンサーの道具になる為に死んだってことだ。どうしてその道をこの子が選んだのか、詳しくは知らんがな。そしてそういう死体の売買をするのが“死体商”というやつらだ」

父は横目で少女を見下ろしながら言った。その視線も言葉も、どこか寂しげに感じられた。

「それを父さんが買ったの？」

「ああ、そうだ。ネクロマンサーの為の死体だからな。お前のボディガードにはうってつけて訳だ」

それでも平和ボケした頭は、寿命を削ってまでボディガードを雇う必要はない、という結論を導き出していた。

「お前が今考えていることを当てようか？ イズミ」

「本当に寿命減らしてまで蘇らせる必要あるのかなあ、だろ？」

言い当てられるのを予想していたイズミではあったが、こうもぴったりだと気味が悪くなってくる。

「まあ……確かに思ったよ」

イズミは顔を俯けて呟く。

「だろうな。まあ、自分の寿命を削れば患者が助かるからと言って、助ける医者はいないだろうしな。少なくとも父さんはやっていないし。骨身は削っても寿命は削らない」

父はイズミ以上にバツの悪そうな苦笑いを浮かべて頬を搔く。

命の瀬戸際に立ち会う仕事をしている父からしたら、イズミの感じた良心の呵責など些細なモノなのだろう。常に呵責が付きまとうなかで仕事を続けている父はやはり尊敬に足る人物なのかも知れない、とイズミは思ってしまった。もっとも、父親として尊敬できるかは別問題だが。

「まあ減る寿命は大した年数じゃない。考えてもみろ、お前のおじいさんは平均寿命は生き切ただろ？」

確かに、とイズミは黙って頷く。

祖父が死者を蘇らせたことがあるかは知らないが、父がこう言う以上蘇らせていたのだろう。

「五回だそうだ」

「ん？」

「おじいさんが死にかけた回数は。もし優秀なボディガードがいなかったら一度目で死んでいただろうと笑いながら言っていたよ」

父は肩をすくめて苦笑う。手に取るようにイズミの考えが分かるのは医者としての観察眼だけではなく、自分の経験からでもあるのかもしれない。

「父さんのボディガードは？ 見た事ないけど……」

「今は父さんにボディガードはいないよ」

「大丈夫なの？ それで」

「心配ない。父さんこう見えて半端じゃなく強いから」

父はそう言うのとワザとらしくボディビルダーのようなポーズをとった。だが、かなりの細身である。ひどく滑稽で本当に強いのか疑いたくなる。

「本当なら強い父さんが守ってやりたいのだが、いつもお前のそばにいるわけにはいかないし、何より男子たるもの自分のケツは自分で拭けなきゃな」

父の言葉に、イズミは「まあ……確かに」と曖昧な返事を返す。

イズミは棺桶の少女に視線を移す。もし仮に、この少女を蘇らせて身を守ってもらったとしても、ネクロマンサーとしての能力を使ったというのが多少の救いになるだけで、見た目は情けないのに変わりがないかもしれない。まあ、自分より遙かに強い霊長類最強の女性など日本には存在しているが。

「イズミ、実は母さん達はもうすぐ日本を離れなければならないの。だから早くこの子を蘇生させて私達を安心させて」

押し黙っていた母が口を開く。イズミを見つめる母の視線は真剣そのものだ。

「わ、分ったけど……どうやって？ 僕、魂を分け与える方法なんて知らないし」

「そいつは簡単さ」

父がニンマリと笑い、続けた。

「キスだ」

「きつきききき……キス!？」

「正確にはキスというよりは人口呼吸に近いがな。自分の心臓に左手を添えて口から息を吹き込むんだ」

父は心臓に左手を添えて口づける真似をしてみせる。

「や、やらなきゃ、ダメ？」

「当たり前でしょ？ 死体商が言うには、死体は生き返らせてくれたネクロマンサーのことしか守ってくれないらしいから」

情けなく問うた、イズミを母が切り捨てる。

「さあ、イズミ。眠れる姫に目覚めの口づけを」

父が恭しく礼をしながら、棺に眠る少女を指し示す。

「わ、わかった、よ。やればいいんだろ！ やれば！」

イズミは乱暴に頭を搔きながら棺桶に歩み寄った。

(ドッキリの類だったら父さんにヘッドバットして、ソバット喰らわしてやる！)

イズミは胸中に毒突いてはみたものの、目の前に横たわる少女を見るとドッキリだろ

うがなんだろうが構わなくなってきた。そう思わせるほどの美しさが、死してなお、少女にはあった。

絹糸のような光沢を持つ亜麻色の髪、瑞々しい唇、すらりと伸びたしなやかな手足。死体に口付けるということに対する嫌悪感などは無いに等しいのだが、頭の大半を占めていた照れがイズミの行動を阻んでいた。

「左手を自分の心臓の上に置くんだ」

棺の脇で硬直してしまっていたイズミに父が指示する。

「うん……」

イズミは生返事を返ししながら自分の心臓の上に左手を置いた。自分の心臓の鼓動が左手を通して聞こえてくる気がする。普段は心臓の鼓動など気にとめることはないが、それでも今の鼓動は普段よりも格段に速い。

イズミは少女の枕元に屈み、少女の唇に自分の唇を近付ける。

何も考えないように心がけようとしたイズミだったが、その必要はなかった。少女の唇と距離が縮まれば縮まるほど脳の回転数が遅くなっていく。イズミはボンヤリとした頭で、思考が自動的に停止へと向かっていくのを感じ取っていた。思考が完全に停止した瞬間――、

イズミの唇が触れた。

(冷たい……)

その冷たさにイズミの脳がオーバーヒートしかねない全速力で再び回転し始める。

「息を吹き込むんだ」

父の抑揚のない声がイズミの耳朶を打った。

イズミは生返事を返そうとしたが唇を付けたままだったので上手くいかず、そこから漏れた吐息が少女の口の中に吹き込まれた。

少女の手がピクリと動く。

徐々に人肌まで暖かくなってきたと感じながら、口付けしたまま動けなくなっていたイズミはそんな事に気づく筈もなく、茫然と少女の顔を見つめていた。

少女の瞼がピクと動き、ゆっくりと開かれる。瞼の下から現れたのは少女の髪の色と同じ亜麻色の瞳だった。円らで、少女の他のパーツに劣ることなく、美しい瞳だった。

彼女に見とれながらイズミが少し顔を離す。

「邪魔だ。どいてくれ」

異国の少女の唇から滑らかな日本語が滑り出る。

イズミは自分が何を言われているのか、やや間をおいて理解し、慌てて飛退いた。

運動した訳でもないのに息を切らせているイズミをよそに、少女がゆっくりと上体を起こし、棺桶に腰を落着けたまま、部屋の中に佇む如月家の面々を順々に見回していく。

「私を目覚めさせてくれたのはその少年か。とりあえず礼を言う」

少女はイズミに視線をとめると慇懃に言った。

お辞儀をしない辺りがお国柄の違いを示しているなあ、などとズレた事を考えていたイズミは、その謝辞が自分へ向けられたものだと気づき、慌てて「どういたしまして」と返した。

「体の具合はどうだい？」

父が少女に歩み寄り、退院間近の患者に接するかのようによく尋ねる。

「ん。問題ない」

少女は掌を閉じたり開いたり、腕を回したりしながら答える。

「それは何よりだ。これで一安心だよ」

父は朗らかに微笑むと、イズミに視線を移し続けた。

「じゃあ、父さんたちはもう行かなきゃいけないから。あとは若いもん同士で」

「玄関に置いてある荷物はその子の為の服とか入ってるから。あ、一応言っておくけど、ひとつ屋根の下で暮らすからって変なことしたら……チョン切りますからね」

父に続いて母も満面の笑みで出ていく。

「そんなことあるわけないだろ！ ん？ えっ？ チョン切るって何を？ まさか……」

イズミの悲痛な叫びを無視して母は、乱暴に部屋の扉を閉めた。

「何なんだ……いったい」

イズミは閉ざされた扉を見つめながら茫然と呟く。

部屋の中にはエアコンの駆動音だけが静かに響いていた。

第一章 出会い

1

「君が二百年も前に死んでたなんて、信じられるかよ……」

イズミの魂を分けた彼女は流暢な日本語で、死んだのは今から二百年前、自分の死体があればほど綺麗に保たれていたのは魂に魔術的加工を云々で、要するに魔術の類で肉体の崩壊を防いだということ。イズミの好みのタイプ、知識・常識等はキスをしたイズミに準ずるということを教えられた。

「信じられないのか？」

目の前には驚くほどあっさり生き返った美少女が、この家の住人たるイズミよりも堂々とした態度でイズミと向かい合った椅子に座り、イズミが用意したひやむぎを、あっさり習得してしまった箸さばきですすっていた、手を途中で止め、顔をイズミに向ける。

「ふつーに考えればね……」

イズミがひらひらと手を振りながら答えると、少女は箸を丁寧に置き、まっすぐにイズミを見据えた。

イズミはその視線に思わずたじろぐ。女性からまじまじと見つめられたことのないイズミにとって、その視線はこそばゆかった。

イズミの緊張など知ってか知らでか、少女は深いため息を吐きだして頭をふった。そして、呆れた表情を隠そうともせずイズミに向ける。

「見た事を信じないということは、自分自身を否定することになるとは思わないのか？」

「ぐ……確かに……」

イズミの杞憂をよそに、少女は再びひやむぎをすすり始める。

「それは聞いただけだから信じなくてもいいさ。信じるべきことは君がネクロマンサーで、私が君を護る者ということだけだ。私が言ったことなど気にしなくていい。それこそ話半分を取ってくれて構わない」

少女は箸をイズミに向けながら言った。麺汁やひやむぎの切れ端が宙を舞う。
(常識は本人に準ずるんじゃないのか……いったい、いつまで続くんか……この不可解な状況は……あつ)

「あのさ、君……そう言えば名前まだ聞いてなかったよね」

イズミは吐き出しかけた疑問を引っ込めて少女に訊ねる。

「ダーシエンカ。ダーシエンカ・オルリック」

少女は一際大きい塊を飲み込み、箸を容器の上に置くと、丁寧な口調で述べた。

とても気品溢れる？ 動作だったが、三人前のひやむぎを楽々と平らげる様を見ていたイズミからすれば、苦笑ものだった。

「ダーシエンカさん、ね。ダーシエンカさんは……」

「さんはいらない」

「あ、うん。ダーシエンカは」

「待て」

「ハイ？」

話の腰を次々に折られたことに、イズミは少しだけムツとする。

「君の名……名前は？」

「そっか、言ってなかったっけ。僕の名前は如月イズミ。高校一年生だよ。高校ってのが、君に通じるか分からないけどさ」

「心配無用だ。この時代に関する情報はイズミによって、だいたい理解している。これからよろしく、イズミ」

ダーシエンカは右手をイズミに差し出す。

「あ、うん……よろしく」

イズミはおずおずと手を差し出し、ダーシエンカの手を握った。

軽い握手のつもりだったが、イズミの手に万力に挟まれたかのような痛みが走る。

「いっ、痛い！」

イズミが苦痛に顔を歪めながら声を上げると同時に、ダーシェンカが素早く手を離す。

「す、すまない！ 力の加減が上手く出来なかった……」

ダーシェンカはイズミ以上に顔を歪め、泣きだしそうな表情でイズミを見つめていた。「い、いいよ……骨に異常はなさそうだし……それに、ダーシェンカが本当に強いのか、って疑問も消えたから。握力の強さがその人の強さとは考えられないだろうけどさ……イテテ……」

異常な怪力への疑問を浮かべたイズミではあったが、ダーシェンカをひとまず安心させようと、努めて優しい声で言ったが、額に浮く脂汗がとめられない。ダーシェンカの握力はそれほどまでに強かった。並の男では彼女に歯が立たないだろうと確信させるくらいに。

「ほ、本当にすまない。感覚がつかめなくて……」

ダーシェンカは深々と頭を下げる。

イズミはそれを二百年のブランクから来るものを言っているのだと受取り、気にしなくていいよとだけ答えた。

不思議なことに、イズミはこれまで抱いていたこの状況に関する疑念を、ダーシェンカの握力一つで一蹴していた。

オカルト的な存在は実在するのだと。自分がネクロマンサーであるように、目の前の少女も一般的な人間以外のナニかであるのだと。

そう理解することにした。

「もうダメ……疲れた……死ぬ」

イズミは自分の部屋のベッドに倒れこみながらボヤいた。

『イズミを守るためには、この辺りの土地勘を完璧にしておく必要があるから街を案内しろ』と言い出したダーシェンカに、散歩程度の気持ちで「いいよ」と答えたイズミだったが、すぐに後悔するハメになった。

半径二キロメートルを漏れなく歩き回り、大通り、路地裏、肩幅程度しかない民家と民家の間の道——土地勘を完璧にするために繰り返された散歩は三時間。

夜とはいえ、歩き回れば汗をかくもの。今にも眠りたい気持ちを抑え、お風呂の準備に取り掛かる。

「お風呂入らないの？」

「問題ない。私は汗などかかない」

「そう……あのさ、もしかしなくても、ずっと一緒に住むんだよね？」

風呂上がり、イズミはダーシェンカにごく一般的な質問をぶつけてみた。

「当然だ。でなければなんの為の護衛か分らない」

知り合って間もない異性と、二人きりで、ひとつ屋根の下でこれから過ごすということは、イズミにはあまりにも刺激的だった。

「気まずいというなら、夜は庭に立ってても構わないぞ。私は」

先ほどまではさして気にしていなかったが、夜がやってくると心が落ち着かなくなってくる。

当然、ダーシェンカに対する照れも大きいと同様に、自分が本当に命を狙われているのだと、実感めいたものが湧いてくる。

「そ、そんな事させられるわけないだろ！ 第一、近所の人を警察呼んじゃうよ」

こともなげに言い放ったダーシェンカに、イズミは手を振り回しながら否定する。

「……まあ、そりゃあ気まずいけどさ、ダーシェンカが気にしないならこっちも気にしないよ」

「そうか、着替えは玄関に置かれていた荷物に入っているのだろ？」

「うん」

イズミがその問いに頷くと、ダーシェンカは何の疲れも感じさせない動きで部屋を出ていく。

「畜生……地面に膝つきたくなる」

イズミはボヤキ、壁を伝いながらダーシェンカの後を追った。

「これは誰の趣味だ？」

やっとの思いで一階に降り立ったイズミに浴びせられたのはそんな言葉だった。

ダーシェンカの手にはモッサリとした淡い水色のドレス、いや、いっそモッサリが握られていた、と言いたくなるくらいモッサリしたドレスが握られていた。

映画の中でしかお目にかかったことのないようなドレス。スカートは長くモッサリしていて、肩の部分もモッサリと膨らんでいる。モッサリのオンパレードだ。

「これでは……動きにくいな」

「それしか無かったの？」

「いや、ショックでこのボストンバグーつしか開けていない」

後ろから覗き込んだイズミに、ダーシェンカがバッグを指さす。

残っているのはボストンバグとスーツケースが一つずつ。このドレスのモッサリ具合から言うと、他の二つにドレスが詰まってもおかしくはないだろう。開いたボストンバグには二着程入っていたから、それから逆算し、全てにモッサリドレスが入っていれば大体一週間分になる。ローテーションが可能になる。

「とりあえず他のも開けてみよう。母さんならまともなものを買ってしてくれるハズだ」

イズミはゴクリと固唾を飲みながら、もう一つのボストンバグを開けた。

そこから見たのは、ごくごく一般的な女性物の服の数々だった。下着類もチラと見

えたので、イズミは咄嗟に視線を逸らす。

「ふむ、確かにまともだ。助かった」

ダーシェンカは下着の事などを気にかける様子は微塵も見せない。

すっかり安心したらしいダーシェンカは何食わぬ顔でスーツケースにも手を伸ばし、開ける。

そこにも、ごくごく一般的な衣類が収められていたのだが、ひとつだけ異質なものがあつた。

「なに、それ」

イズミは呆けた表情で呟く。

そんなイズミとは対照的に、ダーシェンカは何食わぬ顔で異質なものをスーツケースから取り出していた。

「なにして、ナイフではないか」

ダーシェンカは不可解なものを見るような眼をイズミに向けながら答える。

ダーシェンカの手の中には、か細い彼女には到底釣り合わない無骨なアーミーナイフが握られていた。ダーシェンカはさして驚く様子もなく、皮で出来ているらしい鞘からナイフを抜く。

引き出されたナイフを見て、それが並大抵の物でないということは素人のイズミにもはっきりと分かった。第一にナイフの大きさが目算で刃渡り三十センチほどという時点で並大抵ではなかったし、その刃も普通ではなかった。普通のナイフなら金属光沢を持っているはずなのに、このナイフにはそれがなかった。暗灰色の刃は部屋の明かりを反射してやっと鈍く輝いているぐらいだ。特殊な強化プラスチックか何かで出来ているのだろう。

驚いて言葉も出ないイズミを尻目に、ダーシェンカはナイフを弄ぶ。ペン回しでもするかのように軽々と手のひらで回してみせる。抜き身の刃を、だ。

「あ、危ないだろ！」

やっとのことで言葉を絞り出したイズミに、ダーシェンカは微笑を向けた。

「安心しろ、このナイフに慣れる為に軽く遊んでるだけだ」

「余計危ないだろ！ 抜き身のナイフをそのままって、危なすぎるだろう。というか、なんでこんな物が……」

「なんでって、ナイフが私の主な武器だからな。二百年の時が過ぎてもその情報はきちんと死体商の間で伝え続けられていたと考えると、少し感慨深いな」

ダーシェンカは遠くを見つめるような目つきで、自分の手の中に納まっているナイフを眺めていた。

「武器って……僕、そんなに危ない状況にいるのかな？」

イズミは情けなく言葉を漏らす。

命を狙われている。その状況がどうしてもしっくりこない。

どんなに治安の悪化が叫ばれる昨今であろうとも、この国に生きる人間で逼迫して死を身近に感じている人間はそうはいないだろう。

この国に生きる者にとって、生きていくということはどこかしら常識めいている。生きる苦勞に大小はあれど、自分が誰かに殺されると思いつながら生きていくような人間はいない。

少なくともまっとうに生きていく人間の中には。

イズミもまっとうな人間の中の一人だった。

命を狙われていると宣言され、不可解な少女と同居することとなり、見たこともないような無骨なナイフを目にしてなお、自分が命を狙われているとは思えなかった。

「いや、そんなに危なくはないぞ？」

ダーシェンカはこともなげに、イズミの日和つた考えを後押しするセリフを発した。

そして続ける。

「ネクロマンサーを狙う輩は極少数だし、襲撃を喰らわずに一生を終えるネクロマンサーだって少なくない。もっとも、その中には早世も含まれるがな」

ダーシェンカはニヤリと笑う。彼女なりのジョークなのだろうが、今のイズミには全く笑えなかった。

「あ、あのさ。やっぱりお風呂入ってきたら？ 清潔のためについていうか女の子だし……」

「そうか？ 必要ないのだが……」

「いいから！」

タオルを渡して、彼女の背中を押すとダーシェンカはしぶしぶ洗面所に向かっていった。

「そうだ、ダーシェンカ。部屋は——」

「睡眠中が最も、襲われやすい。私が常にそばに居るためにも、お前の部屋が最適だ」

「はいっ!？」

振り返ったダーシェンカは真顔で言い放った。

2

「お父さん、本当にあれで良かったの？」

イズミが脂汗を滲ませている頃、空港に向かって走っているタクシーの中で、イズミの母が隣に座っているイズミの父に訊ねた。

「アレで良かったに決まってるじゃないか。ダーシェンカはあの死体商が扱う死体の中で最強だったんだから」

「そうじゃなくて！ イズミに死者蘇生をさせた事が良かったのか聞いてるんです！」

母は父の太腿に拳を叩き込んだ。

「くっ、うお……ご、ごめん」

父の目が見開かれ、次の瞬間には苦悶の表情に変化する。

「ごめんじゃなくて、あれでよかったのかどうかを教えてください」

父は離れた所にいる息子と同じように、額にじっとりと脂汗を滲ませていた。

「うう……良かったかどうかはイズミが決めることだけど、父親としては息子のためになると信じてるよ……」

太腿をさすりながら答えた父を、母はポカンと口を開けて見つめた。

「患者さん以外に対しても人間らしいこと言えるじゃないですか、お父さん」

「惚れ直した？」

「そうやって誤魔化さないでください！ 私たちは親のくせに息子の寿命を縮めたのに、は変わりないんですから！」

母が頬を赤らめながら怒鳴ると、父は満足そうな笑みを浮かべて言葉を紡ぐ。

「寿命なんて簡単に縮むさ。生きていくストレスから、生活習慣のの歪みから、流れる時間まで。ありとあらゆるものが寿命、すなわち魂を削り取っていく。イズミにとってはその一つに死者蘇生があっただけだよ」

父は薄い笑みを称えながら母を見据える。その視線に反応して母は肩をビクリと震わせた。

しばらく母を見つめていた父だったが、やがて視線を流れる窓の景色に映る。

気が付けばいつの間にかタクシーは高速道路に入っており、周りをものすごい速度で車が駆け抜けていく。

「なんであんなに急ぐんだろうね。時間は割とあるんだろうに」

父は独り言のように呟いた。

運転手は夫婦の不可解な会話にもこれと言って反応を示さず、隣の母も俯いたままだ。

父は軽いため息を吐き、頭を振る。

「大丈夫。イズミは優しく強い子だから。きっと、大丈夫さ」

父は流れる雲を見つめながら呟いた。

「そうよね、イズミは優しい子だものね」

母がようやく顔をあげて答える。

会話がきちんと噛み合っているにも関わらず、それを聞いていた運転手は、両方も独り言を言っているようだと感じていた。

山の斜面は余すところなく墓地になっている。薄気味悪いことこの上ない。

「え～それでは、第十一回！ 真夏・真夜中・お寺の肝試し大会を開催します！」

自称親友の佐倉棚和が人の輪の中心で声高に宣言した。

無論、第十一回とかは口からでまかせで、そのテキトーなスピーチに周囲からヤジが飛ぶ。そう、周囲だ。イズミの予想をはるかに上回る人数、なにせイズミのクラスのほとんどの人間が集まっている。

もともと肝試しは夏休み前からクラス単位で計画されており、イズミが極度のビビリだということもとくに察知していた佐倉は、イズミをまんまと奸計にハマたというわけだ。

できることならば目をつむったまま全力疾走で家に帰りたいイズミなのだが、周りの人間の視線がそれを許さない。それにダーシエンカが何やら楽しげにクラスメイトと話しているので、なおさら逃げだすわけにはいかなかった。

「ルールは至って簡単です。くじ引きでペアを決め、そのペアが山頂のお地蔵さんの前に置かれたおはじきをとって来るというものです。なお、くじ引きで同性とペアになっちまった人は……まあ、ドンマイ。それではクジ引き開始！」

「なあ、佐倉」

「なんだ？ ダーシエンカちゃん」

「大変申し訳ないんだが、私はイズミと組んでいいか？」

「俺はいいと思うけど、みんなは？」

佐倉は周囲を見回しながら尋ねた。

「イズミに殺意が沸くが、しょーがないと思うので賛成」

「右に同じ」

「如月くんと組みたかったけど、まあ仕方ないね」

「ダーシエンカちゃんに変なことをしたら五回は殺すからな、イズミ」

次々と賛成の意見が上がるが、イズミにやさしい意見は極少数だった。

クラスメイトに恥を晒さずに済むのはありがたかったが、この申し出がイズミを庇うためのものとは到底思えなかった。

(昼間の言葉から察すると、ネクロマンサー関連っぽいけど……なんなんだろう)

イズミは周囲の人々に礼を言っているダーシエンカを見つめながら心の中で呟く。ちょうどそのときダーシエンカがこちらを見ながら微笑んだ。悪魔的な笑顔と言うのはこういうものを指すのだらうと思わせる、愛らしく恐ろしい笑み。

「……嫌な予感しかしない」

その表情を目にしたイズミは、誰にも聞こえないように呟いた。

「ねえ、なんで肝試しに参加しようと思ったの？」

くじ引きで先頭になってしまったイズミは手渡された懐中電灯をワナワナと震わせな

がら、山の斜面に広がったお墓の間を歩いていた。隣には全く怖がる様子のないダーシェンカがお花畑を歩くかのような軽い足取りで並んでいる。

「イズミの肝がどの程度か測ろうと思ってな」

ダーシェンカはニヤリと笑いながら、恐怖で引き攣りきっているイズミの顔を覗き込んだ。

「じゃあ肝が全くないのが分かったところでリタイアしようか」

「おいおい、振り返ればまだクラスメイトが見える位置でか？ 寝言は寝て言うんだぞ」

「しょうがないだろ？ だ、ダメなものはダメなんだから。それに何か隠してるだろ、ダーシェンカ」

イズミはすくみながらも、隙あらば後方に駆けだしそうな自分の足を必死に前進させながら尋ねる。

「さっきまで恐怖を顔に出さなかったのは立派だったがな、もうすこし落ち着いてだな」

「ねえ、僕の話聞いている？」

「聞いているとも」

「なら正直に」

イズミがダーシェンカを諭そうと立ち止まりかけたその時だった。

「全力で前に走るぞ！」

ダーシェンカがイズミの腕を掴み、俄かには信じられない速度で走りだした。あまりの速さに、イズミは付いていけず、足が絡みあって転びそうになった。いや、普通なら転んでいたはずなのだ。それをその度にダーシェンカが細い腕一本で支え切り、半ば引きずるようにしてイズミを走らせ続けた。

「ちょ！ いきなりなんなんだよ！ 危ないよ！」

イズミはなんとか体勢を立て直し、奇跡的に握り続けていた懐中電灯を振り回しながら、

悲鳴めいた声を発した。

「確か、十分たったら次のペアが出発するんだよな。この肝試しは」

ダーシェンカは不意に立ち止まり、イズミを見ることもなく呟く。イズミは肩で息をし、立っているのも辛そうだというのに、ダーシェンカは平時と何一つ変わらない。汗ひとつ流していない。

「な、今度はなんだよ。いきなり止まって」

「いいから。出発してから何分経っている」

「え？ えっと……五分も経ってないよ」

イズミは困惑しながらもポケットから携帯を取り出し、ディスプレイの時計で確認する。

「そうか。雑魚を片付けるには十分すぎる時間だな」

「は？ 雑魚」

イズミが噴き出した汗を拭いながらダーシェンカを見やった。

ダーシェンカの表情はいつもの表情と変わらないというのに、イズミはダーシェンカが笑っているように見えた。

「ダー、シェンカ？」

「残念なお知らせだ。イズミの命を狙う輩が既に近くにいるらしい」

ダーシェンカの不吉な発言に、イズミが息を詰まらせる間もなく、周囲から不可思議な音が響き始めた。

カラカラと、乾燥させた流木を転がしたような音が響き始める。どこから響いているのか判断できないほどに一面から、小さく、どこか責め立てるような逼迫感をもって。

「な、なんなんだよ、この音は!？」

「うろたえるな。なに、すぐに終わるさ。見たくなければ目をつむっている、それこそ一生もののトラウマになるぞ？」

ダーシェンカはうろたえ始めたイズミを見やり、ニヤリと笑った。

そして、何を思ったのか身にまとっていたワンピースの裾をたくし上げた。闇夜の中にダーシェンカの白い太ももが映える。

何を、とイズミが口走ろうとしたのも束の間。太ももに括りつけられていたサバイバルナイフが姿を現す。スーツケースにしまわれていたダーシェンカの得物だというサバイバルナイフ。明るい場所でさえ光沢を放たないナイフは、暗闇の中ではより一層闇を濃くしたモノに見えた。

ダーシェンカがそのナイフを抜き取ると逆手に構え、前方を見据える。イズミもその視線につられて前方を見る。

見なければよかったと思った。せめて懐中電灯の光を向けなければよかったのだと思わずにはいられなかった。

懐中電灯の光に照らし出された人骨標本が目の前に立っている。人骨を成す骨の一本一本が、いくつもの骨片が集まることで形成されているのだ。そして、人骨の右腕は通常の骨の形をとっておらず、いくつもの骨が集まり大きな槍のようなモノになっている。

さしずめ、中世の騎士の遺骸が目の前に現われたような感覚。

「な、なんだよ……コレは」

イズミは意識せずにいつのまにか後ずさっていた。

「ふっ。気絶しなかったコトは褒めるべきかな？ よーく見ておくんだな、イズミ。これがお前の敵の一部だ」

ダーシェンカは振り返ることもなく述べる。

人骨が乾いた音を響かせながらじりじりと歩み寄ってくる。ここがお化け屋敷か何かならそう珍しい光景ではないのだが、残念ながらなんの変哲もない屋外の墓地だ。

「敵って、なんなんだよ!？」

と、イズミは叫ぼうとしたのだが、声がかすれて言葉にはならなかった。

堂々たる姿で人骨と対峙している眼前の少女を見つめ続けること以外、イズミに出来ることはなかった。

「ここまで綺麗な骨が出てくるのは、遺体を火葬する日本ならではの、といったところかな？」

イズミにダーシェンカの表情は伺いしれないが、声音から察するに笑っているようだった。

人骨は二人との距離をゆっくりと縮めてくる。人骨との距離が縮まるたびに、イズミは後ろに下がりたいくなるのだが、ダーシェンカを残しては下がれないというちっぽけなプライドがそれを阻んでいた。プライドの矮小さは、ダーシェンカの背後という今現在のイズミの立ち位置が物語っている。

人骨があと五歩程度進めば、右腕に構えた槍の間合いに入るという位置まで近づいてきた瞬間だった。ダーシェンカは力強く地面を蹴り跳躍する。そう、まさに跳躍。七メートルはあろうかという距離を、たった一步でゼロにしてしまった。

「この距離に入ってしまうと、その槍はまさに無用の長物だな」

ダーシェンカは頭蓋骨を見据えながら物怖じすることなく呟くと、左足を軸に回転しながら、逆手に構えていたナイフを頭蓋骨めがけて横薙ぎに払う。

もともと骨片の集まりだった頭骸骨は、粉々に砕け散った。月明かりを反射しながら地面に舞い落ちる骨の欠片は不思議なことに、桜の花びらが舞う様に似ていた。

ダーシェンカの動きはなおも続き、回転の勢いを殺すことなくナイフを振るい続ける。次々と人骨が骨片になり、地面にヒラヒラと舞い落ちていく。

人骨はものの数秒で、ダーシェンカの体に触れることもなく、地面に残骸を晒していた。

「お、終わったの？」

イズミは地面に散乱した骨片を極力意識しないようにしながらダーシェンカに歩み寄る。

「ん。まあ、ひとまずはな」

ナイフを再び太ももに括りつけたダーシェンカが肩をすくめ答えた。その表情はどこか優れない。

「どうかしたの？」

「地面を見てみろ」

ダーシェンカは足元をクイクイと指す。

「骨が……散らばってるだろうね」

イズミは固い唾を飲み干しながら答えた。無論、骨片散らばる地面を見るような胆力はイズミにはない。視線はダーシェンカに向けたままだ。

「君は尊敬に値するほどの怖がりだな、イズミ」

かぶりを振りながら呟くダーシェンカに、イズミは素早く「余計な御世話だ」と反論す

る。

「怖くて地面を見られないイズミのために説明してやろう。地面には、たったいま私が粉微塵にした骨が散らばっている」

「その状況を思い浮かべました」

「よろしい。では何故この骨はこんなにもバラバラになっているのだろうね」

「ダーシェンカが粉々にしたから……って、ついさっき自分で言ったよね？」

「いかにも。だが、見えていたか？ イズミ。さっきの人骨はもともと骨片の集合体に過ぎなかったことが」

「あ、そういえば、そうだった……」

「つまり、だ。あの人骨はもともと粉々になるように生成されていたんだよ」

ダーシェンカは肩をすくめ、溜息を洩らした。

ダーシェンカの言葉の意味がいまいち理解できないイズミは眉を寄せる。

それを見たダーシェンカが「だろうな」とばかりに力なく微笑み、続けた。

「さっきの人骨は困だったんだよ。イズミを狙っていますというスタンスを取りながらも、実際は見ての通りの役立たずだ。だが、意味はあった。イズミには“まだ”見えないだろうが地面に散らばる骨片の一つ一つには霊体エーテルが込められている」

「えー、てる？」

「分かりやすく言えば魂だ。イズミにやさしい言い方なら魔力、といったところかな？」

「ああ、やっぱりオカルトな世界なのね。そうは思いたくは無かったんだけどさ」

「ふっ、肝試しの仕掛けとかじゃなくて残念だったな。で、話をもとに戻すとだ。私はこれを仕掛けてきた敵の位置を探ろうとしているのだが、無数に散らばった骨片のエーテルに攪乱されて探れないというわけだ」

「ああ！ つまり敵の術中にハマったというわけか」

イズミは思わず手を打ち合わせるという前時代的なリアクションを取っていた。肝試しによって生じた緊張感と、目の前で起きた非現実感を伴ったリアルを体験したことによって、イズミの頭は混乱状態だった。混乱、というよりは脳細胞の隅から隅までがストライキを起こし、機能しなくなっているという感覚に等しい。

ありのままを受け入れられる心理状態、ではなく、ありのままを受け流すような心理状態。

「まあ……そうなるな。すまない、私の不手際で敵を逃してしまった」

ダーシェンカは苦々しく顔を歪めた。

確かに自分の命を狙っている者を取り逃がしてしまったということは重大な過失なのかもしれないが、イズミはどうにもダーシェンカを責め立てる気にはなれなかった。

あのような出来事が起きてもなお、自分の置かれている状況を理解できていないと捉えることもできるのだが、それ以上に、イズミはたったいま守ってもらえたことに対して感謝していた。

「いいよ、別に。気味の悪いガイコツからは守ってくれたんだし、カッコよかったよ？
さっきのダーシェンカ」

イズミは深く考えずに思ったことを述べた。薄気味悪い夜の墓地には不釣り合いな優しい微笑みを浮かべながら。

ダーシェンカは、その何気ないイズミの微笑みに言葉を失った。イズミの能天気さを呪うべきか、感謝するべきかは判断しかねたが、ダーシェンカにとってはありがたい微笑みだった。

「まったく……本当に君は平和ボケだな」

ダーシェンカは呆れたような笑みを浮かべながら肩をすくめた。

「褒め言葉として受け取っておくよ。ときにダーシェンカ？」

イズミも肩をすくめて応じる。

「なんだ？」

「いい加減、恐怖のキャパシティーが限界値を超えそうなので肝試し、リタイアしてもいいかな？」

イズミは照れ臭そうに頬を掻きながらボソボソと呟く。

よくよく見てみれば、イズミの足はプルプルと小刻みに震えている。

「まったく、君はよく分からないヤツだな。さっきのが耐えられたんならこの先に怖いものなんてないじゃないか」

「さっきのが限界だったの！ もう立ってるのもキツイよ」

イズミは泣きそうな表情でダーシェンカに懇願する。

先ほどの微笑みが嘘のような情けない姿に、ダーシェンカは苦笑を禁じ得なかった。その苦笑も、イズミの人柄を気に入って漏らしたもののなのだが。

「わかったよ。だが、イズミもリタイアするのは恥ずかしいだろ？」

ダーシェンカの問いにイズミは「まあ、確かに」と頷いた。

「さっきの失態のお詫びだ。私がひとつ走りして、おはじきを取って来てやるからここで少し待ってろ」

ダーシェンカはそう言うと、イズミの返事も待たずに坂道を駆け上っていった。先ほど人骨との距離を一瞬で縮めた跳躍を繰り返して、あっという間に闇の中に消えていった。

「あ、ありがたいのはありがたいんだけど……一人にされるのもイヤなんだけどなあ」

イズミはダーシェンカが消えていった暗闇を見つめながら呆然と呟いた。

「まったく、調子が狂うではないか。あんな風に微笑まれては……」

常人なら登り切るのに五分はかかる坂道をももの数十秒で登りきり、目的のおはじきを取り、それを握りしめながら一人呟いた。

自分を蘇らせた、何も知らない優しい屍使い(ネクロマンサー)を想って。

「何も知らないから、あんな風に微笑むことができるのだろうか。まあ、そんなことはどうでもいいことか。私はイズミを狙ってくるクズどもを葬ればよかった。イズミが“覚醒”するまでは……」

彼女は拳を開いて、握り締めていたおはじきを見つめる。蘇ってすぐだったら粉々になっていただろうおはじきも、ちゃんと形を留めて掌に乗っている。力の加減が上手くなっている証拠だった。

「イズミが覚醒したら……って、私は何を考えているのだ。くだらない」

ダーシェンカは頭を強く振って、思い浮かべそうになったモノをかき消した。

「早く戻らないと。イズミは馬鹿みたいに怖がりだからな」

軽い笑みを浮かべ、ダーシェンカは来た道を引き返し始めた。

くだらない考えを頭から追い出したダーシェンカがイズミのもとへとたどり着く数十秒の間に考えたことは、近くに迫っている敵をいかにして排除するかだけだった。先ほどの人骨の形成具合や陽動を使った逃走などから見て、敵はさほど恐れるべき能力の持ち主ではないらしい。それでも、それすらも作戦の一部という可能性もあるから油断できない。

敵の位置などがつかめていない現状からすれば、イズミを狙って敵が近づいてきたところを迎え撃つ以外に方法はないのだが、それではリスクが高い。

何せイズミは魔術的なことに関する知識がゼロだし、身体能力も高くない。

「やはり、ある程度は知識や護身の術も身につけて貰わなければ駄目か」

ダーシェンカは悔しそうに歯噛みしながら跳躍を続けた。

その後、肝試しは滞りなく終了した。地面に散乱した骨に気付くものがないかイズミは冷や冷やしていたのだが、風のある夜だったので骨とは判断できないほどにバラバラに散らばってくれたらしい。イズミも無事、ダーシェンカのおかげでリタイアせずに済んだ。

の、だが。

「イズミ、キミは本当に情けないな……」

「面目次第もございません」

クラスメイトや佐倉と別れた途端に腰が抜けて地面にへたり込んでしまったイズミは、ダーシェンカに肩を借りながら帰路を辿っていた。

時折すれ違う人達には怪訝な視線を向けられたが、今のイズミには気にする余裕もなかった。

人骨に襲われるというトラウマものの体験に加え、今はダーシェンカの顔がすぐそばにあるのだ。他のものに意識を向けろと言う方が無理な話だ。

「ねえ、ダーシェンカ」

「なんだ？」

ダーシェンカを極力意識しないように虚空を見つめ、イズミは声を掛ける。しかし、言葉を交わすだけで吐息が触れ合うようなこの距離ではそれも無駄な努力だった。自分のそんな努力に呆れたイズミは苦笑いととも溜息を洩らす。

自分の努力に諦めのついたイズミは、真正面からダーシェンカを見据えた。

「僕って、本当に狙われてるんだね。まだ実感ないよ」

「実感を持ってもらわなきゃ困るんだがな」

ダーシェンカは苦笑しながら呟く。

「ははっ、僕もそう思うよ。でき、気になったことがあるんだ」

イズミの言葉にダーシェンカは首を傾げた。それを見たイズミは続ける。

「僕はほら、命を狙われてる実感はなくても、さっき起こったことに関してはしっかりと実感がある。この通り、恐怖で立つのもままならないしね」

照れくさそうに笑ったイズミに「まあ、仕方ないさ」とダーシェンカがフォローを入れる。「そう、仕方ないくらい怖かった。だから気になったんだ。ダーシェンカがどうしてこんな怖いことにワザワザ関係しているのかがね。ダーシェンカが二百年前の人間ってのが本当ならお金とかが目的な訳じゃないでしょ？」

「まあ富が目的ではないな。なにせ私は貴族だったから、お金に困ったことはない。目的が何かと聞かれたら、ほとんどの者は未来が見たかったから、と答えるのだろうな。私のような死者を生ける屍リビングデッドと呼ぶのだが、リビングデッドは蘇生されるまで最長で三百年ほど肉体を保てる。だから、ネクロマンサーを守護するという役目を負う代わりに遥か未来が見れるというわけだ。知識欲旺盛な者にとっては魅力的だろ？」

「ほとんどの者は、ってことはダーシェンカは違うんだね？」

「まあ、な。私は……」

ダーシェンカは何かを言いかけて、それっきり黙り込んだ。

「ああ、いいよ。厭なら無理に答えなくても」

言いよどむダーシェンカに、イズミは手をひらひらと振る。

「そう、か？ ありがとう」

「お礼言われるほどのことじゃないよ。照れるって」

「そ、そうか……。なあ、自分は答えなくて尋ねるのもどうかとは思っているけど、私もイズミに聞いていいか？」

伏し目がちに尋ねるダーシェンカに「どうぞどうぞ」とイズミは笑顔で応じた。

「イズミは、理不尽に命を狙われて、なんで自分がネクロマンサーなんだ、とか弱音は漏らさないのか？ その、イズミはなんというか……」

「肝試しでビビリまくるヘタレなのに？」

「あっ、いやっ！ 別にそういうことではな……あるな」

ダーシェンカは申し訳なさそうに頭を垂れる。

「いいっていいって！ 事実なんだし。弱音を漏らさないのは……なんでだろうねえ。自分が命を狙われてるって実感が湧かないってのもあるけどさ、理不尽なことっていくらでもあるじゃない。才能だとか、生まれた国だとかさ。でも一番の理由は、まだ痛い目に遭ってないから、じゃないかな？ さっきはダーシェンカがちゃちゃっと片付けてくれたし。痛い目を見れば弱音なんかあふれ出てくるよ、きっと」

イズミは照れながら頬を掻いた。

ダーシェンカは黙ってイズミを見つめ続けている。どこかしらイズミの答えに満足していないかのように。

イズミも自分自身がどうして弱音を漏らしていないのか不思議だった。自分の意思でしたことが元で命を狙われるならともかく、この場合は確実に自分の意思が関与していない。男に生まれたのだからこうしろ、だとか女に生まれたのだからこうしろとかいう状況の数十倍酷い状況だ。

それに加え、自分が不老不死の秘薬だというのに、肝心な自分自身は不老でも不死でもないただの人間というのがもの悲しい。

「死んだ人を蘇らせられるなら、魔法ぐらい使えてもいいんじゃないかなあ、僕」

「使いたいのか？ 魔法、というか魔術を」

イズミの突拍子もない質問に、ダーシェンカがまんざらでもないように応じる。

「使えるの？ 魔法」

「ネクロマンサーの家系である以上、魔術師の素質は十二分にある。だが、イズミの思うほど魔法は便利じゃないぞ？ ことこの時代においては、日常生活に全く役に立たないからな」

力ない笑みをイズミに向けた。

「使えるものは使いたってのが人情じゃない？」

「私としてもイズミが自衛手段を多少なりとも身につけてくれることはありがたいし、なにより教えようとは思っていたが……魔術だけはお勧めしないよ」

「どうしてさ」

突然暗くなったダーシェンカの表情に、イズミは眉を寄せる。

「イズミが私を蘇らせたのだから魔術なんだよ。まさかそれがどういうことかも聞かされてないのか？」

ダーシェンカの言葉にイズミはあっ、と声を漏らした。

『寿命と引き換えに生き返らせる』と両親は説明していた。それが人を蘇らせることに関するだけの代償だと思い込んでいたイズミにはダーシェンカの言葉は少なからず衝撃だった。

「……聞いてはいたようだな。そうだ、魔術を使うということは大抵の場合魂を、つまりは寿命をすり減らすことにもつながるんだ。使う気が失せただろ？ 自衛手段としては、

体術を教えよう。というか、覚えなさいと言うべきかな」

「そういうことなら……そうします」

「よろしい。でも、魔術の知識はあって損はしないだろうから今後のために教えていくつもりだ」

「夏期講習と合わせると、なかなか楽しそうな状況になりそうだね」

肩を落とすイズミに「まったくだな」とダーシェンカは応じる。

「まあ、今日はもう遅いし、イズミも疲れただろうから早く休もう」

「ダーシェンカよりは疲れてないだろうけどね」

イズミは現状を鑑みながら苦笑う。

女性に肩を借りて歩くということは、恥ずかしいことランキングのかなり上位に位置していることだし、墓場でおはじきを取りに行ってもらったことだって同じだ。人骨の件はまあ仕方ないと片付けられるにしても、だ。

「そう、だな」

ダーシェンカは寂しそうに呟くだけだった。

何かしら小言を言われるだろうと考えていたイズミは肩透かしを喰らった気分だったが、

ダーシェンカがこれ以上何かを言いそうにもない雰囲気だったので、黙って家まで帰ることにした。

4

「ダメだダメだダメだ！ 何度言ったらわかるんだ！ 敵の間合いの外にいることを第一に考え、抜け道のない場所に入り込まないようにすることを第二に考えるべきだ！ ところがキミの今の状況はどうだ！」

「背後には壁があり……目の前にはダーシェンカの拳が突きつけられています」

「分かっているなら、次はこうならないように気をつけろ」

そう言うとダーシェンカは、イズミの眼前に突きつけていた拳をゆっくりと下ろした。

それと同時にイズミは胸を撫で下ろす。顔には汗がびっしりと滲み、制服のワイシャツはピッチリと皮膚にへばりついていていた。

近くの山の中で体術の訓練をするようになってから一週間ほどが経過していた。

ヘトヘトになりながら山小屋の壁に追いつめられるのがイズミの習慣になりつつある、そんな今日この頃だ。

体術を習うと聞いたイズミは、何かしら武術の型を覚えさせられると想像していたのだが、そんなことは一切なく、一周間叩きこまれていることはひたすらに敵の攻撃を回避するための術だった。

ダーシェンカの目にもとまらぬ蹴りやパンチをひたすらに避け続ける、それがイズミ

に課された訓練だった。ダーシェンカの攻撃を一発でも喰らったら、即あの世に旅立ちかねないので、全て寸止めではあったが。

最初こそ動くこともままならなかったイズミではあるが、ダーシェンカのしごきによって、四割程度は攻撃をかわせるようになってきた。もっとも、ダーシェンカは実力の三割程度しか出していないらしいが。

なぜ回避術しか学んでいないかという、付け焼刃な攻撃ほど残念なものはないというのももちろんあるのだが、なんでもネクロマンサーの魂を奪う方法というのは、特殊な魔術が掛けられた刀剣類でネクロマンサーの体をなます切りにするのが主らしいからだ。他にも儀式やらなにやらと種類はあるらしいのだが、そういうのは色々と時間が掛るので余り好まれないらしい。

そんなわけでひたすらに回避術を学んでいるわけなのだが、ダーシェンカの及第点には程遠いらしい。

「まあ、イズミはよくやっているとは思うよ」

ダーシェンカはイズミとは対照的に涼やかな表情で呟く。

山小屋の壁に寄り掛かって返事するのもままならないイズミのために、イズミの鞆からタオルと飲み物を出して渡してやる。

軽く会釈してそれを受け取ったイズミはゴクゴク喉を鳴らせながらペットボトルに入ったスポーツ飲料の七割ほどを一気に胃に流し込んだ。

「ぶはあ！ 生き返る！ このために修行してるようなもんですねえ」

「あのなあ、イズミ。もう何度言ったか覚えてないが、そんなに一気に飲むとそのあとに地獄を見るぞ。というか、何度も見てるだろ？」

ダーシェンカは苦笑いを浮かべながら座り込んでいるイズミを見下ろす。出来の悪い、しかし放ってはおけない生徒に教師が向ける、あの優しい苦笑いだった。

「分かってはいるんだけどね……こればかりは」

クスクスと笑うイズミに、ダーシェンカは大きなため息を吐きだした。

ついこの間怖い目に遭い、いまだって決して楽しくはない行動をしているというのに、ここまで明るく笑えるイズミの神経はダーシェンカの理解の範疇を軽く超えていた。

イズミをただのバカと片付けてしまえば簡単なのだが、それも何かダーシェンカの中で引っかかる。イズミが自分で口にした通り、まだ痛い目を見ていないからヘラヘラしてられるというのも十分あり得る話なのだが、ここ一周間のイズミを見る限りそれも案外当てはまらない気がする。

命の危機には瀕していないものの、悲鳴をあげたくなるほどの厳しい訓練をつんできた。

攻撃は当てないにしても、持久力を鍛える訓練は、これといって激しい運動をしていなかったイズミにとっては常軌を逸していたと言っても過言ではない筈だ。

それでもイズミは泣きごとひとつ言わずダーシェンカの指示に従い続けている。

ダーシェンカとしては「お前が僕をきちんと守ればいいだけだろ！」ぐらいの暴言を吐かれることは覚悟してこの訓練を始めたのだが……。

本来、リビングデッドとは自分の力だけでネクロマンサーを守らなければならないのだ。

イズミの無知に付け込んで自分の負担を軽くしようとしていると取られても仕方のないことを、ダーシェンカはしているのだ。

本当はそんなことをするつもりは一切なかった。だが、イズミの人柄がこの行動を選択させた。

魔術的な常識に関して無知だから利用しやすいという理由からではなく、無知から来るイズミの優しさがダーシェンカにこの選択をさせた。

「まったく、私はなにをやっているんだろうな……」

ダーシェンカは物思いの末に呟いていた。口元に小さな笑みをたたえて。

「あ！ 全然進歩がないからってそういうこと口にしないでくれる？ こっちは一生懸命やってるんだから」

「違う違う。さっきも言っただろ、イズミはよくやってると。まあ、及第点には程遠いがな。そうではなくて、私が言っているのは私自身のことだよ」

恨めしそうに見上げながら呻くイズミに、ダーシェンカは手をヒラヒラと振りながら弁明する。

「そう、なの？ ダーシェンカはなんの落ち度もないと思うけど……食費はなぜか三人分増えたけどさ」

「何か言ったか？」

「いいえ、なんにも！」

イズミは口を固く結び、大げさに頭を振った。

「……白状すると、イズミ。キミはこんなくだらない訓練を積む必要はないんだ。リビングデッドというものはそもそも、ネクロマンサーの手を煩わせることなくネクロマンサーを守護しなければならないんだ」

イズミが怒りだすとは思ってはいないものの、若干の怯えを含んでダーシェンカは語りはじめた。

イズミは予想通り怒り出しもせず、黙ってダーシェンカの顔を見上げている。

「少し長くなるが、休憩だと思って聞いてくれ……」

ダーシェンカはそう言いながらイズミの横に座り、続けた。

私たちリビングデッドは、ネクロマンサーを守護する道具となるために自らの意思でその生命を断つ。そのうち目覚められるわけだから仮死状態になるともとれるが、運が悪ければそのまま死ぬ訳だしな。

生命を絶つとは言っても自殺するわけじゃない。リビングデッドを作る魔術師に、まっとうな人間としての生命を断ち切ってもらうんだ。それ以後、リビングデッドには肉体

の崩壊を防ぐ固定化の魔術、身体能力を飛躍的に上昇させる肉体強化の魔術、さらに二つの制約が架せられる。

一つ、蘇生させてくれたネクロマンサーを殺すことはできない。

二つ、感覚を所有できない。

一つ目の理由はすぐに分かるだろ？ 蘇生してくれたネクロマンサーを裏切れないようにするためさ。そいつがどんな下衆野郎だとしても。

まあ、仮に危害を加えられるとしてもリビングデッドは蘇生させてくれたネクロマンサーが死ぬと、自分も死ぬのだから。ネクロマンサーとリビングデッドは魔術的パスで繋がっているから、それが切れるとリビングデッドは生きていけないわけだ。

だが、安心しろ。リビングデッドが死んだとしてもネクロマンサーは死なないから。

さて、二つ目の理由も重要だ。これこそがリビングデッドと普通の人間、さらには魔術師とすらも一線を画するものだ。

イズミも墓地で見ただろ？ 私の並々ならぬ身体能力を。あんなの並の人間なら絶対に不可能な動きだ。あとはイズミと握手したときの怪力もそうだ。あのときは感覚がないことに慣れていなかったから力の加減が上手く出来なかったんだ。

魔術師なら魔術で肉体強化を施して同等の動きが可能だが、並の精神では一分持たないだろうな。体の限界を優に超える動きをするのだから激痛が走る。

だが、リビングデッドは違う。感覚がないからその動きを継続することが可能だ。

つまりは、究極のドーピングだな。

おい、そんな悲しそうな顔をするなよ。私は自分の意思でリビングデッドになったんだし、蘇生してくれたネクロマンサーがイズミで本当に良かったと思ってるんだから。

そう、ネクロマンサーだ。リビングデッドはネクロマンサーを守護するために存在する。

別にリビングデッドじゃなくてもネクロマンサーを守護できる存在ならいるさ。だが、そいつが不老不死と言う果実に目が眩まないとは限らない。だから絶対服従の道具が必要になった訳だ。

それが私たちだ。

道具に成り下がるといっても悪いことばかりじゃない。前に話したように遥か未来を拝めたりするし、三代は遊んで暮らせる報酬が遺族に支払われることだってある。

じゃあ、なんでネクロマンサーは自分で自分の身を守れないんだろうな。ネクロマンサーの素質は、突然変異以外は血統による。如月家がそうであるようにな。

家系がそうなら前もって何かしら自衛手段を取っておいてしかるべきだろ。だが、できないんだ。

ネクロマンサーは十六歳を迎えるまでは全くの真人間だからな。魔術の素養なんてありやしない。普通の人間が自衛のための魔術を学ぼうなんて生後一週間の赤ん坊に相対性理論を叩きこもうとするぐらい無謀なことだ。

仮に、銃火器の類を揃えたとしても一流の魔術師の前では水鉄砲同然だからな。

まあ、イズミのようになんの知識も与えられていないというのは珍しいパターンだが、余計な不安を与えたくないという両親の計らいなのだろうな。

ともかく、だからリビングデッドが必要になるわけだ。

「ねえ、ちょっと待って。十六歳になってからリビングデッドを蘇生させて護衛してもらってのは理解できたけど、じゃあそれまではどうするの？ 誘拐とかされて監禁され続けたりしたら」

イズミの言葉にダーシェンカの表情が曇る。

「……あまり言いたくない事柄だったのだが、聞かれてしまったらしょうがないな。ネクロマンサーの子供は生まれるとすぐに、ある呪術を掛けられる。誘拐や監禁などで行方が知れなくなった場合は遠隔操作でその子供の命を絶てるという呪術だ。たとえ普通の身代金目的で誘拐されたとしても、呪術が発動される場合がほとんどだ。そこまでするほど不老不死は禁忌中の禁忌なのだよ。過去にはネクロマンサーを根絶しようとする動きまであったほどだ。まあ、私の生きていた時代ではすでにそういう風潮もなくなっていたがな」

「やっぱり僕にもその呪術が掛けられてるの？」

「確実に、な。だが安心しろ。その呪術を発動できるのは両親と両親が全幅の信頼を置いている人間の計三人だけだ。彼らが死ねばイズミは晴れて自由の身だ。自由の身になったときに自身を守れるようにリビングデッドを蘇生させるのだよ」

「それは分かったけど……それがどうして僕が訓練を積まなくていい理由になるんだよ」

「どうしてって……寿命を縮めてまで雇ったボディガードに『私だけじゃ守りきれないのだからあなたも強くなりなさい』って言われてるようなもんなんだぞ？」

「まあ……普通は怒るものなのかな？ よく分からないや」

頬を掻きながら笑うイズミにダーシェンカは啞然とした。

イズミは分かっているのだろうか。ダーシェンカが敵の前に敗れた場合、自分は確実に命を落とすということ。そんな全幅の信頼を置かねばならない相手から「私は力不足です」と言われているようなものだということ。

ダーシェンカは口にはしていないが、自身がイズミを守りきることにことに関してなんの不安も抱いていない。どんな敵が来ようと始末する自信はある。

なんの問題もない。そう断言できる、ハズだったのに。

思わぬところから問題が発生してしまった。

「……イズミは本当に馬鹿だな」

ダーシェンカは顔を膝に埋め、呟く。その先に続く「君がそんなに優しくなければ、私はこうも悩まなかったのにな」という言葉はぐっと飲み込んで。

「ば、馬鹿はないだろ!? こっちは必死でダーシェンカの負担を減らそうと頑張っているのに！」

「ふふ、そうだな。悪かった、訂正するよ。全米が涙する大馬鹿野郎だ」

「そうか、全米が涙する……うん、確実に褒められてないよね」

「人生に幸も不幸もない。ただ考え方でどうにでもなるのだ」

「偉大な戯曲作家の言葉で誤魔化さないでくれるかな？」

そっぽを向きながら物憂げに呟いたダーシェンカに、イズミはジト目をぶつける。

「なんだ、知ってたのか？」

「全米が泣くほど馬鹿じゃないんでね」

「それは失礼した。それじゃあ練習を再開しようか」

ダーシェンカは自分の頭の中の靄を払うように明るい笑みを浮かべ、立ちあがる。

イズミもそれに習って立ち上がった。

「あーあ。この訓練が無駄になってくれれば一番なんだけどなあ」

「まあ、訓練とは大概そういうものだな」

大きく伸びしながらかぼやかイズミに、ダーシェンカは肩をすくめながら苦笑う。

日が傾き、二人の顔が赤く染まり始める。いつの間にかそんな時刻を迎えていた。

ダーシェンカはイズミに伝えていなかったが、日が落ち切れれば襲われる可能性は上がる。

それでもダーシェンカがそんな時間まで訓練を続けるのには理由があった。

イズミを囷に敵をおびき出す。それがダーシェンカの作戦だった。

守り切る絶対の自信があるからこそ取れる作戦。

一週間これを継続しているのだが、敵はなかなか現れない。

墓地で遭遇したということは何らかの準備をしていたはずなのだが。時間が経てば経つほどダーシェンカの不安は少しずつ大きくなっていく。

何か大きな罠にはめられそうになっているのではないかと。

特に打つ手のないダーシェンカは、それがただの杞憂に終わることを祈る以外に出来ることはなかった。

5

日が暮れかけているとはいえ、街はまだ人で賑わっているというのに、その場所は薄暗く、どこからか漂ってくるゴミの臭いとあいまって、不穏な空気を醸し出していた。

路地裏――

ビルとビルの合間に蟻の巣のように形成される空間。

平時は薄暗く気味が悪いだけのこの空間も、このときばかりは勝手が違った。明らかに外界とは違う空気が流れていた。

「終わったか？ アルシェラ」

夏を過ごすにはあまりに無謀なロングコートを羽織り、目深に黒のハットを被った長身の男が、路地裏の暗がりに向かって呻くように呟く。

「はい、これだけ数を揃えれば十分でしょう。墓場の陽動のおかげで、ヤツらは夜にばかり気を張ってるでしょうし」

暗闇の中から長身の男とは対照的な、若い女のよく通る澄んだ声が上がる。

声の元には、糊の効いたパンツスーツを、これ以上うまく着こなせる者はいないと思わせるほどに着こなしている二十代前半と見える、冷たい表情の白人女性がいた。

アルシェラと呼ばれた若い女は地面に膝をつき、冷たい表情と言わしめる要因の一つである、切れ長なアイスブルーの瞳を地面に転がるナニかに向けている。

アルシェラの視線の先には、十人ほどの男の体が累々と転がっていた。その殆どが、声とも音ともつかないようなものを上げながら、芋虫のようにのたうっている。

男たちの顔つきはいずれも路地裏に相応しい、一般人なら思わず目を背けたくなるような強面だった。

「腐ったミカンと擲揄されるような社会のはみ出し者の割には、粘るな。この男たちは」

長身の男はのたうつ男の一人に歩み寄り、靴の先で男の脇腹を小突く。

「失礼ながら、腐ったミカンと言うのはもう少し年端のいかない者を言うのではないでしょうか」

アルシェラはすくと立ち上がり、これと言って感情の宿らない眼を長身の男に向ける。

男は身長百九十センチ前後といったところだが、それと比較するとアルシェラの身長は百七十センチ強はありそうだ。女性にしては間違いなく長身の部類に入るだろう。

「む？ そうなのか。まあ、世界の理からはみ出している我々からしたら瑣末な違いだろ」

相変わらず男の表情は伺いしれないが、声の抑揚から察するに、楽しそうだ。

「そうですね」

楽しそうな男の態度とは裏腹に、アルシェラは無愛想に応える。

二人が他愛もない会話をしているうちに、地面の男たちはピタリと動きを止めていた。

「終わったようです」

「なんだ、やはり所詮は腐ったミカンか。ツマランな」

男は吐き捨てるように呟くと、声のトーンを二段ほど落して「立て」と呟いた。

それはもはや声と表現するよりは、小さな地響きと言った方がしっくりくる、薄気味悪い響きを持ったものだった。

男の声に応じ、地面に伏していた男たちが一斉に立ち上がる。気味の悪いことに、全員が全員、全く同じタイミング、全く同じ動作で立ち上がった。

男たちはそれぞれにバラバラな方向を向いている。顔には表情がなく、視線は皆一様に虚空をさまよっていた。

「散れ」

長身の男が再び地響きのような声を上げると、男たちはその虚ろな表情とは裏腹に、しっかりとした足取りで路地裏の闇に消えていく。

長身の男はその様子を眺めながら鷹揚に頷くと、ハットをより目深に被り直し、人で賑わう表路地に踵を返した。

「アルシェラ、私は少し疲れたよ。ホテルで暫く眠ることにするから、君だけでネクロマンサーを捕まえてきてよ」

振り向きもせず、気だるそうにヒラヒラと手を振りながら男は歩いて行く。

「了解しました」

アルシェラは男のそんな態度にも一向に感情を示さず、無機質に返答する。

「あ、そうそう、」

長身の男は何か思い出したのか、不意に足を止め振り返った。

「もし万が一あのネクロマンサーの坊やが“覚醒”しちゃったら、引き返してくるんだよ？ とてもじゃないけど君の手には負えないだろうから。ま、本当に万が一だけだね」

男は軽い口調でそれだけ言うと、再び歩き出し、表通りの人混みに消えていった——消えていったとは言っても、その長身と季節はずれな恰好は群衆の中ではその存在をより主張することになるのだが。

残されたアルシェラは特に表情を変えず、男と逆方向の路地裏に足を進めた。

アルシェラの向う先からは、何かが地面に転がる音、人の怒号、骨の砕ける鈍い音がとうとうと響いてきていた。

世界の異常を知らせるその音は、表通りの雑音にかき消され、通りを行く人たちの時間は、いつもと変わることなく流れ続けていた。

「馬鹿な人たち。あなた達のすぐそばでは異常が起こっているというのに。いいえ、違うわね。もうすぐ自分たちが異常に巻き込まれるというのに」

つまらなそうに吐き捨て、アルシェラは歩調を速めた。

これからこの街で起こる常ならざるモノを頭に浮かべながら——

第二章 接触

1

閉じそうになる目を何度もしばたかせながら、イズミは黙々と朝食のベーコンエッグを口に運んでいた。

時刻は、午前七時。長かった夏期講習もついに昨日千秋楽を迎え、体術の訓練は

残っているにしても、それなりに惰眠を貪れる生活が始まると予期していたイズミにとって、六時に起床させられ、それに加えて朝食を作らされることは、なかなか酷な仕打ちだった。

イズミを起床させたとうのダーシェンカは、イズミの眠そうな表情など気にする様子もなく、トーストをかじりながら今朝の新聞に目を通している。

「敵、襲ってこないね。相変わらず」

イズミは沈黙に耐えかねて口を開く。まだ意識がはっきりしていないのか、どこか間延びした声だった。

ダーシェンカは新聞から顔を上げることもなく「ああ、そうだな」とだけ返す。

どこかしら倦怠感漂う夫婦のような会話だが、このやりとりがここ数日のイズミとダーシェンカの朝の挨拶といっても過言ではなかった。

墓場で得体の知れない人骨に襲われてから、それなりに緊張感を保っていたイズミではあったが、二週間も敵から音沙汰なしとなると元来の平和ボケな思考が頭に湧き出始めてくる。

昨日までは「逃げたんじゃない？」「そんな訳ない」という会話が続いていたのだが、いい加減無駄なことだと察したイズミは口を開く代わりに、ベーコンエッグを口に運び咀嚼し始めた。

「なあ、イズミ。この時代では、人が原因不明で集団昏倒することはよくあることなのか？」

ダーシェンカの唐突で突飛な質問に、イズミは眉を寄せる。

人が集団昏倒するのがよくある時代なんて、御免こうむりたい代物以外の何物でもない。

「どうしたの？ 急に変なこと聞いて」

眠気が引き始めたイズミは怪訝な表情を崩さずに尋ねた。

するとダーシェンカは新聞を折りたたんでイズミに差し出す。受け取ったイズミはそこに記されていた記事を見て、眉のシワをさらに深めた。

『原因不明の集団昏倒 十名を超える老若男女が病院に搬送』

あまりに不可解な記事に、イズミは今持っている新聞が三流のゴシップ誌なのではないかと思い、新聞の名前を確認した。

残念なことに、いま手にある新聞はゴシップ誌でもなんでもなく、昔から購読している大手新聞会社の新聞に間違いなかった。

「……ひとつだけ言えるとしたら、こんなことは絶対に普通じゃないってことだけだね」

イズミは記事に目を通しながら呟く。

記事の内容としては、集団昏倒とはいっても一か所で起きたわけではなく、二・三時間の間に原因不明の昏倒者が続出し、病院に搬送されたというものだった。しかし、患者は皆一様にイズミが暮らす街で昏倒しており、警察としてはなんらかの事件の可

能性も視野に入れて調査を進めている。

幸いにも昏倒した人は意識を取り戻し、命に別状はないらしいのだが本当に不可解な事件だ。

「私はどうにもおかしいと思っていたのだ。墓場の一件以来なんの音沙汰もないというのは」

イズミの言葉に顔を俯けたダーシェンカは、顎を手でさすりながら難しい顔で呟く。

「まあ……そうかも知れないけど。この記事と僕たちの敵になんの関係があるのさ」

「魔術師が魔術を行う上で最も重要なのは媒体だ。エーテルに質量を持たせ、世界に作用させるには媒体は欠かせないものだ。媒体たり得るものの多くは歴史を重ねたモノ全般や動物の骨などなのだが……」

「なのだが？」

「こと他人を傷つける為の魔術を行うために特化した媒体となると、武器の類しかない。そんなモノが税関の類を通過できるわけないだろ？」

ダーシェンカの言葉にイズミは黙って頷く。

「だから魔術師は媒体をその国々で調達しなければならない。普通の媒体なら専門の商人から買いつけられる。だが、人を傷つけるための媒体がそう易々と手に入るはずがない」

「まあ、確かに普通の世界でも拳銃やそれ用のナイフが簡単に手に入ったらたまったもんじゃないもんね」

「だろ？ だから人を傷つきたい魔術師は媒体を自力で調達する。人間という動物の骨を、

な。まあ、骨を武器とするにはかなりの量がいるのだが……集めるには手軽だろ？ 墓標という目印があるんだから」

ダーシェンカは皮肉るような笑みを浮かべながら続ける。

「私は万が一にも墓場になんらかの痕跡が残されていないかと考えて肝試しに参加した」

「当たり、だった訳だ」

「そうとも言えない。だいたいおかしいと思わないか？ 肝試しで偶然行くことになった墓場であんなコトが起こるなんて。普通ならターゲットの居住区域から離れた墓地で媒体を得ようとする筈だ。私はそれがずっと頭に引っかかっていた。あたかもその場から逃げるために囮にしましたと言わんばかりの人骨、準備を始めていた様子がある割にはまったく襲撃のそぶりがないこと」

ダーシェンカは呟きながらも陰しい表情を崩さない。何やらまだ頭の中で考え込んでいるようだ。

イズミはダーシェンカの言わんとしていることが掴めず、ただただ新聞の記事を読み返していた。そんなことをしても何も見えて来はしないと頭で理解はしているのだが。

「世の中で原因不明とされることの多くはオカルトの類が絡んでいる……おそらくはこの記事も」

「もし、もしそうだとすると、どうして僕に関係ない人が襲われてるの？」

ダーシェンカの曇りきった表情に、イズミは何か嫌な予感を感じた。

墓場に向かうときにもどこかしら余裕を感じさせたダーシェンカがこうまで深刻な表情をするということは、能天気なイズミには想像できないような事態が起きているということを示唆していた。もっとも、イズミがこの一連の不可解な出来事を想像できるということは、これまでも、これからも来ることはなさそうだが。

「これは、当たって欲しくない推測なのだが、私たちの敵は……生きた人間を媒体として使おうとしている」

「な!? そんな馬鹿な! それって、生きた人を道具扱いするってこと!?!」

イズミは立ち上がり、両手をテーブルに叩きつけていた。

怒りから、というよりは驚きの方が大きかった。自分が狙われることにすら実感の湧かないイズミが、周囲の人間が巻き込まれるコトなんて考えられるはずがなかった。

目の前で起きても信じられなかった出来事が、新聞という媒体を通して急速に現実味を帯び始める。

今なら、ダーシェンカの言った「エーテルが質量を持つ」という言葉の意味が理解できる気がした。オカルトという空想的なものが重みを帯び、現実には作用する。

人を傷つけるという最悪の作用として。

「意識が回復したということは失敗したということなのだろうが……他に成功しているかもしれない。これじゃ迂闊に外を出歩けない」

ダーシェンカは歯噛みしながら呟く。その表情は本当に悔しそうで、どこか怒りにも似たようなものも感じ取れる。

その表情にイズミは気押しされ、胸を締め付けられる感覚を覚えた。固い唾を飲み込み、息を吐き出しながらイスに座り直す。

「外を出歩けないって、どういうこと？」

「人を媒体にするということは人を自由に操れるという事だ。骨を媒体にしたものなら人目を気にして活動時間が制限されるが、生きた人間を操れば人目なんか気にする必要はない。それに……」

「それに？」

急に言葉を止めたダーシェンカにイズミが先を促す。

「敵は少なくとも十人にその魔術を施している。相当な力量と見て間違いないだろう。失敗しているとはいえ、並の魔術師なら三回の施術で全てのエーテルを持っていかれ、あの世行きだ」

以前なら何を言っているのか全く理解できなかったダーシェンカの言葉も、体術とともに魔術の知識についても学んだ今のイズミには理解できた。理解できてしまった。

敵の強さが魔術師の中でも並外れていることを。

人間の魂の量というものには個人差がある。差があるとはいっても、ダーシェンカによるイズミに優しい例えによれば、一般人の所有する総エーテル量は二リットル入りのペットボトルくらいの量らしい。

しかし、魔術師はその量が根本から違う。

魔術師と名のつく者は最低限風呂桶一杯分のエーテル量を持っており、レベルが高くなればなるほどその量は増えていく。最高位とされる魔術師はプルー一杯分以上のエーテル量が軽くあるらしい。

かと言って、魂の量が並はずれて多いから二〇〇年も三〇〇年も生きられるということでは決してない。休眠中のリビングデッドとは異なり生命活動をする魔術師は、肉体の方が持たず、結局は常人の寿命とほとんど同じということだ——肉体面で健康なら百年は優に生きるらしいが。

並の魔術師が三回でお陀仏の術を何度も繰り返しているとなると、敵は最高位の魔術師ということになる。並の魔術師とすら対峙したことのないイズミにとって、想像しようのない次元にいることだけは確かだった。

「敵わない、の？」

イズミは躊躇うことなく真っ先に思い浮かんだことを口にした。

敵わない。つまりは自分が死ぬという未来。それが真っ先にイズミの頭の中を駆け巡った。それでもやはり、死というものは自分とは程遠いものという感覚が大半を占めていて恐怖というものは沸いてこなかった。

「敵わないわけではない」

イズミの予想とは裏腹にダーシェンカはこともなげに即答した。即答はしたものの、陰しい表情は変わっていない。

「私はどんな敵が来ようと葬り去る自信がある。たとえ相手が最高位の魔術師だろうとな。

大きな問題は魔術師の強さじゃない。意識がないとはいえ、生きた人間を相手にしなきゃならないことだ。私は、攻撃となると手加減できない……おそらくは殺してしまうだろう」

ダーシェンカは暗い表情で続けた。

「確かに、問題だね。操られてる人をもとにもどす方法はないの？」

「それは簡単だ。操っている魔術師を殺せばいい。そうすれば意識を取り戻す」

「魔術師は……殺さなきゃダメなんだね」

「当たり前だ。まさか、自分の命を狙う輩に情けを感じているのか？」

「情けは感じてないよ。でも結局は自分も、人を殺さなきゃいけないってことだよな？」

人を殺すことには抵抗を感じるよ」

イズミは顔を俯け、握り合わせた拳を見つめた。

「まあ、それは……仕方ない。だが安心しろ。表の世に魔術のコトが知られないようにするための隠蔽機関もある。だから警察にはバレない」

「そういうことを言ってるんじゃないよ！」

「……分かってる。イズミがどういう人間であるかということは。キミが責任を感じる必要はない。手を下すのは私だ」

ダーシェンカは声を荒げたイズミを落ち着かせようと軽く微笑みながら答えた。

それでもイズミが落ち着くことはなく、表情はさらに陰しくなった。再び声を荒げるようなことはしなかったものの、口を固くつぐみ拳を固く握りしめていた。

「外を出歩くのは迂闊だが、座して待っていても襲われるものは襲われるだろう。とりあえず昼間は大通りを中心に行動して敵の襲撃から逃れよう。相手も騒ぎは避けたいはずだ」

ダーシェンカは当面の対策を打ち出し、再び紙面に目を戻した。

イズミには敵わないことはないと言ったが、状況はかんばしくない。生身の人間が使われるということは、いついかなる状況で襲われてもおかしくないということだ。相手がイズミの周囲の人間を観察していて、それらの人間を操ってくるという可能性もないわけではない。

魔術師が姿を現さずに、そいつらだけを送り込んでくるとなれば、操られている人間を傷つけるわけにはいかない以上、逃走以外に選べる道がない。

もし仮に魔術師が姿を現したとしても、相手は最高位の魔術師だ。すぐに勝敗がつく訳がない。ダーシェンカが闘ってる間、イズミは自分の身を自分で守らなければならなくなる。イズミの回避術はそれなりのレベルに達してきてはいるが、長時間はキツイものがあるだろう。

「回避術の訓練を続けよう」

敵への対応策が頭の中を駆け巡りはじめたダーシェンカに、幻聴が響いた。

イズミの声で、はっきりと。

ダーシェンカは目を丸くして目の前に座っているイズミを見据えた。

「回避術の訓練を続けよう」

再びイズミの口が確かにそう動き、ダーシェンカの耳にもそう届いた。

幻聴ではなかった。ダーシェンカはそう思ったものの、イズミの発した言葉が現実のものか確信が持てなかった。

「いま、なんて？」

「回避術の練習を続けよう、って言ったんだけど……」

先ほどのハッキリとした口調とは一変して、イズミの口調は尻すぼみだった。

「キミは……自分が何を言っているのか分かってるのか？ 回避術の訓練をするって

ことは人気のない山の中に行くということだ。それともキミは街中で訓練するつもりなのか？」

「そんなことは分かってるよ。でも人気のない山なら近づいてくる人間をハナから疑えるし、訓練を続ければダーシェンカの負担を減らせると思うんだ」

イズミは手を組み合わせたまま、まさしく祈るように呟く。

自分の言っていることに自信がないのか、ダーシェンカを言い負かす自信がないのかは分からないが、どことなくオドオドしている。

いつも通りのイズミにダーシェンカはどこか安堵を覚え、苦笑とともに溜息を洩らす。「分かっているならいい。イズミが分かって言うなら私は止めない。私は私の存在理由である君の守護という勤めを果たすだけだ。それにキミ自ら餌になってくれるというのだ。好都合だよ」

ダーシェンカは皮肉で締めくくり、イズミを怖がらせるかのようにいたずらに微笑んだ。

2

イズミは嵐の中だがむしゃらに体を動かしていた。自分を切り刻まんと暴風が体を次々と掠めていく。顔面を、腹を、腕を、足を、目にも止まらぬ、いや目にも止まらない速さ“だった”暴風が掠めていく。今ははっきりと、とまではいかないものの確かに暴風の姿が見えている。

イズミは目を見開き、暴風を生み出す元凶を見据えた。

元凶には相応しくない美しい少女、ダーシェンカがそこにいた。整った顔を崩すことなく、無表情にイズミに向かって蹴りや拳を繰り出してくる。その勢いたるやまさにハリケーン。超小型ハリケーンダーシェンカがイズミに襲いかかってくる。

「よし、五割にもだいぶついでこられるようになったな。次、六割行くぞ」

「え？ ちょっと！ いきなり一割増はムリだって！」

ニヤリとほほ笑んだダーシェンカにイズミは必死に否定の弁を述べたが、無駄だった。

イズミの目の前にはいつの間にかダーシェンカの拳が突きつけられていた。

「だからムリって言ったのにい」

イズミは情けない声で呟き、その場にへたり込む。

「ムリとか言う前に距離を取ろうとは考えなかったのか？」

肩をすくめながら尋ねるダーシェンカに、イズミは首を激しく横に振る。

その答えにダーシェンカは深い溜息を漏らした。

溜息は漏らしたものの、イズミがここまで成長することはダーシェンカにとっても驚きだった。三割程度の拳速についてこられるようになれば万々歳だと考えていたのだが、たった二週間やそこらで五割まで達している。

イズミの身体能力は決して高いとは言えなかったのだが、二つだけ目を見張るものがあった。

動体視力と判断力。速さに慣れてしまえば軽々と——イズミ本人としては必死に——攻撃をかわすようになったし、間の取り方などもコツを掴んでからはそつなくこなすようになっていた。

今、六割の拳速に達したところではっきりと分かった。イズミの動体視力は五割の拳速についてくるのが限界だと。五割とはいっても生きた人間の限界すれすれの拳速だ。それをかわせるようになっただけでも十分だ。

だがそれは裏を返せば、生身の人間相手にしか身を守れないということの証明でもある。

人智を超えた存在からは自分が守ればいいだけの話だ。ダーシェンカは心の中でそう呟いた。

今イズミを狙っている相手が最高位の魔術師と見て間違いない以上、いつまで自分が守り続けられるか分かったものではないのだが。

「……イズミ。五人ほどの気配が近づいてきている」

ダーシェンカは感傷に浸りかけた頭を急速に切り替え、へたりこんでいたイズミの肩を叩いて立ち上がらせる。

「どこから？」

立ち上がったイズミも表情を引き締めながらあたりを見回す。

いつも利用している山小屋は木々に囲まれている。生命力に満ち満ちた木々は、風に揺られて葉をざわつかせていた。

一般人のイズミには木の葉のざわつく中で、敵の気配を感じ取るなど不可能な話なのだが、それでも全神経を研ぎ澄ます。

山小屋に続く道は、上ってきた道と山頂へ続く道の二本だ。正確には山頂までの一本道の途中に山小屋があるというだけの話なのだが。

「下からだ。舗装された道を歩いてきているが、油断はするなよ」

「分かってるって」

「よし、じゃあ私たちは山を降りて街中に出よう。すれ違いざまに変なそぶりを見せたら避けるよ？ もし捕まってみろ。イズミを捕まえた可哀そうな操り人形の命はないからな」

ダーシェンカは軽く微笑みながらイズミを小突いた。

小突かれたイズミはよろめきながら「が、がんばってみる」と上ずった声で応じる。

こんなブラックジョークが飛び出すのも、イズミがそれだけ成長したからだ。

普通の人間にはイズミは捕えられない。捕えられるのは理を外れた者だけだろう。そいつが出てきたときにダーシェンカがとる行動は簡単だ。

この手で八つ裂きにしてやればいい。

ダーシェンカは胸中に呟きながら両手を握りしめた。感覚はないが、力強く握っているのは理解できた。おそらくリンゴぐらいは軽く握りつぶせるだろう。

「それじゃあ降りるとするか」

ダーシェンカは下へ続く道に視線をやりながら呟き、歩きはじめた。

若干緊張し始めているらしいイズミも深く頷きダーシェンカに並んで歩きはじめる。

イズミ達が訓練に利用していたこの山は、わざわざ用具を揃えて登山するような高い山ではなく、ただの公園という風合が強かった。人がそれほど寄り付かないからこそ、ここで訓練していたのだ。ごく稀に通りかかった人には漏れなく「若者がこんなところで何をしているんだ？」というような怪訝この上ない視線を向けられたが、イズミは極力気にしないように努めていた。

つまりはそういう寂れた場所に五人も人が来ているのだ。疑わなくて済む道理がない。

ダーシェンカはいつも通りの歩き方で、イズミはどこかしら硬さが見られるぎこちない足取りで道を下っていた。

とくに会話を交わすこともなく歩き続けていると、五分もしないうちに人影が見えてくる。ダーシェンカが宣言したとおり、五人だった。

三十代前半と見える男女に、小学校低学年ぐらいの少年が二人、幼稚園児ぐらいの少女が一人。早い話がどう見ても家族連れが仲良く散歩をしているようにしか見えない。

「くれぐれも……油断するなよ？」

ホッと胸の溜飲を下げかけたイズミに、ダーシェンカの鋭い視線が突き刺さる。

「わ、分かってるよ」

イズミは口をひくつかせながら不器用な笑みを浮かべて応じた。

そんな会話をしている間にも家族連れとの距離は縮まっていく。

五メートル、四メートル、三メートル、二メートル、一メートル。

そして何事もなく家族たちとすれ違い、今度こそ本当にイズミが胸を撫で下ろそうとした瞬間だった。

イズミの視界の隅で何かが動いた。今までのイズミならばそんなことは気にも留めなかっただろうが、ダーシェンカの訓練はイズミを劇的に変化させていた。

イズミは動いたものがなんであるかを考えることもなく、反射的に横に飛びのいていた。

飛びのいてすぐに視線を動いたモノの方向へ合わせる。

イズミの口から驚きの息が短く漏れた。

イズミの視界には女の子が地面に伏している姿が映っていたのだ。ものの見事に顔も地面についている。

「あ、あの……大丈夫？」

イズミが女の子に歩み寄り、手を差し出す。

少女はイズミの手を取ろうとゆっくり体を起こす。少女がイズミの手を取ろうとした瞬間、イズミがサッと腕を引いた。

手を差し伸べていたイズミに、少年二人が飛びかかってきていたのだ。イズミは少年達を避けるために仕方なく飛び退った。飛び退りながらも少年二人から視線を離さない。イズミの足が地面に着き、靴が地面を削って砂埃を巻き上げる。

「油断するなとあれほど言ったのに……」

イズミが最初に飛び退いたとき、同時に前方に飛んでいたダーシェンカは、ものの見事に周囲を囲まれているイズミを見上げながら苦々しげに呟いた。それでもその表情には余裕を感じ取れる。

「やっぱりこの人たち操られてるの!？」

イズミが情けない声を上げる。それでも視線を対峙している少年達から離すような愚は犯さなかった。

「ああ、おそらく。だが、その家族とやりあっても埒があかない。ひとまず人の多いところへ逃げるぞ！」

ダーシェンカはイズミを見ながら声を張り上げる。

彼女の叫びにイズミは分かったと短く応じてみせた。攻撃が避けられるようになった云々よりも、このような状況で冷静でいられるようになったことこそが、イズミの一番の成長点だった。

ダーシェンカの言葉に応じたイズミは、ざわつきそうになる心を押さえつけ、自分を取り巻く状況を確認する。

自分の目の前には腰に届か届かないかぐらいの子供たちがいる。敵意むき出しの視線を向けられている、というわけではないのだが、子供に似つかわしくない能面のような表情を向けられると背筋が凍りそうになる。

(こんな小さい子供達まで利用するなんて……)

イズミは苦々しい表情を浮かべながら胸中に呟いた。

自分たちは積極的に排除しないからいいものの、向かって来る者は操られているだけの人間であろうと排除するようなネクロマンサーにこの手法を使っていたらと考えると、イズミは自分の命を狙っている人間に憎しみがふつふつと沸き上がってきた。

だが今は憎しみを燃え上がらせている場合ではない。冷静に、ひたすら冷静にこの状況を抜け出すことが急務だ。

子供たちの動きを観察する限り、さしたる脅威ではない。子供たちの壁を突破することに問題はなさそうだ。では子供たちの後ろに控えている両親はどうだろう。

今のところ両親は動くそぶりを見せていない。

位置関係としては高いところから順に、イズミ・子どもたち・両親・ダーシェンカだ。

イズミがダーシェンカのもとにたどり着くには壁を二つ越えなければならない。子供

たちの壁を通り抜けた後に隙が生じるような軟な訓練を受けてきたイズミではないが、両親の動きの速度が把握できていない以上、迂闊に動く訳にもいかなかった。

「迂回、が一番安全かな？」

イズミは呟き、道の両脇に広がる雑木林に視線を向けた。

家族の脇を抜けていくよりも、迂回して家族の配置を歪めた方がダーシェンカのもとへたどり着くことへの安全性が高い。

イズミはそう結論付け、雑木林に足を進めようとした。そのときだった。

「その判断は正しい。だが、ここは直線で抜けてこい」

ダーシェンカがイズミを見据えながら真顔で言う。

一瞬イズミは自分が聞き間違えたのだと思った。ダーシェンカならば、もしイズミが間違えた道を選んだとしてもそれを指摘してくれると、どこかで信じていたから。

イズミは物問いたげな視線をダーシェンカに向けるが、ダーシェンカからはなにも返ってこない。ましてや「迂回しろ」という言葉が出てくることもなかった。

ダーシェンカが否定の言葉を発してくれない以上、イズミが迂回する選択肢を選ぶ訳にもいかない。何か考えがあつてのことなのだろうが、わざわざ危険度の高い道を選ぶことには抵抗がある。

「ええい！ ままよ！」

イズミは声を張り上げながら真正面の家族を見据えた。

家族の立ち位置に隙がないわけではない。むしろ隙だらけだ。だからこそイズミは裏を読んで迂回を選んだのだが、こうなったら仕方がない。

イズミは声を上げると同時に地面を蹴った。少年二人と女の子の間を一步で通り抜ける。

子供たちはイズミを捕まえようと飛びかかってきたが、イズミが二歩目で横に飛び退いたので子供たちは体勢を崩して転んでしまう。

イズミは「ごめん」と小さく呟き、真正面に迫った子供たちの両親を見つめる。

子供が盛大に転んでいるというのに眉ひとつ動かさない様は見ていると悲しくなる。

イズミがそんな感想を持ったのも束の間。親も二人同時にイズミに飛びかかってきた。

子供よりも数倍速いが、やはりこれも酷く単調な動き。あと少しで二人の伸ばした手がイズミに触れる。その瞬間にイズミは斜め前に飛び、父親の脇を軽々と通り抜けた。

密接した二人の攻撃をかわすのは実に簡単で、実質一人の攻撃を捌くのとなら差がなかった。

それでもイズミは安心することなく地面を蹴り続け、すぐにダーシェンカのもとへと駆け寄った。

「これで、いいの？」

イズミは少し息をはずませながら尋ねた。

運動量は大したものではなかったが、緊張がイズミにはこたえたのだろう。

「ああ、上出来だ。じゃ、予定通り街まで出るぞ」

ダーシェンカは軽く微笑むと、地面を蹴って走り出す。

「あっ！ ちょっと待ってよ」

「今のイズミなら余裕についてこれる速度だろ？ それに、山を降り切ったら止まる。距離的にも大したことないからから安心しろ」

慌てて走り始めたイズミにダーシェンカが振り向くこともなく応じる。

イズミはすぐにダーシェンカに追いつき、並走を始める。木々の作る影が日差しから守ってくれてるとは言え、夏の盛りに走ることはなかなか辛いものがあるのだが、そんなことを言っている余裕はなかった。イズミはひたすらにダーシェンカにペースを合わせて走り続けた。時折、追いかけていないか後ろを振り返りそうになったが堪えた。耳を澄ました限りでは、追いかけている気配は全く感じなかった。それが立ち止まっていい理由になる訳もないのでイズミは口にしなかったが。

「よし、ここまでくれば一安心だな。人通りもそれなりにある道だし」

山道を下りきったダーシェンカは息一つ切らさず、さらには汗一つ流さない涼しげな表情で言う。

確かに山道とは違い、まばらではあるが人の通りがある住宅街に出ていた。五、六年前に山を切り開いて作られた団地なので、軒を連ねる家々はどれも真新しいものばかりだ。

「そう、だね」

ダーシェンカとは対照的に、イズミは額に大粒の汗を浮かべていた。呼吸も少し荒い。イズミは二三度深呼吸して息を整え、続けた。

「さっきの家族、放っておいて大丈夫なの？」

「ああ、それなら心配ない。おそらくイズミ以外は襲わないようにプログラミングされてるはずだ。その証拠に私には攻撃してこなかったからな。それに……」

先を言いよどむダーシェンカに、イズミは首を傾げて先をさとす。

「これは推測なのだが、イズミから離れればあの家族は自我を取り戻すはずだ」

「それは……どういうこと？」

「あの家族の動きは酷いと言って差し支えないほど荒かったら？ おそらく支配の度合いが低いんだ。精密な動きをさせられないが、いちいち指示を出す必要もないし、消費するエネルギー量も少なくて済む」

「あの……僕が言うのもなんだけどさ、あれぐらいの動きだったらなんの役にも立たないんじゃない？ そりゃ、あの家族が僕から離れるだけで元に戻るなら嬉しいけどさ」

「確かにあの家族だけではなんの役にも立たないだろうな。だが、イズミに隙を作ることは出来た筈だ」

ダーシェンカは射抜くような視線をイズミに向けた。

イズミはその視線に息を詰まらせる。確かにダーシェンカの言う通りだ。あの程度の動きはなんの役にも立たないと言ったイズミではあるが、あのときは家族の動きに集中しきっていた。

もしあそこで他の者に割って入られたらと考えると背筋が寒くなる。

だからあのときダーシェンカは、一番速くダーシェンカのもとに辿り着く直進コースを選択させたのだ。

イズミがそのことに気付いたとき、ダーシェンカは再び歩きはじめていた。

「でも敵は出て来なかったよね？」

イズミはダーシェンカに歩調を合わせながら尋ねる。

「そうだ。それが気がかりなんだ。あんな人気のない場所は絶好の襲撃ポイントなのに。それにモタモタしていたら敵の首が絞まるだけなのハズだし」

ダーシェンカは顔を俯けながら何やら思案に耽りだす。

「首が、絞まる？」

思案に耽り始めたダーシェンカにはしばらく話しかけない方がいいと分かっていたイズミだが、思わず口にしてしまった。

独り言のようなイズミの呟きに顔をあげたダーシェンカは、思案顔を崩さず口を開いた。

「例えば、イズミのような魔術師の家系に生まれた者が同じく魔術師に命を狙われているとき、助けてくれるものはいない。今のイズミのように自分の命は自分で守るしかない。だが、魔術師が一般人に危害を加えるとなると話は別だ。高位の魔術師のみで組成されている組織、昔と名称が変わっていなければ“アクロマ機関”と呼ばれる者が全力で加害者の魔術師を排除するはずだ」

「つまり、モタモタしているとそのアクロマ機関に嗅ぎつけられてしまう、と」

「その通りだ。もっともアクロマ機関に属する魔術師は多くないから、やってくるまで多少の時間は掛る。だが、幸いにも今は交通手段が発達しているから時間の問題はあまり考慮しなくてもよさそうだが……」

「だが？」

「アクロマ機関がまだ存在し続けているか否かという大前提な問題がある訳で……」

「あ……そうか。二百年の間に消えてる可能性もある訳か……」

「そうなんだ。もともと一般人を守護しようとする理念のもとに集まる魔術師は少なかったらしいし」

それっきりダーシェンカは黙り込み、イズミも口を閉ざす。

『現状への正しい認識。それが回避術においてもっとも重要なことだ』

イズミは訓練を開始してすぐ、ダーシェンカに言われた言葉を思い返していた。

攻撃を回避するには動体視力や反射神経などが最終的にモノをいうが、それを使わないに越したことはない。敵の攻撃が届かないところに身を置くというのが、ダーシ

エンカから教わった回避術の基礎にして奥義だった。

では今の自分は現状を正しく認識できているのだろうか。

イズミは自分自身に問いかけてみる。光速を超えたのではないかと思えるほどの速さで返答があった。

否、と。

敵の攻撃の届かない所に身を置く、ということは敵の攻撃を受けてしまってる以上果たしようがないのだが、そもそもイズミは現状を理解する努力すらしていなかった。

魔術的なしがらみに関しては認識のしようがないとしても、自分の目の届く範囲で起こっていることさえ認識に努めようとしていなかった、といのが事実だった。

まず最初に襲われたのが肝試しのとき。人骨はもともと本格的にイズミを狙ったものではないというのがダーシェンカの弁。

そして、それからしばらく間をおいての先ほどの生きた人間を使った襲撃。攻撃方法は稚拙極まりなく、連携は皆無だった。

計二回の襲撃だけから察することが出来るとすれば敵は弱い、ということになるのだが、一概にそうとは言い切れない側面も見え隠れしている。

現状を把握しようとする、どうしても敵の狙いが掴めない、という結果を導き出してしまう。

そもそも自分は何をすればいいのかが分からなくなってくる。ただ漫然とダーシェンカに守られているだけでいいのだろうか。もちろんいいに決まっている。イズミには魔術師をどうこうできるような力は備わっていないし、何よりダーシェンカはイズミを守るために存在しているのだから。

それでも心の底に、泥のようなナニかが沈澱し始めている気がする。

自分の命を狙うものがすぐそばにいて無関係の人を利用している。結果的にイズミは無関係の子供を、転ばせるという軽微な形ではあれ、傷つけてしまった。

こんな状況下で、自分には何が出来るのか。

「イ……イズ……ズミ。イズミ？」

「えっ!? あ、ごめん。何？ ダーシェンカ」

ダーシェンカの声によって思考の海から引き戻されたイズミはビクリと顔を上げる。

「イズミが考え込むなんて……らしくないな」

ダーシェンカはからかうような笑みを浮かべてイズミを見上げていた。

「なっ！ 僕だっただまには考えことくらい……って、いつの間に街に着いてたの？」

イズミは足を止め、周囲に広がる光景に目を見開いた。

トンネルを抜けたら雪国が広がっていた、と言っても差支えないほどの驚きようだった。

見慣れているいつもの繁華街にも関わらず、だ。

先ほどまでは全く耳に入らなかったが、周囲は喧騒に包まれている。いろいろな年

代の人たちが行きかっいて、その動きを見ていると頭がクラクラしてくる。

「本当に、大丈夫か？」

ダーシェンカは眉を寄せ、イズミに顔をズイと近づける。

「だ、ダイジョブですよっ！」

ダーシェンカの顔が間近に迫り、イズミは慌てて後退る。

顔が火照っているのは真夏の太陽のせいだけでないことは自分でも理解できた。

「本当か？ なら、いいのだけれど……あまり深く考えすぎるなよ？ 例えアクロマ機関が減んでいようがイズミは私が守ってみせるから。心配するな」

ダーシェンカは心底心配そうにイズミを見上げていた。

「うん。分かってるって」

イズミは何でもないように笑い、再び歩き出す。

ダーシェンカの表情に、心の底に溜まった沈殿物がザワつく。

何かが、何かがいけないのだ。非力な自分がダーシェンカに守ってもらうことになんの問題もないはずなのに。自分の寿命と引き換えに蘇らせたのだからギブアンドテイクと言っていいはずだ。

そう。何も問題はないはずなのに、心がざわつく。

「そっ！ そうだ！ そろそろ昼飯時だよ。何か食べようか」

薄暗いものが心から湧き出始めるのを自覚したイズミは、視界の隅にファミレスの看板が入ったので、薄暗いものから逃げるように言葉を紡いだ。

「ん？ 確かにそうだな。何か食べるか。腹が減っては戦が出来ぬと言うしな」

イズミのあからさまに不自然な態度に顔をしかめながらも、ダーシェンカは頷いた。

3

「おや、それは困りましたね。なら、戦の準備をされる前に叩かなくては——」

イズミとダーシェンカの背後で、ヒヤリとする無感情な女性の声が響いた。

二人は同時に後ろ見る。しかし、そこに見えたのはいつもと変わらない人混みだけでイズミとダーシェンカを見ているものは一人もいなかった。

こう人通りの多い場所では「誰だ！」と叫ぶ訳にもいかず、イズミとダーシェンカは周囲をキョロキョロと見まわした。

「ダーシェンカにも、聞こえたんだよね？」

イズミは先ほどの声に何かしら脅迫めいたものを感じ、隣で周囲を警戒しているダーシェンカに尋ねた。

「確かに聞こえた。くそっ！ こうも人が多くては気配が探れない」

ダーシェンカは舌打ちをし、周囲に鋭い視線を振りまいていた。

イズミもあたりを見回すが、やはりそれらしい影は一つも見当たらない。
周囲の様子を観察していたイズミは言いしれぬ違和感を感じていた。ものすごく小さな、
それでいてものすごく気持ち悪い、日常との差異。

「あっ！ おかしいよ！」

イズミはその差異がなんであるかに気付き、声を張り上げた。

その声が、現状が日常から極端にズれていることを証明した。

誰一人としてイズミの声に反応を示さないのだ。怪訝な表情を浮かべることもなければ、

眉ひとつ動かすこともない。

みんな何事もないように談笑しながらイズミの脇を通り過ぎていく。

日常との差異は気付こうと思えばもっと早く気付いていたはずだ。第一、おかしいのだ。

誰一人としてダーシェンカに視線を向けていないということが。

普段なら道行く人たちは、ダーシェンカにチラと視線を向けてくる。そんな彼女が周囲を見まわしているときに誰一人として気にもとめないというのは不自然極まりない。

「まさか……そんな、ことが」

イズミと同様に周囲の異変に気付いたダーシェンカは目を見開いて周囲を見渡していた。

「……街の人間すべてを支配下に置いたとでもいうのか」

ダーシェンカの口からそんな言葉がこぼれていた。

コツ、コツ、コツ、コツ、コツ。

喧噪のなかにあってもよく響く音がイズミの耳朶を打つ。

イズミは音の響く方向に視線を向けた。

「ご明察、です」

イズミの視線の先には、淡く艶やかな金色の髪をボブカットにしたパンツスーツ姿の美しい女性が立っていた。どこかしらダーシェンカと似た雰囲気醸し出しているが、ダーシェンカより数倍人形じみていた。

「あなたが、如月イズミくんですね？」

ボブカットの女性は切れ長なアイスブルーの瞳をイズミに向けると、一向に感情の籠る様子のない声で尋ねた。

返答すべきか迷っているイズミの前にダーシェンカが出て、向けられた女性の視線を遮った。

ダーシェンカの手にはいつの間にかナイフが逆手に握られている。

ナイフを片手に構えた美少女がいるというのに、やはり周囲の人間は全く反応を示さない。それどころかイズミとダーシェンカ、向かい合っている女性の周辺には奇妙な

空間が形成されていた。三人各々の半径五メートルくらいの空間に、人が全く入ってこないのだ。

「あまり賢い判断とは言えませんね。それでは彼が如月イズミくんだと証明してるようなものですよ？」

女性は肩をすくめながら言う。

その動作は至極機械的で、マネキンに同様のポーズをさせた方がまだ人間味があるのではないかとさえ思えた。

「最初から分かっているくせによく言う」

ダーシェンカは女性に鋭い視線を向ける。墓場で見せた表情とはまるで格が違う、その視線を向けた者を焼き殺さんばかりの、それでいて氷のように冷たい炎がダーシェンカの瞳の中で燃えていた。

「まあ、それもそうですね。失礼しました」

女性は驚くほど素直に頭を下げた。パンツスーツ姿と相まって、どこぞの大企業の秘書にさえ見えてくる。

「ああ、申し遅れました。私はアルシェラと申します。ご推察の通り、如月イズミくんの魂を狙う者です」

アルシェラと名乗った女性は、発言内容とは対照的に至極丁寧にお辞儀する。

あまりの丁寧さに、イズミはあやうく名乗り返しそうになったほどだ。

「ご丁寧な挨拶痛み入る。だが、丁寧に挨拶したところで意味はないぞ？」

ダーシェンカは慇懃に応じながらも、射抜くような視線は一向に緩めない。

アルシェラを睨みつけながら、ダーシェンカは攻撃の機会を窺う。アルシェラの立っている位置はすでにダーシェンカの間合いなのだ。それでもダーシェンカが飛びかからないのは、アルシェラという存在が墓場の人骨とは一線を画しているから。一瞬で仕留められる相手ではないのだ。

加えて周囲の人間のこともある。今はダーシェンカ達を認識せずに避けているが、一瞬先には集団で襲いかかってくるかもしれない。

ダーシェンカは絶えず周囲の状況を観察していた。

行き交う人の中に、密度の高い所や低い所があることを確認し、年齢もおおまかに判断する。襲いかかられた際に、逃げる空間がなかったら子供の近くを突破するのが最も安全だろう。年寄りを突破するのも安全かもしれない。

そのどちらの仮定も外れている、という仮定も忘れずに頭の片隅に置いておく。

同じことを自分の後ろにいるイズミが考えてくれていることを祈りながら、ダーシェンカはアルシェラを睨み続けた。

自分の存在意義が目の前にいる。自分が排除すべき存在。自分が殺したい存在。

ダーシェンカは頭の片隅でアルシェラという存在を定義付ける。どう定義しようが、ドス黒い感情がまとわりつくのを感じ、ダーシェンカは軽い苦笑をもらす。

(私はこいつを殺したい)

ダーシェンカは心の中で強く思った。アルシェラの姿が揺らぎ、一瞬だけ男の姿に切り替わる。ダーシェンカが最も憎む男の姿。

ダーシェンカは心の中に湧き出始めた暗い感情を押さえつけ、アルシェラに意識を集中させる。下らない感情にとらわれながら勝てる相手ではない、というのがアルシェラに対するダーシェンカの評価だった。

それは同時にイズミのことを気に掛けながら戦える相手ではないということでもあるのだが。

「この状況でも諦めないというのは尊敬に値するかもしれませんが。でも、面倒なことは大嫌いなんですよ、私」

アルシェラは淡々と言い、パチリと指を鳴らした。

アルシェラは指を鳴らすと同時に地面を蹴り、一步でダーシェンカとの距離を詰める。アルシェラはそのまま体をねじり、ダーシェンカに向かって鋭いボディブローを放つ。

「指を鳴らしたはフェイントか」

ダーシェンカは軽く後ろにステップしてボディブローをかわした。

ダーシェンカは下がってすぐに体を低くし、左足を軸にしながら鋭い回し蹴りをアルシェラに返す。

アルシェラはそれを左腕一本で受けきり、右拳をダーシェンカの顔面に叩きこむ。

ダーシェンカは顔をずらして直撃コースから外すが、僅かに反応が遅れてアルシェラの拳が頬を掠める。

掠めたところがかすかに裂け、赤い血がダーシェンカの頬を伝う。

「そういうこと、か」

ダーシェンカは頬の血を拳で拭い拭く。

回し蹴りはアルシェラに避けられると踏んでいた。避けなければそれだけで体の骨が砕け散り勝敗が決してしまう。

だがアルシェラは避けなかった。避け損ねたという反応では無かった。受けきって反撃するという明確な意思がアルシェラの瞳には宿っていた。ダーシェンカは自分の予測を過信したために、わずかとは言え攻撃を喰らってしまった。

しかし、リビングデッドの攻撃は生身の人間なら受けられる代物ではないのだ。

受けきれるとすれば、そう。同じリビングデッドだけだ。

ダーシェンカはその結論にたどり着き、眼前で構えるでもなく無造作に立っているアルシェラを見据えた。

「その様子だと、気付いたんですね。ええ、私もあなたと同じリビングデッドですよ」

アルシェラは隠す様子もなくあっさりと言い切った。

「え？ ど、どういうこと？」

黙って二人の戦闘を見守っていたイズミが目を見開いてアルシェラを見つめる。

「私たちの本当の敵は、あの女じゃなくて、あの女を蘇らせたネクロマンサーということだ」

ダーシェンカはアルシェラから目を離さずにイズミに教えてやる。

これだけの説明でイズミがことの重大性を理解できるとは思わなかったが、細かく説明するだけの余裕を、今のダーシェンカは持ち合わせていなかった。

少しでも隙を見せればアルシェラが飛びかかってくる。そう思わずにはいられなかった。

「まあ、そういうことになりますね。私はその人の指示で動いてるに過ぎませんし。この街の人間の意識を操作してるのだって私じゃありませんしね」

ダーシェンカの不安をよそに、アルシェラは気負う様子もなく滔々と語る。

「つ、つまり、もう一人敵がいるってこと？」

「ええ、そうです。まあ、でも安心して下さい。今は私一人ですから。あの人はここ最近ずっと眠ってますから。それこそ死んでるみたい」

アルシェラは答え、かすかではあるが初めて微笑んだ。

その笑みは恐ろしく官能的で、見る者すべてを虜にし、隷属させるかのような冷たいものだった。

「あ、すみません。一人じゃありませんでした」

アルシェラは思い出したように顔をあげ、呟く。

「お仲間が、いましたよ」

アルシェラは無表情に言うと、すっと手を挙げてイズミの後ろを指した。

ダーシェンカはアルシェラから視線を外さないが、イズミは思わず振り返ってしまう。

「なっ!? 何この人たち!？」

イズミは声を裏返らせながら叫んだ。

ダーシェンカはその声に反応して後ろを見る。勿論アルシェラに隙を見せるようなヘマはしない。

「なっ!？」

ダーシェンカの口からも驚きの声が漏れる。

人混みの中から異様な姿をした男達が姿を現し、イズミを取り囲んでいたのだ。

人数は三人と大した数ではないのだが、その姿があまりにも異質だった。

着ている服は元がどんなものだったのか判別がつかないほどボロボロに破れ、破れた服から垣間見える肌は赤黒く変色している。それは顔も例外ではなかった。

晴れ上がった脛から覗く瞳はもはや意思を宿しておらず、暗く淀んでいた。

「特別な方法で強化された方々です。それにしても、私たちよりもこの人たちの方がよっぽどりビングデッド、って感じですよ」

アルシェラは攻撃を仕掛ける様子も見せずに呟く。

男たちはその言葉にも一向に反応を示さない。威圧するでもなく、イズミの周りに佇

んでいるだけだ。

それだけでもイズミにとっては十分すぎる脅威だった。誰も侵入してこなかったテリトリーに敵が、それも得体の知れない存在が侵入しているのだから。

「先ほど指を鳴らしたのはフェイントではなく、彼ら呼び出すための合図だったんですよ。いい加減、お分かりでしょう？ チェックメイト、です。あ、この国に馴染む言い方をするならば、詰み、でしょうか？」

アルシェラは表情をピクリともさせずに顎に指を当てて考え込む仕草をする。

確かに状況は絶望的だった。イズミの周りに現れた気味の悪い男たちの能力は未知数だが、それをダーシェンカが排除しようとするればどうしても隙が生じる。その隙をアルシェラに突かれれば、それこそ本当にチェックメイトだ。

それでもダーシェンカに諦めるという選択肢はない。イズミもここで諦めるような軟な教育は施されていなかった。

「イズミっ！ 三分間だ！ 三分間でケリを着ける！」

ダーシェンカはアルシェラに視線を向けたまま叫び、イズミの返事を聞かずに軽やかに地面を蹴った。

迷いのない跳躍。

一瞬でアルシェラとの距離をゼロにし、ナイフを横薙ぎに払う。狙いは遠慮なくアルシェラの喉笛。

「くっ！ ただの人間が彼らに敵うわけないでしょ」

アルシェラは顔に若干の驚きを浮かべながらナイフをかわす。かわしながらもう一度指を鳴らした。

その音が何を意味するか、ダーシェンカは考えなかった。自分の後方から聞こえてくる地面を削るような音や、繰り返し低く響く拳が風を切る音なども意識の外に置いた。

今の自分に出来ることは、イズミを信じて目の前のアルシェラを可能な限り迅速に排除することだけだ。

イズミが普通のネクロマンサーなら、ここまで気にはかけはしなかった。例えネクロマンサーが死ぬことになろうが、自分が敵を一人でも多く排除できればそれでよかった。

ダーシェンカは嵐のような攻撃をアルシェラに繰り出し、またアルシェラから繰り出されたものを捌きながら頭の中でぼんやりと思考していた。

そのような思考が邪魔なものだとは理解しつつも、沸き出せるものは止められなかった。

ボロボロの男達がアルシェラの合図とともに繰り出し始めた攻撃を、イズミは必死に避け続けていた。

男達は山道の家族と同じように連携は取れていないものの、攻撃の速度は桁違いだった。

耳に届く拳が風を割く音など、少しでも意識したら足が震えだしそうなレベルだ。

それでも避け続けなければならない。ダーシェンカが三分と言った以上、三分間は絶対に持ちこたえなければならなかった。

男達の攻撃速度は恐ろしいものの、連携の取れていない動きは捌きやすかった。加えて、

攻撃も速いだけで単調だった。

そして何よりもありがたかったのが、自分の周りに人が入ってこないという点。周囲の人間はイズミが近づくと、不自然とも思える速度で距離を取る——談笑をしながら、何事もないかのように。

敵は街中でも行動を起こせるように仕組んだものなのだろうが、今のイズミにとってはありがたい仕組みだった。おかげで建物以外はほとんど気にする必要がないのだから。

だが一つだけ問題があった。

(なんで、よりにもよってこんなときに……)

イズミは目前に迫った男の赤黒い拳を最小限の動きでかわし、胸中で呟く。

思考は正常に働いている。体の動きも問題ない。敵の動きの把握だって順調だ。体力的にも余裕がある。三分どころか十分はかわし続けられそうだ。

だが、頭がクラクラする。視界にぼんやりと青い靄が掛かっている。男達の動きを見極める分には問題無い程度だが、青い靄を見ていると気分が悪くなってくる。

「日に当てられたのかな」

男から繰り出された回し蹴りを、イズミは軽いバックステップで避けきり、呟く。

チラとダーシェンカに視線を向ける。相変わらずアルシェラと壮絶な接近戦を演じ続けていた。

三分は短い、というのがこれまでの認識だったが、それを改めなければならないと、イズミは我知らず口元を緩める。

緩んでいる口元に気付き、イズミは表情を引き締め直した。襲いかかってくる男達に再び意識を集中させる。

ダーシェンカ達の戦いも意識の外に置いた。イズミにはダーシェンカを信頼する以外に出来ることはいのだから。

だからイズミは考えなかった。こんな状況下で、なぜ自分が口元を緩められたかというのを。

「なぜ、ナイフなんか使っているんです？」

一進一退を続ける逼迫した戦いの中で、アルシェラが不意に口を開いた。

自分の攻撃をかわしながらこともなげに口を開くアルシェラに、ダーシェンカは舌打

ちの一つでも打ってやりたくなるがなんとか堪える。

「魔術師に対抗する手段としては貧弱過ぎやしませんか？ それはリビングデッドである私にたいしてもですが」

返答する気のないダーシェンカをよそに、アルシェラは質問を続けた。

ダーシェンカはアルシェラの質問に答えてやる気は微塵もなかった。敵に情報を開示するのは馬鹿げているというのもあったし、何よりアルシェラが答えを導き出しているにも関わらず尋ねてきているらしいのが癪に障った。

確かに魔術師相手にナイフ一本で立ち向かうのは馬鹿げている。一流と呼ばれる魔術師は近・中・遠のいずれの間合いにおいても有効な攻撃手段を備えている。そのような相手と対峙するにはこちらも近・中・遠距離全ての攻撃手段を揃える必要がある。

だがスナイパーライフルやら何やらを揃えればいいというものではない。毒をもって毒を制するように、魔術には魔術しか対抗しえない。

また、異なった点において、リビングデッドに対してナイフがあまり有効な手段ではないということも言えた。

ナイフファイトの基本は相手の体を少しずつ傷つけて弱体化させることにある。だが、リビングデッドにその原理はまるで当てはまらない。痛覚がないから体を傷つけようが意味をなさない。

リビングデッドを倒す手段は、首を切り落とすか、そのエーテルの貯蓄量をゼロにするかのいずれかしかない。

この二つはナイフだけでも達成しうる手段だ。前者は説明するまでもないが、後者も相手の体から血を失わせることによってエーテルを削ることができる。エーテルは血液によって体中を循環しているから。

だが現状、それは不可能と言っても差支えなかった。

感覚のないリビングデッドは疲れを知らない——正確には疲れを認識できないだけだが。

だから、相手の体力を削りながら機を窺うということはできない。最初にできなかったことはどうあがこうが為せないというのがリビングデッド同士の戦いだった。

必然、状況を変えるには魔術を行うしか手段はない。だが、ダーシェンカは今だに魔術を使う素振りすら見せない。

ダーシェンカは魔術が使えない訳では決してない。魔術師とは違い、リビングデッドが魔法を使うのには大きな問題がある。だからアルシェラも発言とは裏腹に魔術を一度も使っていないのだ。

リビングデッドはエーテルの貯蔵量が少ないという問題。

リビングデッドになるものは皆一様に魔術の素養を持っているが、その生前貯蔵していたエーテルは、ほとんど肉体強化の面に回される。余るエーテルはほんの僅か

だ。

だがダーシェンカはその点すら他のリビングデッドとは違った。

ダーシェンカ自身のエーテル残量はゼロだった。

魔術を使うとなれば、必然的にイズミから分け与えられたエーテルを使わなければならない。

イズミは両親から知らされていないようだし、ダーシェンカもイズミに説明しづらくて語っていないことなのだが、ネクロマンサーがリビングデッドに分け与えたエーテルはネクロマンサーの意思一つで取り戻すことだって可能なのだ。

そうすればネクロマンサーのエーテル的な面での寿命は回復する。反面、リビングデッドは二度目の死を迎えることになる。リビングデッドを失えば、ネクロマンサーは貴重な楯を失うことになるのだが、リビングデッドを棄てないネクロマンサーは、いない。

ネクロマンサーの家系に生まれたものはよく蝶に例えられる。最初のうちは一般人と変わらないから芋虫、次にその魂に人を蘇らせる能力が付加し蛹、そして、魔術師とすらも一線を画する強大な“力”を手に入れて蝶になる。

どうせ捨てられるなら、蝶になるまでは何の躊躇もなくネクロマンサーのエーテルを使い、補充し続ける。それがダーシェンカの考えだったはずなのに、出来ずにいる。

イズミという、優しい少年のせいで。

「私は……何をやっているんだろうな」

自嘲気味に呟いたダーシェンカに、アルシェラがわずかではあるが眉を寄せた。

「イズミの寿命を考えて、イズミの命を今ここで落としてしまったら本末転倒じゃないか」

誰に、というわけではなく呟き続けるダーシェンカに、アルシェラは攻撃の勢いを緩めた。

緩めたからといって隙が生じるわけではないのだが、それでもダーシェンカが決断を下すきっかけにはなった。

決意を、固めるための。

「アルシェラとかいったか？ 本気で来ないと、即座にあの世だぞ？」

ダーシェンカは攻撃の手を不意に止め、ニヤリと笑いながら言う。

アルシェラもダーシェンカの佇まいに只ならぬものを感じ取ったのか、攻撃の手を止めた。だが、構えは解かない。相も変わらず無表情をダーシェンカに向けている。

ダーシェンカが目を瞑り、深く、静かに息を吐きだした。

周囲に静かな風が吹き抜ける。いや、吹き抜けたわけではなかった。その風は、ダーシェンカを中心に巻き起こっていた。風は徐々に勢いを増し、突風の域に達する。蒸し暑い空気を薙ぎ払うように突風は吹き続けた。

そして、パタリと風が止んだ。

「飛びかかってこなかったのは、正解だったな」

風が止むのと同時に目を開いたダーシエンカは、アルシェラに向かって微笑みかける。口元は微笑みを浮かべていても、目は笑っていなかった。それどころか、なんの感情も宿っていない。先ほどまで燃えていた怒りの炎さえ立ち消えている。

「おかしな、空気を感じましたので」

アルシェラは表情を変えることもなく応じた。だがかすかではあるが構えは警戒の色を濃くしている。

そんなアルシェラを視界に入れながら、ダーシエンカはナイフを握っている手を見つめた。その手は、淡い青色の光を放っている。手だけではない。ダーシエンカの体中が淡く青色に輝いていた。

二百年ぶりに行った魔術ではあるが、きちんと成功しているようだ。ダーシエンカはそのことにひとまずの安堵を覚える。

だが、本当に胸を撫で下ろすのは敵を排除してからだ。

ダーシエンカは自分に言い聞かせると、軽く地面を蹴った。アルシェラに向かって一直線に突っ込む。速度は先ほどまでと大差ないが、動きの切れは段違いだった。一瞬でアルシェラとの距離をゼロにしたダーシエンカは、ナイフを横薙ぎに払う。

アルシェラは数瞬表情を歪めたが、やはり紙一重でかわす。紙一重でしかかわせなかったのではなく、動きを最小限に抑えたものだった。

先ほどまでとなんら変わっていないように思えるダーシエンカの動きに、アルシェラは若干疑問の表情を浮かべる。

ダーシエンカはそんなことはお構いなしに、ナイフを振った反動を利用し、そのまま鋭い回し蹴りを放った。

大層な口を聞いた割に、先ほどまでとなんら変わりのない動きを繰り返すダーシエンカに、アルシェラは軽蔑するような視線を向ける。向けながら、最初の一撃を受け止めたときと同じように左腕一本で蹴りを受け止めた。

遊びに付き合うのは飽きました、そう吐き捨てながらダーシエンカに止めの一撃を叩きこもうとしたアルシェラが見たのは、蹴りを受け止めきれずにあらぬ方向に曲がった自分の腕だった。

「あれ？」

アルシェラの口から洩れたのはそれだけだった。普通の人間なら激痛で気を失うか、酷い場合は気を失えずに絶叫を上げていただろう。

動きを止めたアルシェラを気にすることなく、ダーシエンカがナイフを横薙ぎに払う。首を切り落とす、ただそれだけのために放たれる迷いのない一撃。

アルシェラはその一撃を軽くスウェーして避け切る。

「攻撃速度は先ほどと変わっていませんよね？ ならなぜ私の腕はこうなっているのでしょうか」

アルシェラはダラリと垂れ下った左腕を見つめながら呟く。

痛覚が無いからいくら傷付けられようが体を動かすことは可能なのだが、さすがに筋組織やら骨格やらが機能しなくなるとは動かしようがない。先ほどの一撃はアルシェラの組織を無力化したということだ。並の武器では壊することなど出来ないまでに強化された体を、たかが蹴り一発だけで。

「答える義理は、ないっ！」

ダーシェンカは叫びながら拳を突き出す。

アルシェラはさして慌てる様子も見せずに拳をかわす。左腕の機能を失いながらも、アルシェラは全く動じない。

ダーシェンカはその理由を察していた。ごく単純な理由なのだ。自分がいま魔術を發動しているように、アルシェラにだって奥の手の魔術が残っているはずなのだ。

だから、出来るならば、アルシェラが魔術を發動させる前に叩き潰しておきたい。だが厄介なことに、アルシェラはそうさせてくれない。先ほど左腕をへし折った時、そのまま首もへし折る予定だったのに、即座に体をずらされて出来なかった。

極力短期で決着をつけたいのだが、なかなか上手くいかない。

ダーシェンカは唇を噛みしめながらアルシェラに攻撃を仕掛け続ける。そのどれも上手くかわされてしまうのだが。

(避けるのではなく防御する方向に持っていければ、組織破壊が出来るのに)

ダーシェンカは胸中に呟いた。

ダーシェンカが發動している魔術は諸刃の剣なのだ。体中にエーテルを走らせ、あらゆる魔術を無効化する絶対防御。絶対防御でありながら、肉体強化を行っているリビングデッドに対してはその肉体強化を無効化するから、攻撃力が飛躍的に上がったように見える。

それは同時に自分の命を削ることと同義だった。エーテルは走らせれば走らせるほど消費される。消費しきるまでに相手を倒さなければならないのだ。

今のところまだ時間はありそうだ。ダーシェンカは自分の体が発している青い光を見ながら結論付ける。

この青い光こそエーテルそのもので、一流の魔術師か、今のダーシェンカのように特殊な魔術を發動させていなければ、はっきりとは視認できないモノ。

アルシェラの様子を見る限り、アルシェラにエーテルは見えていない。

墓場でエーテルを宿らせた骨片をバラまくという高等な——見方によっては無駄な——陽動を行ったのは、アルシェラではなくアルシェラを蘇らせたネクロマンサーなのだろう。

今はそんなことを考えていられる状況ではないのだが、ダーシェンカはどうしても思いを巡らせてしまう。

アルシェラを倒したとしても、その後ろにはまだ敵がいる。一流の魔術師どころか、ネクロマンサーという強大な敵が。街の住民の意識を操作していることから考えて、

すでに“覚醒”しているネクロマンサーだろう。

(私が、未来を見たいがためにリビングデッドになった輩だったら、絶望する相手だな)

ダーシェンカは心の中で自嘲気味に呟いた。

それでもその表情に杞憂は見てとれない。見方によっては嬉々としているともとれるような表情だった。

口元に淡く、歪な微笑みを浮かべながら、ダーシェンカはアルシェラに攻撃を仕掛け続ける。

その全てがアルシェラの巧みな体捌きでかわされてしまうが、ダーシェンカの表情に焦りはない。

アルシェラのかわすコースの全てがダーシェンカの誘導通りで、あと数回の攻撃で、アルシェラを防御しなければならない体勢に追い込める予定だった。

それで勝敗が決するはずだった。

「仕方ありませんね。奥の手、です」

アルシェラは不意に、動かせる右手の指をパチリと鳴らした。

それでもダーシェンカは攻撃の手を止めなかった。

ダーシェンカの目にはすべて見えていたのだ。アルシェラの体に流れるエーテルの動きが。指を鳴らそうが、その流れに変化がない以上、それはフェイント以外の何物でもなかった。

ダーシェンカは迷うことなくアルシェラに止めの一撃を叩きこもうと、拳を突き出した。アルシェラの顔面めがけて。

次の瞬間、ダーシェンカは目の前に広がる光景に我が目を疑った。拳はアルシェラに届かなかった。

それどころか、ダーシェンカの顔が鮮血に染まっている。

その血はダーシェンカのものでなければ、ましてやアルシェラのものでもなかった。

「な、んだ、これ、は」

ダーシェンカはやっとのことで声を絞り出した。

なんとか絞り出せた声も掠れてしまってほとんど聞き取れなかった。

ダーシェンカにとってそれほどの衝撃だった。

鮮血を浴びたことが、ではない。もとよりアルシェラの頭を叩き潰すつもりだったダーシェンカにとって、鮮血程度は何でもなかった。

問題はそこではなかった。

肉体強化で能力に補正が掛かっているダーシェンカですら認識出来ない速度で、何者かがアルシェラとダーシェンカの間を割って入ってきたのだ。

アルシェラをかばうために間に入った、などという理由ならば、ダーシェンカも次の行動に支障をきたさなかった。

だが、目の前に広がっている光景はそんな理解し易い光景では無かった。

「間一髪で間に合いましたね」

アルシェラが感情の籠らない声音で呟いた。

アルシェラの顔もダーシェンカと同様、血に染まっていた。それだけではない。アルシェラは右腕全体も真っ赤に染まっている。

そして、ダーシェンカとアルシェラの間には、頭が消失し、首元から血をドクドクと溢れさせている人間の姿があった。

人間、とは言ってもイズミに攻撃を仕掛けていた、体全体が赤黒く変色しているゾンビめいた男のうちの一人だったが。

首をなくした男の体は、重力に引っ張られて鈍い音とともに地面に倒れこんだ。倒れこんだきり、ピクリとも動かない。ただ、首元から紅い液体を垂れ流し続けている。

ダーシェンカは確かに見ていた。先ほど、この男がいきなりダーシェンカとアルシェラの間を割って入り、割って入った瞬間にアルシェラが男の頭を叩き潰したのを。

楯として男を利用するなら理解できるが、アルシェラ自身が男を攻撃する理由が全く掴めない。

ダーシェンカの思考が停止しかけたとき、背後から嗚咽の音が上がった。ただの嗚咽ならダーシェンカにとって振り向く理由にはならないのだが、それがイズミのものあっては振り向かないわけにはいかなかった。

ダーシェンカはアルシェラに気を配りながら、イズミを視界に入れる。

そこには首のない二つの死体を見下ろしながら、蒼白な顔で吐き気を堪えているイズミの姿があった。

その光景を目にしたダーシェンカの思考は、一瞬ではあるが完全に停止した。

首なし死体をイズミが作り上げたとは到底考えられない。イズミにそんな力はないし、その大前提となる強靱な——一種の厚かましさとともいえるような——精神すら持ち合わせていない。

では、誰がこんな事を？

ダーシェンカの心は、敵が一気に三人減ったにも関わらず、先ほどまとは比べ物にならないほどの絶望にも似た恐怖に駆られていた。

「蠱毒、応用編ってやつですかね」

アルシェラは攻撃をしかける様子も見せずにポツリと呟いた。

吐き気に苛まれているイズミは何の反応も見せないが、ダーシェンカはピクリと眉を動かした。そしてすぐに両の目が鋭く吊りあげられる。

「蠱毒、だと？」

ダーシェンカは言葉に怒気を込めて呟いた。

蠱毒。地を這いまわる蟲の類を一つの壺に何十何百と放りこみ、ひと月ほど地中に埋めておき共食いをさせるといふもの。最後の一匹には強大な怨念が宿り、莫大な力を持つという、最も原初的な呪詛魔術の一つ。

アルシェラは確かに蠱毒と言った。だが、蟲の類なんて見渡す限りどこにもいない。存在するのはイズミ、ダーシェンカ、アルシェラ。それに首をなくした人間が三人。

つまりは、アルシェラは人間を使って蠱毒を使ったということだ。

おそらく、アルシェラが指を鳴らした瞬間に、イズミに攻撃を仕掛けていた男達が、共食いの代わりに殺し合いを始め、生き残った一人がアルシェラに襲いかかったのだろう。

先ほど割り込んできた男は、アルシェラを庇うためではなく、殺すために割り込んできたのだ。

そしてそれをアルシェラがこともなげに葬り去った。つまり、この時点で蠱毒の術式が完成したということだ。

強大な怨念と力がアルシェラに宿ってしまった。

ダーシェンカはアルシェラを睨みつけながら確信する。アルシェラのエーテルの質が、明らかに先ほどまでと異なっている。

淡い青色だったアルシェラのエーテルは、限りなく黒に近い紫色に変色していた。「なるほど、エーテルを高速で循環させて魔術を無効化させていたのですか。どうりで私の腕がへし折れられるハズです」

アルシェラはダーシェンカを睥睨しながら呟く。

この言葉はアルシェラがエーテルを可視できるようになったことの証明であり、同時にダーシェンカの強みが一つ減ったということだった。

強みが一つ減ったということだけではない。アルシェラは一度見ただけでダーシェンカの魔術の秘密を解き明かしてしまった。

率直に言ってしまうと、敗北に限りなく近い状況だ。

ダーシェンカはアルシェラのエーテルの質が変わった事は理解できても、どんな魔術を施しているのか、あるいはこれから施すのかということが予想できない。

それとは対照的に、魔術の構造を解き明かしたアルシェラは、ダーシェンカの魔術に対して有効な対抗策を練れるだろう。

いとも、簡単に。

「こちらの攻撃は一切効かない。それだというのにあなたの攻撃は甚大なダメージを私に与える。まったく、勝ち目がありませんね」

アルシェラは残念そうに溜息を吐き、語気を強めて続けた。

「あなたに制限時間がなければ、の話ですがね」

アルシェラはダーシェンカに鋭い視線を向けながら言いきる。

アルシェラという言葉にダーシェンカは拳を強く握りしめた。あまりの強さに拳の中から血が垂れ落ちてくる。

やはり見抜かれている。ダーシェンカは歯噛みしながら胸中に呟いた。

アルシェラはダーシェンカに消耗戦を挑むつもりなのだ。

付かず離れずの戦いを続け、ダーシェンカのエーテルを空にして始末する。それがアルシェラの思い描くシナリオだろう。

わざわざダーシェンカの魔術の仕組みを口に出したのも、ダーシェンカに「私は全てお見通しですよ。あなたが何をしようが無駄ですよ」と暗にプレッシャーを掛け、同時に挑発しているのだ。

そんな見え透いた挑発に乗るほどダーシェンカは愚かではないのだが、それでも強い焦りが生まれるのは止められなかった。

形勢はアルシェラ有利だということに、攻めてくる気配が一向に無い。それはアルシェラの持つカードの中に、ダーシェンカの魔術に対抗しうる手段がないと受け止めることもできる。それならば先ほどと同じように、理詰めで防御しなければならない体勢へと追い込めばいいだけだ。

しかし攻撃を仕掛けたところで、アルシェラの罠が待っているという可能性も高い。

身動きがとれないというのが、ダーシェンカの結局だった。

だが。

「お前の言うとおりに、私の時間は有限だ。だから……」

ダーシェンカは逆手に構えたナイフを、ゆっくりと眼前に掲げる。

「立ち止まらないっ！」

そう叫び、ダーシェンカはアルシェラに勢いよく飛びかかった。

第三章 意識

1

目の前は真っ暗だ。何も見えない。

いきなり目の前で閃光が走り、何も見えなくなった。

自分に何が起こったのか、全く分からない。

息が、苦しい。一呼吸するたびに鼻を、喉を、鉄の臭いと味が通り抜けていく。

ここは血の海の中なのだろうか、などという考えも湧き出てくる。

2

イズミは暗闇の中で喘ぎながらも、浮かび上がった愚考を一笑にふした。

そうだ。自分は先ほどまでゾンビめいた男達と、街中で戦闘を繰り広げていたハズ

だ。

繰り広げ、それからどうなったんだ？

イズミはそこから先を思い出そうとして、猛烈な吐き気に襲われた。

呼吸が、より一層困難になる。一呼吸することすら容易ではなかった。

「たす、け、て……」

老婆のようなかすれがすれの声がイズミの口から洩れる。

暗闇の中でその声に答えるものはいない。イズミは今度こそ死を覚悟した。

自分が何者であるのかという記憶が薄れていき、自身の存在が暗闇に蝕まれていくような感覚を覚え始めてさえた。

「目を閉じるんだ」

暗闇に声が響く。イズミのものではない。

若い、まだ少年と思えるような、しかしその落ち着きぶりは青年のものとも取れそうな、

なんとも不思議な声。

「目を、閉じる？」

誰のものとも知れない声ではあったが、他に頼れるモノのないイズミは不思議な声にすぎた。

目を閉じろ、と声は言う。

今、自分は目を開いているのだろうか。それがイズミには分からなかった。だから、目の閉じ方が分からなかった。

「そこまで重症か……なら仕方ない。俺が閉じてあげるよ」

声は心なしか呆れているようだった。

自分はまだ目を閉じられていないということなのだろう。

目の閉じ方が分からない、などということは呆れられても仕方ないのだろうが、この状況で呆れられることは、イズミにとって少し不愉快だった。

イズミがムっとしていると、不意に、暗闇に温もりが宿った。

温もりが暗闇を、イズミを包み込んでいく。温もりが広まるにつれて、暗闇が小さくなっていくのを、イズミは感じ取っていた。

暗闇が小さくなるという表現は何とも珍妙だが、イズミにとってそれが一番しっくりくる表現だった。

「落ち着いたか？」

声は穏やかに言う。

目を閉じているイズミに声の主の姿を確かめる術はなかったが、それでも敵ではないのだろうと判断し、黙って頷いた。

声は短く「そうか」と呟き、何やらブツブツとつぶやき始める。

イズミが聞き取れた範囲では「奇作と最高傑作のどちらが上か」だとか「性能の三分

の一も発揮できてない」だとかよく分からない呟きばかりだった。

イズミはその呟きに耳を傾けながら、冷静な思考を微かではあるが取り戻した。冷静な思考とともに、先ほどの出来事も鮮明に思い出した。

自分の目の前でゾンビめいた男達が、いきなり殺し合いを始めた。目の前で二つの頭が消え去り、その瞬間に閃光が走った。

そして、いつの間にか暗闇に立っていた。今も暗闇の中にいることに変わりはないのだが、今と先ほどでは明らかに感覚が異なっていた。

先ほどまでの暗闇は外側に延々と続いていく暗闇で、いま立っている暗闇は内側に伸びていく感覚を覚える。

イズミは様々な事象を思い出していき、思いだしていく度に、視覚以外の感覚が機能を取り戻していった。

道を行き交う人々の織りなす喧噪、少し離れたところからダーシェンカとアルシェラの戦闘の音と思しきものが聞こえてくる。

そして、脛の上に添えられている人の手の温もりに気付いた。

「人の、手？」

我知らずイズミは呟いていた。

なぜ自分の脛の上に手が添えられているのだ？ この街の人間は一人残らず敵の支配下に置かれているのではないか？

ならばこの手は誰のものなのか。ダーシェンカのものではない。ダーシェンカはいまだ戦闘を繰り広げているのだから。

イズミの背筋が急速に冷えていく。この街で意識を正常に保てるような人間といったら、

イズミの思い当たる限りでは一人しかいない。

敵の、ネクロマンサーだ。

「あなたは、誰ですか？」

イズミは努めて冷静な声で尋ねた。手を添えている者がよしんば敵であったとしても、ここで慌てるのは得策とは言えない。こうして体に触れられてしまっている以上、すでに勝負が決まっている。下手に動いて状況をかき乱すより、現状を正確に認識することが急務だった。

「俺？ 俺はダーシェンカと戦ってるリビングデッドの持ち主だよ？」

答えた声は意外にも——と言うよりやはり——暗闇で響いた声と同じものだった。

「っ！ なんなんでも僕を殺さないんですか？」

イズミは上ずった声を上げる。予想していた答えとはいえ、自分の命を奪わんとする者が目の前にいることは恐ろしかった。

平和ボケしていた頭の中に“死”という一字が急浮上してくる。それでも何故か、ダーシェンカへの怒りは湧いて来なかった。「なんで僕をキチンと守らない！」とかいう言葉

よりも先に「三分間の約束は果たせたのだろうか」という言葉が浮かんでいた。
「あ、ごめんごめん。誤解させるような物言いだったね。違うんだ。俺は君の敵じゃないよ……かといって味方でもないんだけど」

「あの……どういう意味、ですか？」

イズミは予想外の言葉に驚きを覚えながらも、勘ぐるような口調で尋ねる。
「俺はあの金髪のリビングデッド……アルシエラって名前がつけられてるんだっけ？
の正式な持ち主、というか作り主で、ちょっとしたアクシデントで君の敵に奪われちゃったんだよねえ」

声はさして深刻そうな様子も見せずにサラリと言い、続けた。
「つまり俺は盗まれたものを返してもらいに来ただけ。君に危害を加えるつもりはないんだよ。如月イズミくん」

「……敵じゃないのに、どうして僕の名前を知っているんですか？」

イズミは言葉の端々に警戒心を覗かせながら尋ねた。本当ならこの場から走り去りたいのだが、その気持ちを必死に押さえつける。

「そりゃ、顧客の名前ぐらい覚えているさ。ダーシエンカだって俺の商品だったしな。なんなら君の部屋の間取りも答えてあげようか。あ、それよりも誰もいないのにクーラーをかけっぱなしにしておくのは地球に優しくないと思うぞ？」

イズミとは対照的に、声に気負う様子は全くない。旧友と世間話でもするかのような口調で淡々と言葉を紡いでいた。

その言葉はイズミに一つの推測をもたらした。推測とは言っても、それがイズミの中で生まれたときには、半ば既に確信だった。

「まさか……あなたは、死体商ってヤツですか？」

「ご明察。俺はしががない死体商さ。リビングデッドを作り、売る以外に能のない、ね」

声は喉をクックと鳴らしながら楽しそうに言う。

イズミはその声を聞きながら眉をひそめた。

何が楽しいのか、という疑問はもとより、目の前で激しい戦闘が繰り広げられ、なおかつ足元には首のない死体が二つ転がっているような惨事の中で飄々としていられることが信じられなかった。

「あの……あなたは どうして僕の脛の上に手をかざしているんですか？」

イズミは声の態度に苛立ちに似たものを感じたが、それを隠しながら尋ねる。

現状の認識。イズミは無意識のうちに、ダーシエンカの教えを实践するための行動を愚直に——けなげと言ってもいいほどに——続けていた。

「ああ、この手は君の眼がエーテルを過剰なまでに捉えていたから、それを抑え込むために、ね。もう大丈夫だろうから離すよ」

言葉と同時に、イズミから手が離れた。

イズミは手が離れると同時に、脛をゆっくりと持ち上げた。

(大丈夫だ。今度は体の感覚がある。目も開くはずだ)

イズミは自分に言い聞かせながら目を開ける。

そして今度は、目の前に広がる光景に、瞼の降ろし方を——一瞬ではあるが——完全に忘れてしまった。

「な、に……これ」

ツーンと鉄の臭いが鼻腔を通り過ぎた。先ほどまでも血の臭いと分かる匂いは漂っていたが、ここまで強烈ではなかった。

人の感覚の六割は視覚に頼っているというが、イズミの視覚が捉えた光景はあまりに酷だった。

血に染まっている、自分の上半身。

「見ない方がいい」

イズミが足もとに視線を移そうとしたとき、クイと顎に手が添えられる。

イズミは視線を足元ではなく、手の持ち主の方へと向けた。

そこにはイズミと同年か、少し年下くらいに見える少年が立っていた。

所々ウェーブのかかった色素の薄い髪に、琥珀色をした円らかな瞳。肌も透き通るように白く、どこか儂げな雰囲気醸し出している。

声を聞かなかつたら少女と判断していたかもしれないほどに中性的な容姿だった。

「まっとうな人間が見られるものじゃないから、見ない方がいい」

呆然としているイズミに、少年は苦笑しながら肩をすくめた。

イズミはその言葉に生返事を返すのがやっとだった。

もはや何がなんだか分からない。体は血まみれだし、凄惨な状況には不釣り合いなほど落ち着いた少年が目の前にいる。

本当に、知ることは出来ても、理解は不可能な状況だった。

「さてさて……どうしようね、あれ」

少年はイズミの顎から手を離すと、その手で一点を指し示す。

ダーシェンカとアルシェラの、先ほどより一層苛烈を極めている戦いを。

イズミは手につられて戦いを視界に入れ、太陽のものではない光に目を細めた。

「なんですか、あれ」

イズミは少年に問う。年下のように見えても、少年が漂わせる超然とした雰囲気がイズミに敬語を使わせる。

イズミの目には不可思議な光景が写りこんでいた。街中で殺し合いが繰り広げられている次元はとうに不可思議ではなくなっているイズミをしても、不可思議と思わせる光景だった。

ダーシェンカとアルシェラが得体の知れない光をまとっている。

ダーシェンカは澄み渡る空にも似た青色の光。対するアルシェラは雷鳴轟く寸前の雲のような黒に近い紫で、いっそその身に暗闇をまとっていると言った方が正しいとす

ら思えた。

「あれが、エーテルだよ。人を生かす源で、魔術師を魔術師たらしめるモノだ。そしてエーテルは普通の人間には見えない。キミは魔術の世界に一步近づいた訳だ。いや、家系からすれば生まれたときから魔術の世界にどっぷりだがね」

少年は朗らかに笑いかける。

その笑顔がどうにも不吉なものに思え、イズミはただ曖昧に頷くので精一杯だった。

「そしてさっきの問題に戻ろう」

少年はパンと手を叩き、続けた。

「俺はアルシェラを取り戻したい。ところがアルシェラは敵の支配下で、ダーシェンカと交戦中だ。一番手っ取り早いのはダーシェンカにアルシェラをのしてもらおうコトなんだけど……それも難しいカンジだね。さて、イズミくん。君ならどうするね？」

少年は不意に射抜くような視線をイズミに向けた。

無意識に姿勢を正したイズミは、視線を宙に彷徨わせる。

(僕なら、どうする？ そんなの分かる訳ないじゃないか。ダーシェンカが手こずっている相手に、どうこうするだなんて)

イズミは横目で二人の戦闘を見ながら胸中に呟いた。

そしてハタと気付く。

「ん？ なにか思いついたの？」

「い、いえ。ただちょっと気になって」

「何が？」

「どうして……どうして二人はあなたに気付いていないんですか？」

「どうして、気付いてないと思うの？」

少年は少し目を見開き、口元を少しだけ緩めながら問い返した。

「二人の注意が僕にしか向いていないからです、それに……あれ？」

「それに、なんだい？」

「僕は……どうして、」

イズミは呆然と呟く。どこか遠くを見るような視線で。

「どうしてそんなコトがわかるんだろう、かな？」

少年は心底楽しそうに微笑みながらイズミの言葉を引き継いだ。イズミが口にしようとしたそのままを。

「え、ええ……そうです。そんなこと、僕に分かるはずがないのに」

「そうとも限らないよ」

「どういう、ことですか？」

「一つは、キミの状況判断能力が優れているという可能性。二つ目は、ダーシェンカとキミが繋がっているから、という可能性。僕としては後者の方が嬉しいんだけどね」

少年はクスクスと笑いながら言う。

その言葉の内容は、あまりに突飛かつ場に似合わない空想的なモノ。

あまりの馬鹿らしさにイズミは少年に怪訝な視線を向けたが、少年はその視線を「失敬な」と言わんばかりの溜息でいなし、再び語りだす。

「繋がっている、というのは何もロマンチックな心の繋がりとかじゃない。エーテルの繋がりがさ。キミはダーシェンカにエーテルを分け与えているだろ？ それがキミとダーシェンカの繋がりが。ダーシェンカがエーテルを使用しているから繋がりが強くなっているのか……はたまた、いや、それこそアホらしいかな。ともかく、だ。キミはダーシェンカの間隙によって状況を判断した、と俺は思いたいね」

少年の言葉を聞き、イズミは曖昧に頷く。

どだいイズミが魔術的なことをキチンと理解するのは無理な話なのだ。

だが、今回はなんとなく分かる。

先ほどから妙な感覚が自分の中にのたうちまわっているのだ。

自分のモノでない感情、自分のモノでない思考、自分のモノでない感覚、そして……。自分のモノでない、明確な殺意が。

「もし……もし仮に、あなたの言ってることが正しいとして、あなたはどのようにして二人に認識されてないんですか？ あの二人に気付かれずにこんなところまで来るなんて不可能です」

「ああ……それは簡単なことだよ。俺はここにいないもの」

少年は、とんでもないことをサラリと言ってのけた。

あまりのなんてことなき漂う雰囲気、イズミはそのまま流しかけたが、すぐに言葉の中身の異常に気付く。

「なっ!? あなたは確かにそこにいるじゃないですか！ さっき僕に触れていたし！」

「それは錯覚だよ。俺はここにはいない。強いて言うなら君の頭の中にいるのかな？」

少年はトントンと自分のこめかみを叩きながら言う。

「頭の、中？」

「そう、頭の中。君は俺の魔術に掛かってるのさ。俺は頭の中において、君の神経を誤作動させて、あたかも俺が君の目の前にいるように思わせているって訳。実際頭の中にいるわけじゃないけど、わかりやすく言えばそういうこと。実在の俺は少し離れた場所から君に話しかけてる」

「そんなの信じられるわけ、」

イズミが「ない」と否定の言葉を続けようとした瞬間。少年の姿が忽然と消えた。

『信じる気になったかな？』

それでも声は響き続ける。

空気を通してではなく、普段思考するときと同じような感覚で、頭の中に響く。

「そんな……僕は、いつ魔術に？ ダーシェンカの間隙を突くなんて出来っこ」

『ダーシェンカが目覚める前なら君は隙だらけだっただろ？ 君がダーシェンカを目覚

めさせたあの日、僕は君の家の中にいたのさ。すぐさま魔術を掛けて君の目を欺き、家を出るのは簡単だったよ』

「なんでわざわざそんなことを？ やっぱりあなたも不老不死が目的ですかっ！」

『違う違う。俺の目的は君とダーシェンカの観察さ。まあ、正直そっちはあんまり実を結ばなかったんだけど、アルシェラを見つけるのに役立ったから良しとしよう』

「はあ……それで、結局あなたは何がしたいんですか？ アルシェラを取り戻したいんだったら、出てきてダーシェンカに加勢するなりなんなりすればいいじゃないですか」

『無理無理！ 俺の魔術は戦闘向きじゃないもの！ あんな危ないところに行ったら即死だね、即死』

「だったら黙って見てれば、」

『だからキミにお願いがあるんだよ』

少年の言葉にイズミは一瞬耳を疑った。いや、この場合は耳を通してないから頭を疑ったというべきかもしれないが。

「僕に、お願い？」

『そう、今の君にならギリギリできそうなお願い』

「なん、ですか？」

イズミは口調に恐れを含みながら問う。

先ほどの少年も口にした通り、ダーシェンカとアルシェラの戦いに加わろうものなら、即ち死だ。

『ダーシェンカに力を貸してほしいんだ』

予想の一つだった言葉に、イズミは納得しつつも絶望を感じずにはいられなかった。

イズミの絶望を知ってか知らでか、少年は滔々と言葉を紡ぐ。

『このまま行くとダーシェンカは間違いなく負ける。ああ、断言できるね。だから君には彼女をサポートしてもらいたい』

「そんなの、ムリですよ！ あなただっただ言っただでしょ!? 即死ですよ！ 即死！」

『違う違う。何も俺はあの暴風に飛びこめと言ってるんじゃないんだよ、イズミくん。この場からダーシェンカをサポートして欲しいんだ。君たちの中にある繋がりを利用して』

「繋がりを、利用する？」

『そう。君の中にダーシェンカの間接があるように、ダーシェンカの中にも君の間接があるはずなんだ。それを利用してアルシェラを倒す』

「そ、そんなの出来るんですか？ だって、本当に気のせい程度の感覚ですよ？」

『意識していないから気のせい程度の感覚なんだ。ダーシェンカと繋がっていると信じ、自分の中で強く思考しろ。ダーシェンカに伝えようとな』

少年は語気を強め、叱咤するように言う。

「でも……伝えるって言っただって、何を伝えればいいんですか？ 僕がダーシェンカに伝えられるようなことは無いですよ」

『そうとも限らんさ。ダーシェンカはアルシェラと至近距離で戦っているが、キミは離れてそれを見ている。見ることができる。サッカーの試合とかをテレビ中継で見ているって思ったことはないかい？ どうしてあそこにパスしないんだ、とか。達人じゃなくても離れていれば見えるものがある筈だ』

「それを……ダーシェンカに伝えろと？」

イズミはいぶかしむ様な口調で呟いた。

少年の言わんとすることは理解できる。

主観と客観という二つの感覚を同時に操るようなことは、戦闘時においてもっとも難しいことのうちのひとつだが、出来たとなれば大きな戦力になる。

だが、あのすさまじい二人の戦闘を観察して、イズミが何かに——それもダーシェンカが気付いていないような——気付けるかと言えば、不可能に近いものがある。

『まずはダーシェンカの狙いを推測するんだ。それくらいならできるだろ？』

少年の言葉にイズミは黙って頷いた。

その程度のことならば出来る。出来なければ先ほどのゾンビめいた男達の攻撃をかわせた筈がない。

イズミは堅い唾を飲み下し、ダーシェンカとアルシェラの戦いを注視する。

初見では、ダーシェンカ有利に思えた。

イズミも特訓中に幾度となくハメられた、防御しなければならぬ体勢への誘導。

これを続ければアルシェラに攻撃を当てる事が出来る。初撃はアルシェラに防がれてしまったが、アルシェラの左腕が垂れさがっていることから察するに、ダメージを与えることができたのだらう。

だが、何かイズミの中で引っかかる。

ダーシェンカが巧みに誘導しているようにも見えるが、見方を変えればアルシェラが誘導させているようにも見えてくる。

となれば、ダーシェンカが攻撃を仕掛けた際に何か切り返してくる可能性が高い。

しかし、そんなイズミでも気付ける程度のことにはダーシェンカが気付いていないとは到底思えない。

となれば。

「ダーシェンカは……肉を切らせて骨を断つ、つもりかな？ いや、骨は断てないと踏んで、アルシェラの手のうちだけでも暴くのか？」

イズミは確認するように呟いた。何も少年に答えを求めるというわけではなく、ただ単に自分で正しい答えを導くために。

「……たぶん、ダーシェンカは手の内を暴くつもりだ。その一撃に賭けてるんじゃないと思う」

イズミは一つの結論を導き出した。

どうやって、と問われれば、イズミは返答に窮しただらう。

最後の二択まではどうにか自分の考えで絞り込んだが、最終的には勘だ。自分の中にかすかに存在しているダーシェンカの感情を利用した、なんとも頼りない、勘。

それでもイズミはその答えに確信めいたものを感じていた。

『なるほど。存外出来るようだね』

少年の上からの言葉にイズミは顔をしかめるが、事実少年の方がイズミよりも魔術やら何やらの知識は上のようなので反論しようがなかった。

『じゃあ、キミが知りえないことを俺が補足してあげよう』

少年は気負う様子もなく、どこかこの状況を楽しむ様な雰囲気漂わせながら言う。

少年がイズミに対して補足したのは主に魔術に関するもので、ダーシェンカが発動している術式の効果と代償、それにアルシェラが使用した蠱毒という魔術の効果だった。

「それだけ聞くと、ダーシェンカが負けるとは思えないんですけどね」

イズミは前方でひたすらアルシェラに攻撃を仕掛け続けているダーシェンカを見据えながら呟いた。

いかなる魔術をも無効化する絶対防御にして、魔術的防御無視の突出した攻撃力。これのどこに負ける要素があるのか、とイズミには思えてならなかった。

たとえ制限時間つきだったとしても。

今もダーシェンカはアルシェラに攻撃を仕掛け続け、アルシェラは回避一辺倒。これを見ていれば、詰みの一撃でダーシェンカの勝利が確定する。少なくともイズミはそう考えた。

だが。そんなダーシェンカの能力などを知っていながら、少年はダーシェンカは敗北すると断じている。

「あの……あなたがアルシェラを作ったんですよね？ だったらアルシェラの弱点とか——」

『あいにく俺は弱点があるような製品は作らない主義でね』

イズミが情けなくすがろうとするも、少年は容赦なく切り捨てた。

『まあ、身体的能力だけならダーシェンカ有利だろうな。あの魔術もダーシェンカの戦い方に非常に相性がいい』

「じゃあ何が不安要素なんですか？」

『アルシェラが使った蠱毒だよ。アレはリビングデッド最大の問題であるエーテルの貯蓄量の問題をカバーするだけでなく、プラスアルファがある筈だ。ただの蠱毒ならいざ知らず、人間を利用したとなると……効果は計り知れない』

少年の重々しい声がイズミの頭の中で反響する。

少年はただ淡々と現状の情報を与えてくれた。

イズミが知りえない魔術的知識。少年が与えてくれたそれは事態を把握するうえで非常に重要なものだが、事態を打破するにはあまりに脆弱すぎた。

それでもなおイズミは思考し続ける。

なんの為に、とかそのようなものは頭の中に無かった。ダーシェンカが負けたら自分の命がないだとか、ましてや少年のためにアルシェラを取り返そうなどと言う思考は毛頭ない。

ただ単に、勝利するために。

ただ単に、アルシェラを殺害するために。

そこでイズミは我に返った。

今湧き出ている思考は自分のものではない。明らかにダーシェンカのものだ。

先ほどよりも強く、ダーシェンカの思考を感じる。思考だけでなく、感情も流れ込んでくる。

それは、静かなる殺意。純粹な、混じりけのない、殺意。

イズミが自身では抱いたことのない感情がとどまることなく沸き続けている。

だからイズミは気付いた。

魔術的、身体的なことでイズミが気付けたことは何もない。少なくともダーシェンカの敗北という結果を覆せるほどのものは。

だが、一つだけ。たった一つだけダーシェンカに伝えられるものを見つけた。

それは、常々イズミがダーシェンカに言われていたこと。

「冷静に、状況を、判断する」

イズミは自分の中にのたうちまわる殺意に苛まれながら呟いた。

ただのスポーツなら「冷静になれ！」と一喝し、拳の一つでも喰らわせれば事足りるだろう。

だが、この場合は違う。

言葉だけでは足りないし、拳を振るおうにも相手に痛覚がない。

となればイズミに出来ることは一つだけだった。

ただひたすらに自分が冷静になること。ダーシェンカのアルシェラに対する殺意を鎮め、

その冷静さをダーシェンカに取り戻させること。

イズミはその為だけに目を閉じ、精神を集中した。視角から入る戦闘の映像は、殺意を増長するのでシャットアウトする。音も、意識の外に置いた。

イズミはただひたすらに、自分の中に広がる闇に意識を沈めていった。

ダーシェンカを救う、ただそれだけのために。

3

夏の蒸し暑さを薙ぎ払うような風が吹きすさぶビルの屋上。

覗き込んでいた双眼鏡から視線を外し、喪服姿の少年がポツリと呟く。

「へえ……なかなか出来るじゃない、イズミくん」

その姿は紛れもなく、イズミの前に現われた幻影の実体だった。

「覗き見とは趣味が悪いな、キリコ」

不意に背後から掛けられた声にキリコと呼ばれた少年は片眉を吊り上げて振り返る。

そこにはベージュのスーツをまとった四十代半ばと見える紳士が立っていた。その後ろには、極力存在を主張しないようにひっそりと一人の女性が控えている。肌は白く、夏の日差し厳しいというのに汗一つ浮かんでいない。年齢は三十代半ばに見えるが、実際はもっと上のようにも思える。

「何をおっしゃる。息子のピンチを傍観してるヒトデナシよりはよっぽどマシですよ？

アクロマ機関の審判者・如月幸也さん。それに奥方の雪さん」

少年はビルの屋上に現れた人物にさして驚く様子も見せず、さも当然のように微笑を投げかけた。

その微笑をイズミの父・幸也は苦笑いながら軽く受け流すが、雪の方は口を固く結んで地上に切実な視線を投げかけている。

あたかも肉眼で息子の危機を捉えているかのように。

「私の息子はどうだね？」

「なかなか見込みありますね。状況判断能力には天性のモノを感じますし、何よりも身の程をわきまえている」

キリコは微笑を消し、ビルの下に視線を向けながら言う。

その言葉に幸也は顎を数回さすり、キリコに先を諭した。

「俺が彼にしたアドバイスは、どちらかと言えばアルシェラの粗を見つける方向へ流すものでした。だがイズミくんはそのことに時間を割かずにダーシェンカを落ち着けることに早々と専念した。まったく、大したお人好しですよ。他人の判断に命を預けるなんて。まあ、イズミくんごときに粗を見つけられるような作品を俺が作る訳ないから、それが一番の正解なんですけどね」

キリコは微苦笑しながらやれやれと頭を振った。

「お前の眼から見た勝算は？」

幸也は鋭い視線をキリコに向ける。

それは、イズミの前では決して見せることのない魔術世界での顔。

「……おそらく、あなた方が導き出してるものと同じだとは思いますが、甘く見て三割ってトコですかね」

「……やはり、か」

「ええ。リビングデッドとしての性能はダーシェンカ、アルシェラともに拮抗しています。ただ……“最後の禁忌”が何もイジっていない訳がありません。おそらく、蠱毒の他にも何か、いいえ、蠱毒の先にも何かあるはずですよ。まっとうなことを言わせてもらうなら、助けに行った方がいいと思いますよ？」

キリコは上目遣いに幸也を見た。

それは決して善良な心遣いからでた言葉ではなく、純粋な好奇心から生まれた言葉だった。

魔術の世界で“不死殺し”と恐れられる男が肉親への情愛と己の使命との間で揺れ動き、

苦悶の表情を浮かべる様を見たいという、ひどく歪んだ好奇心。

「ふん、愚問だよ。身を守る手段は与えたんだ。その身を自分で守れないならせめて敵の手の内を明かすことに役立って貰わなければな」

幸也は表情を変化させることなく断言し、踵を返す。

雪も黙ってそれに続く。

屋内へ入る扉のノブに手をかけたところで、幸也が不意に足を止めた。

「そうだ。まだ礼を言ってなかったな。イズミの目の“暴走”を押さえてくれたことは感謝する」

幸也はそれだけ言うと、キリコの返事を待たずにビルの中へと消えていった。

「……まったく、素直じゃないんだから」

幸也を無言で見送ったキリコはため息とともに言葉を吐き出した。

「本当はイズミくんが心配で心配でたまらないくせに。それに、お礼を言うためだけにイズミくんの傍から離れるなんて、どんだけ律儀なんだよ、あの夫婦。ま、そんな如月家だから俺も協力してやってるんだがね」

キリコは心底楽しそうに笑いながらひとりごちた。

4

ダーシェンカは一手一手アルシエラを追い詰める度に、自分が追い詰められていく感覚を覚えていた。

拳がアルシエラの顔を掠める。足がアルシエラの腹スレスレを横切る。ナイフがアルシエラの喉元に限りなく近い部分の空気を切り裂く。

どれもこれもかわされるが、どれもこれもダーシェンカが想定した回避コースを通っている。このまま行けばあと数十手で詰みだ。先ほどのように奇怪な現象に惑わされることもあるまい。

それでも自分が追い詰められていく感覚は消えてはくれない。

最初から分かっていたことなのだ。相手が何か罠を仕掛けていることは。

分かっているなお愚直に突き進むのは、それ以外に手がないから。

「あとどれくらい持ちますかね？ あなたのエーテル」

アルシエラはダーシェンカの拳を軽々と紙一重で避けながら呟く。

その言葉にダーシェンカは歯を食いしばるが、言葉は返さない。

分かっている、単なる挑発だ。攻撃のリズムを乱すための。

そう自分に言い聞かせるものの、ナイフを握る手に、より一層の力が籠ってしまう。言い知れぬ焦りが生まれてしまう。

アルシエラが回避一辺倒のこの状況は、ハタから見ればダーシエンカが押しているように見えるのかもしれないが、実際には違う。

状況は全くの互角。アルシエラに一発も攻撃を加えられず、しかし反撃を許さない。もし仮に、攻守が逆転したとしても状況は同じだろう。

アルシエラはダーシエンカの絶対防御の魔術の所為で攻撃に転じることは出来ないが、実際それも本当かどうか怪しいというのがダーシエンカの考えだ。

本当は軽々と自分を葬る力がアルシエラにはあるのではないか、アルシエラのドス黒いエーテルを目の当たりにすると、そんな畏れが生まれてしまう。

だが、そんな下らない感情はことごとく塗りつぶされる。

恐怖を上回る、圧倒的な質量の感情がダーシエンカの中にはあるから。

怨念。そう断言して構わないモノがダーシエンカの中にはある。

ダーシエンカの原動力であり、ダーシエンカが刃を振り続ける理由。

イズミとの平和で、和やかな、そして何より懐かしい生活を通して、その感情が薄れることはなかった。

確かに、イズミとの生活でダーシエンカは、失ったものをわずかではあるが、取り戻した。

取り戻した気になった。

だが、それは違ったと痛感する。

自分はもう二度と“アレ”を取り戻せない。

もう、自分に残されている道は一つしかない。

ひたすら、敵を排除する。リビングデッドの使命とか、そんなモノからではなく、自らの願望・欲求で敵をひたすらに殺す。

何よりも優先すべきは殺戮。それこそが自分に残された唯一の免罪符となる。

その免罪符すら自己満足に過ぎないと知りながらも、ダーシエンカは殺戮衝動を抑えられない。

イズミという温かな存在も、過去という楔の前では霞んでしまう。

いいや、過去ですらダーシエンカの中では擦れてボロボロになっているのかも知れない。

唯一の真実は目の前にいるアルシエラのみ。

ネクロマンサーを狙う禁忌を犯さんとする者。

その概念が、ダーシエンカの心を焦がす。

目の前にいるアルシエラの姿が、遠い日の最も憎むべき男の幻影と重なる。

だから、もう、殺すことしか考えられない。

ダーシェンカは鋭い視線をより一層鋭くし、攻撃の速度を上げた。
ただひたすら、目の前の敵を消し去ることだけを考えて。
無心に繰り返した攻撃は、次第にアルシェラを追い詰めていく。
追い詰めるとは言っても、壁際に追い込むようなレベルではなく、回避のリズムを少しずつ崩していき、防御しなければならない体勢に追い込むという高等なモノ。
イズミを追い詰めるときの十倍の手数が掛かった事を考えれば、アルシェラが只者ではないことは明白だ。
だが、詰みまで追い込めたことに違いはない。
ダーシェンカはさしたる感動もなく、地面を軽く蹴った。
たいした予備動作がなかったとは信じられないほどに高く、飛びあがる。
「しっ！」
ダーシェンカは短く息を吐き出し、体をねじった。
その勢いで鋭い回し蹴りが繰り返す。狙うのはもちろん、腕が使い物にならず、ガード不能な左半身。
急所の頭を狙うようなことはしなかった。面積が少ない分、万が一にもかわされる可能性がある。
だからダーシェンカは腰のあたりに狙いを定めた。どのみち腰をへし折って、脊髄という身体機能を奪ってしまえばこちらの勝ちだ。
ダーシェンカは自分の動きも、アルシェラの動きもスローモーションに感じられた。これで、トドメ。そう信じて疑わなかった。
否、疑えなかった。
だが、あと数センチで脚がアルシェラに触れるというその瞬間。ダーシェンカはふと気付いた。
アルシェラの口角が、歪に吊り上がっていることに。
何か、ある。それは初めから頭の片隅にあった思考。それでも、攻撃を繰り返したるうちにその思考は憎しみに押し潰されていた。
押し潰されていたことにも気付かなかった。
脚にはもうすでに、止められないほどの勢いが掛かってしまっている。
間に合わない。
この脚がアルシェラに触れたらその時点で、自分は死ぬのだろう。
ダーシェンカは刹那の中に直感した。
一度は死んでいるはずの頭に、走馬燈が流れる。
遠い日の記憶。イズミとの記憶。どれもこれも温かな思い出で、思わずそれに浸ってしまう。
だが、最後に浮かんだのは自分がまっとうな人間としての“生”を棄てる決意をしたあの日の、忌わしい、忘れたくても忘れられない記憶。

ダーシェンカは、心の中で憎しみの炎が膨れ上がるのを感じた。アルシェラに向けられた憎悪とは比較できないほど巨大で、圧倒的な、憎悪。

(こんなところで死ぬなんて……それこそ“死んで”も嫌だっ！)

ダーシェンカは胸中に叫び、意識せずに行動を起こした。

それが間に合うか否かなどという計算は、どうでもいいことだった。

「くっ！」

ダーシェンカは、アルシェラのドス黒いエーテルが、回し蹴りの打撃点に向かって急速に収束するのを見た。

魔術が発動し、エーテルが現実には作用する。

アルシェラの魔術は成功した。その証左に、周囲には酷い腐敗臭が充満していた。だが。

「……おや。避けられてしまったようですね」

アルシェラは、さして感情を込めることもなく呟いた。

ダーシェンカはあの一瞬、かろうじてアルシェラの魔術から逃れることに成功したのだ。

持っていたナイフを咄嗟に自分の足目がけて投げるといふ奇策によって。

そのナイフはダーシェンカの狙い通り、足の甲へと突き刺さり、蹴りの勢いを止めた。柄の部分はアルシェラの魔術が作用したのか、ブスブスと音を立てながら融解している——腐食していると言った方が適切かもしれないが。

「ギリギリ、だったかな」

ダーシェンカは足に突き刺さったナイフを気に留める様子もなく言った。

そんな言葉を発しながらも、ダーシェンカの様子は平時とは明らかに異なっていた。

額には汗がびっしりと張り付いており、肩が荒く上下している。

苦痛や疲労を感じないリビングデッドにその症状が現れることは、それだけで危険な信号だった。加えて、絶対防御の魔術も解除されている。正確には、維持危険領域に入ったから解除せざるを得ないというだけなのだが。

対するアルシェラは、息を切らしてもいなければ、汗が浮かんでいるわけでもない。イズミとダーシェンカの前に現れたその時から、全く変わっていない。

ただ一つ、身にまとっていたドス黒いエーテルが消えているという点を除いては。

だがそれでも、悠然と佇むその様は、ダーシェンカに深い絶望を与えた。

まだ何か奥の手があるのではないか、と思わせた。

だが、それも一瞬のことだった。

「私の負け、のようです」

アルシェラが掠れ掠れの声で言う。

同時に、アルシェラの左肘から先がスーツの袖ごと、鈍い音を立てて落ちた。

千切れたようになっているスーツの袖は焦げたような跡が付いている。千切れたその箇所はちょうど、アルシェラのエーテルが収束していた場所だった。

「本当は、同士討ちのハズ、だったんですけど、ね」

アルシェラはそう呟きながら、糸の切れた操り人形のように、ドサリと音を立てて地面に倒れ込んだ。

ダーシェンカはしばらくの間、倒れたアルシェラを呆然と見つめていた。信じられない、というような視線で。

「お、終わった、の？」

呆然としているダーシェンカの背後から、イズミの声が上がる。

ダーシェンカは我に返り、すぐさま声の方向へ視線を向けた。視線の先には、地面にしゃがみ込んでいるイズミの姿があった。

「ど、どうしたんだ!？」

ダーシェンカは叫び、イズミの元に駆け寄る。

目に見える敵がアルシェラ一人になってから、イズミの周囲に向ける警戒は低くなったが、それでもイズミの周囲に敵は寄せ付けなかったはずだ。それなのに、イズミは苦しげにうずくまっている。

「だ、大丈夫だよ。ちょっと、足が痛むけど……」

「見せてみろ」

ダーシェンカはイズミの横に座り、イズミが押さえている右足の靴を脱がせた。

「挫いた、というわけではなさそうだな。腫れてはいない。どういう風に痛むんだ？」

「な、なんといか……」

「本来はキミが感じるべき痛みだよ」

答えようとしたイズミの言葉を遮り、声があがる。

イズミにとっては聞き覚えのある、ダーシェンカにとっては初めて耳にする、声。

「誰だっ！」

ダーシェンカはすくと立ち上がりイズミを背に庇うと、声の上がった方向を見据えた。

そこには、とても中性的な顔立ちの、喪服を身にまとった少年——キリコがいた。

キリコは自分よりも大柄なアルシェラを、さして苦でもなさそうに腕に抱えている。

「俺のことはイズミくんが知ってるよ。敵じゃないから安心して」

キリコは肩を軽くすくめ、ダーシェンカの視線を受け流しながら言う。

ダーシェンカが確認するような視線をイズミに向けると、イズミはコクリと頷いた。

それを確認したキリコは満足そうに微笑み、続けた。

「イズミくんはね、頭に血の上った君を鎮めるために、頑張ったんだよ？ 感覚共有を利用してね」

「まさか、そんな……感覚共有、だと？」

ダーシェンカは呆然と呟く。

感覚共有。優れた魔術師と使い魔の間に成り立つ、ある種の魔術で、千里眼などを発現させようとするときに用いられる。

イズミからエーテルを分け与えられているダーシェンカも一種の使い魔と言えれば使い魔なのだが、一介の使い魔とは異なり、確固たる意志を持っている。

動物などの使い魔と感覚を共有する魔術師なら聞いたことがあるが、確固たる意志を持つ者——人間——と感覚を共有する魔術師など、聞いたことがない。

ましてや、魔術師としての修練を全く積んでいない者がそんなことをなすなどとは。「まあ、確かに俺も驚いた。まさか感情だけじゃなく、もっと具体的な……五感全部を共有するなんてのにはね」

「五感だっ!? じゃあイズミはまさか……」

「そう。君がアルシェラの魔術を避けるために刺したナイフの痛みを感じたのさ。まあ、感覚共有はもう終わってるみたいだからじきに痛みも引くよ」

キリコは軽く呟き、地面に落ちていたアルシェラの腕を拾い上げる。

「あーあ。ったく！ なんつー酷い使い方してくれるんだ。俺が丹精込めて作ったリビングデッドを使い捨ての藁人形のように使いやがって」

キリコは、腕の断面図をしげしげと眺めながら呟く。その視線には、イズミとダーシェンカなどこれっぽっちも映っていない。完全に意識の外だ。

キリコの呟きは続く。

「はあ、なるほど。この断面から察するに、高濃度のエーテルでダーシェンカのエーテルを余すところなく相殺し、殺すつもりだったのか。まったく、なんつー下衆な戦い方をさせやがるんだ。あの糞ったれめ」

「で……お前は本当に、誰なんだ？」

ダーシェンカはブツブツと呟き続けるキリコに怪訝な視線を向け、尋ねる。

「俺？ 俺は、現・キリコだよ。これだけで十分でしょ？ ダーシェンカ」

アルシェラの腕から視線を外したキリコは、クスリと微笑みながら答えた。

ダーシェンカもその答えに満足したのか「ああ」と短く漏らしただけで、少年への興味を失ったようだった。

「え？ あの……どういうこと？」

痛みが引いてきたらしいイズミは、状況が飲み込めず、キリコとダーシェンカの顔を交互に見る。

「それは後からダーシェンカにでも聞いてよ。まあ……後があつたら、の話なんだけどね。

とにかく、君のおかげでアルシェラを取り戻せたから、そのことには礼を言っておくよ。ありがとう、イズミくん。生きてたらまた会おうね」

少年は悪魔的な微笑で不吉なことをサラリと述べ、アルシェラを抱えたまま、人混み

の中へ消えていった。

片腕のもげた美女を抱えた少年が通っているというのに、通行人たちは気にも留めていない。

なんとも気味の悪い光景。

「な、何者なの？ あの人」

イズミはキリコが消えていった方向を見つめながら、ボンヤリと呟く。

「ただの変態だよ。細かいことはあとで教える。まあ、キリコが言ったように“後”があったら、だけどな」

ダーシェンカは鋭い視線を周囲に向けながら答えた。

まだ終わっていない。

周囲を見渡したダーシェンカはそれを痛感する。

通行人たちは相も変わらず、首のない死体が三つも転がっているという異常を気にも留めずに歩いている。それは、敵の魔術が解けていない証。

もっとも、アルシェラを倒したところで魔術が解けないことは、彼女自身の発言から分かっていたことなのだが。

それでも緊張が走る。アルシェラを倒した今、敵がどう動いてくるのか。

街中から離れた方が得策なのか、現状維持が得策なのか。正直なところ、判断に迷う。

住人の意識が支配下に置かれていない街まで移動する、というのも選択肢の一つは一つだが、あまり効果的とは思えない。結局はイタチごっこだ。

となるとやはり、迎え撃つしか手は残っていないだろう。

エーテル残量から察するに、魔術無効化の術式はそう長く発動できそうもないが、瞬発的に使う分には問題ないだろう。

もっとも、敵が先の戦闘を見ていて、術式の効果などを知ってしまったら、それもあまり効果はなさそうだが。そのときはそのときで身体能力を活かして倒すのみだ。「……ともかく、私もイズミに礼を言わなければだな。ありがとう。イズミだったんだな。ギリギリの所で私を引っ張ってくれたのは」

ダーシェンカは微笑みながら、座り込んでいるイズミに手を差しのべる。

「あ、いや、引っ張ったっていう実感はないんだけどね」

イズミは照れくさそうに微笑みながら、ダーシェンカの手を握り、立ちあがった。

5

「正直、私も引っ張られた実感はないんだが……言われてみればアルシェラにトドメの一撃を叩きこもうとしたあの瞬間に——」

「いやあ！ 実に面白いものを見せてもらったよ。いや、今も見せてもらってる、と言う

べきかな」

ダーシェンカの言葉を遮り、やけに芝居がかった声が響き渡る。

イズミとダーシェンカは同時に、まるで何かにハジかれたような勢いで声の上昇した方向に顔を向けた。

人混みを掻き分け、一人の男が、通行人が踏み込むことのない不可侵のテリトリーに入り込んでくる。

夏を過ごすにはあまりに無謀なロングコートを羽織り、目深に黒のハットを被った長身の男。

あまりにも奇怪な姿だというのに、通行人はやはり、気にも留めずに取り過ぎていく。「いやあ、まさかアルシェラが負けるとは。それも覚醒したネクロマンサーじゃなくて、リビングデッドなんか」

男は敵意剥き出しのダーシェンカの視線を気にする様子をおくびにも出さず、滔々と喋り続ける。

「予想より早いお出ましたな、下衆野郎」

ダーシェンカは男に鋭い視線を向けながら、足の甲からナイフを抜き取り、逆手に構える。

「うっ！」

「ど、どうしたイズミ、今のも足が痛んだのか？」

奇妙なうめき声をあげたイズミをダーシェンカが横目で見やる。

「だ、大丈夫だよ。今のはただ単に痛そうだなって思っただけだから」

イズミは照れくさそうに苦笑する。

その様にダーシェンカの頬も思わず緩んでしまう。アルシェラよりも強大な敵が目の前にいるというのに、信じられないくらいにリラックス出来ていた。

冷静に、目の前の敵と対峙出来ている。

そんな自分を認識したダーシェンカは心の中でイズミに感謝する。言葉で謝意を伝えるのは目の前の男を葬ってからで十分だ。

葬ってみせる。

万全とはいかない状況だが、人としての“生”を捨てたあの日から、どんな状況であれ敵を葬る覚悟はしてきたのだ。

(だから、やってみせる！)

ダーシェンカは瞳に強い意志を宿して、眼前の敵を見据えた。

「ふむ……この国ではこういうときは『その意気や、よし！』とか言うのだったかな？ まあ、どうでもいいことか」

男は肩をすくめながら呟くと、ハットを目深に被り直す。本当にそれで周りが見えるのか、と問いたくなるほどの被り方だ。

ダーシェンカは男の姿を観察しながらあれこれと推測を巡らせる。

季節に全く適していない格好は何を意味するのか。

一つは体中に魔術の媒体を収納しているという線。だが、それも当たっているとは考え難い。なんせ男は手すらも黒い革の手袋で覆っているのだから。

となると、素肌を隠す必要があると考えるのが妥当かもしれない。

そこまで推測はしてみるものの、情報が少なすぎる。街の住民の意識を操作している手管からして、遠・近問わず戦える一流の魔術師だろう。

間合いを計れないことは、痛い。下手に男の傍まで行ってしまえば、その隙についてイズミに危害が及んでしまうということもあり得る。

「しかし、アルシェラを退けたリビングデッドとなれば相当な名匠の作だな……名前は何と言うのだ？ リビングデッド」

男は攻撃を仕掛ける様子も、気負う様子も見せずに語り続ける。まるで、ダーシェンカなど脅威でも何でもないと言わんばかりに。

「クズに名乗る義理はない」

ダーシェンカは本当に吐き捨てるかのように言った。

男はダーシェンカのそんな態度を気に留めることもなく、楽しげに喉をクツクツ鳴らした。

「フッフ、そうか……クズか！ こりやまた愉快だな。リビングデッドごときにクズ呼ばわりされるとは。……まあいい。推測するのも一興だ」

男は顎をさすりながら何やら考え込むような仕草を取る。

仕草を取っているだけで、本当に考えているようにはとても思えなかった。

「まあ、だいたい見当は付いているんだがね……見目麗しいリビングデッドなんて酔狂なモノを作るのはキリコぐらいしかいないからね。ただ……何代目キリコかを当てるとなると多少は骨が折れるがね」

「そんなコト知ってどうするんだ？」

ダーシェンカは探りの言葉を投げかけてみる。

何か、少しでも、情報が欲しかった。

それだけの心積もりで投げかけた言葉だった。

だから、まさか男の口からそんな答えが出るとは思っていなかった。

「いやね、キリコの作品の中に因縁のある娘がいてね。まあ、大した因縁じゃないんだが……そう、娘の家名だけはハッキリと覚えているよ。十八世紀の魔術世界で名を馳せた名門、オルリック家」

男は穏やかに言葉を紡いだ。因縁などという言葉を使いながらも、そんなことは全く感じさせないほど穏やかに。

「オルリック家、だと？」

ダーシェンカは目を見開き、呆然と呟いた。

まさか男の口から自分の家名が出るとは思っていなかった。オルリック家はその名

を馳せた十八世紀ならいざ知らず、今は二十一世紀だ。

オルリック家がダーシェンカ“のみ”を残して滅び去ってから二百年以上過ぎている。現代に生きる魔術師は歴史の一部でしかオルリック家を知らないだろう。

だというのに、この男はオルリック家と因縁があると言った。

「ほう、オルリック家を知っているのか。……まさかとは思うが、貴様がオルリック家の娘じゃないだろうな？ ハハッ！ そんな訳はないよな、なんと言ってもあの娘は——」
「名門オルリック家に生まれながら魔術の素養が全くなかった」

ダーシェンカは感情の籠らない声音で呟いた。

イズミはそう呟いたダーシェンカの表情を見て背筋を凍らせた。

感情が無い。怒りも、悲しみも、喜びも。感情という感情が抜け落ちている、そんな表情だった。

「ほう、これはおもしろい。そのまさかだったとは！ 貴様が魔術師でもないのにリビングデッドになった“あの”出来損ないかっ！ 因果律の流れとはこうも愉快なものなのかっ！」

男は大層嬉しそうに諸手をあげて空を仰ぐ。

その瞬間に、イズミは信じられないものを垣間見たような気がした。

男の顔が、まるで、ミイラのように干からびていたのだ。

しかし男はあっという間に元の体勢に戻り、顔も隠れてしまった。だからイズミは、先ほどの光景を気のせいだと思うことにした。

「一応、聞いておこうか。貴様とオルリック家の因縁とやらを」

感情の抜け落ちた顔で、ダーシェンカは言葉を発する。

細々と喋るその声は、通行人たちの喧騒にかき消されてしまいそうなほど小さいというに、不思議と耳に強く響いた。

「なんてことはない。オルリック家の者達を贄にした魔術を発動させたんだが、術式構成を失敗してしまったのさ……キミという出来そこないがあの一族に居たことでね」

男は相も変わらず飄々と言葉を紡いだが、最後の部分はドス黒い感情がありありと籠っていた。

男の言葉を聞き終えたダーシェンカは両の目を鋭く吊り上げ、沸き上がる殺意を抑え込むために歯を食いしばった。

男が話した内容は半ば確信に近いほどに予期していたモノ。それでも信じられない。二百年前に自分の家族を皆殺しにした男と再び巡り合うことになろうとは。

「ヴェルナール、なのか……貴様は」

ダーシェンカは二度と口にすることはないだろうと思っていた名前を口にしました。

家族を失い、途方に暮れかけていたダーシェンカの前に現われた当時のキリコが教えてくれた仇の名前。

家族は魔術の使えないダーシェンカを魔術の知識について教えようとしなかったか

ら、その名前がどれほど強大なものなのか、当時のダーシェンカは分からなかった。だが、温かい場所を奪った、憎むべき相手だということだけはハッキリと分かった。本来ならば自分で仇を討ちたかったが、キリコがダーシェンカにその名を教えた時点でヴェルナールは討伐されていた。どだい、仇を討とうにもただの少女であったダーシェンカに出来ることはなかったのだが。

それでもダーシェンカは、やり場のない感情を処理するために強くなることを望んだ。体術を覚え、魔術の知識を片っ端から頭に叩き込んだ。

だが、まっとうな人間にはまっとうな限界しか待っていなかった。

並の魔術師にすら歯が立たない。

それがダーシェンカに突きつけられた現実だった。

それでもダーシェンカは上を——あるいは下を——目指した。

断り続けるキリコに頼み込み続け、やっと了承を得た。

まっとうな“生”を捨て、リビングデッドになることの。

ヴェルナールのように“ネクロマンサーの家系”を狙う者達を駆除する道具になることの。

そして、今に至る。

「いかにも。私はヴェルナール・ド・レーテ。禁忌の炎に身を焦がす哀れな魔術師だよ」
男——ヴェルナールは恭しく一礼すると、ゆっくりとハットを脱いだ。

「なっ!?!」

声をあげたのはイズミだけではなかった。ダーシェンカでさえも、声を抑えることができなかった。

ハットの下から現われたヴェウナールの素顔は、恐ろしいまでに醜悪なものだった。

顔は肉という肉が削げ落とした頭蓋骨そのもののような形を呈しており、皮膚は黒く変色し奇妙な光沢を発している。剥きだしになった二つの眼がせわしなく動き、時折イズミとダーシェンカを捉えている。

「醜いだろう？ これが二百年前に魔術に失敗し、不完全な不老不死を手に入れ、二百年間生き恥を晒し続けた男の姿だよ」

ヴェルナールは手にしていたハットを放り投げ、自嘲気味に肩をすくめた。

醜い外見と紳士的な声が、ヴェルナールに対する印象を酷くチグハグに植え付けてくる。

「私の言ってること分かるよね？ 不完全な不老不死なんて、つまるところは長寿に過ぎない。そして私はそろそろ寿命のようなのだよ。動くのも辛くてね」

言葉を失っているイズミとダーシェンカをよそに、ヴェルナールは続けた。口元がヒクヒクと動いているのは、ひょっとすると微笑なのかも知れない。

「だからね……今度は失敗するわけにはいかないのだよ」

ギョロリとヴェルナールの眼がイズミを捉える。

イズミはその視線に気圧され、思わずあとずさってしまった。

だがダーシェンカはたじろがない。それどころか、前に歩み出してみせる。

「……そんなことはさせない。二百年前、私が原因で失敗したというなら、今度も私がお前を叩き潰す！」

ダーシェンカはアルシェラとの一戦でところどころ金属が剥き出しになっているナイフの柄を強く握りしめ、地面を蹴った。

「浅はかだな、オルリックの亡霊よ」

ヴェルナールはさして慌てる様子も見せず、瞬時にポケットから何かを取り出した。

夏の陽光に輝くそれは、何も知らないイズミの目には、さして珍しくもないビー玉のように見えた。

事実、ビー玉と大した差はない。材質が安物のガラスか、磨き抜かれた水晶か、ただそれだけの差なのだから。

だが、たったそれだけの差も、持つ者によっては大きな差が現れる。磨き抜かれた水晶はエーテルの伝導率が非常に高い。それを一流の魔術師が振るうとなれば、ただのビー玉も十分すぎる殺傷能力を持つ。

「格の差を思い知れ」

ヴェルナールはそれだけ眩き、たった一つのビー玉をダーシェンカに向かって投げた。まるでダーツでもするかのように、たいした動作をすることもなく。

「なめるなっ！」

ダーシェンカはビー玉の軌道を読み切り、軽々とかわし、ヴェルナールの間合いに入り込んだ。

左足を軸に、フックを繰り出す要領で、ヴェルナールの喉元にナイフを走らせる。

「だから浅はかなのだよ、オルリック」

ヴェルナールは剥き出しの目玉をダーシェンカに向け、嘆息を漏らした。

「なっ!？」

ダーシェンカが思わず目を見張る。

ヴェルナールは“素手”でダーシェンカの攻撃を受け止めていた。リビングデッド以外には受け止められないような攻撃を、いとも容易く。

ダーシェンカは身を引くことも忘れ、呆然とした。

「ダーシェンカっ！」

受け止められた腕を見つめているダーシェンカの意識を、イズミの声が引き戻す。

「か、肩に喰らってるよ！」

イズミがかすかに震える声で述べたことを聞いたダーシェンカは、それだけで自分の身に起きたことを理解した。

「そういうことだ」

ヴェルナールは満足げに述べ、あまつさえ掴んでいたダーシェンカの腕を放した。ま

るで暴力を振るおうとした子供を諷めたあのような穏やかな動作で。

ダーシェンカはそのことに怒りを覚えるよりも先に、飛び退き、ヴェルナールから距離をとった。

飛び退くときに、握っていたナイフを落としてしまった。

(正確には、握っていられなくなったというべきか)

ダーシェンカは垂れ下った自分の右腕を見つめながら、胸中で自嘲気味に呟いた。自分がやったことと同じことをやられた。結局はそんな単純なことだった。

避けたと思った水晶玉は、魔術によって軌道を変え、背後からダーシェンカの肩口を射抜いた。

本来その程度で、ダーシェンカの肉体は傷を負わないのだが、水晶玉に魔術無効化が施されていたとなれば話は別だ。

ダーシェンカの肉体強化を無視し、組織を軽々と破壊できる。

奇しくも、ダーシェンカがアルシェラに行ったときと同じように。

「痛覚がないというのは利点ばかりじゃない、ということは理解して頂けたかな？ いいや、そんなことよりもキミは私の二つ名をお忘れかな？ 魔鏡のヴェルナールという、今一つ頂けない二つ名を、ね」

ヴェルナールは肩をすくめ、かぶりを振った。

魔鏡のヴェルナール。

その二つ名をダーシェンカが忘れられるはずがなかった。死んだと聞かされた相手とはいえ、ダーシェンカはその存在について余すところなく調べ抜いたのだから。

資料曰く、ヴェルナールは一度見た魔術を瞬時に解明し、鏡映しのように己が物とする。

それは、他の魔術師は誰一人として為せないヴェルナール唯一の技術だった。

魔術とは、師から弟子、親から子などによって伝承されていくものだ。ある程度系統化も為されているから、似通った系統なら術式を真似ることもできる。

だがそれは、ある程度の研鑽を経て為せるものだ。瞬時に為せるものではない。たとえ、

術式の効果や組み方を解明できたとしても、自分でその術式を成す為には、思考錯誤を重ねなければならない。

自分のエーテルの総残量把握、エーテルの伝達・圧縮率の補正。そのような機械的な計算を経た上で、少しのミスも許されない、それでありながら感覚のみで行わなければならない術式の発動に挑戦する訳だ。

そんなことをヴェルナールは瞬時に為すというのだ。魔術系統の垣根すら飛び越えて。

ダーシェンカは魔術を学べば学ぶほど、魔鏡のヴェルナールの二つ名は眉つばモノと思うようになっていた。

実際に見せつけられた、このときまでは。

「さすが魔術の素養のない者にでも扱えるだけあって、実に容易い術式だった。なんてことはない。要は一次元の魔術を突き詰めただけだ」

ヴェルナールは肉の削げ落ちた頬をさすりながら、退屈そうに吐き捨てる。

その言葉に、ダーシェンカは憎々しげに顔を歪め、ヴェルナールを睨みつける。

事実ダーシェンカの術式は、魔術の素養がないダーシェンカのため、当時のキリコが作りあげたモノだった。

四次元まで存在する魔術の中で初歩の初歩に位置する一次元の魔術。

エーテルの流れを利用し、物体にベクトルを生み出す“だけ”の魔術。魔術師を志す者が最初に通る道で、最も早く収め終える道。

結局のところ、一次元の魔術は物体を動かす程度にしか役に立たないのだ。

先ほどヴェルナールがおこなった、僅かな動作でビー玉を素早く投げたたり、途中で軌道を変えたのも一次元の魔術だ。

だが、その程度のこと、ダーシェンカが生きていた一八世紀末においてすら、役に立たないモノと化していた。強い力が欲しければ重火器を頼った方がよっぽど便利で代償も少ないのだから。

それをどうにか対魔術師用の戦闘でも役に立つように工夫したのがダーシェンカの術式だった。

魔術の素養がないダーシェンカでも扱える、エーテルを高速で走らせるだけの魔術。たったそれだけの魔術でありながら、ダーシェンカ以外に扱うものはいなかった。

扱う価値のない、ただそれだけの魔術だったから。

いかなる魔術をも無効化するという素晴らしい効果を持ちながらも、その代償は魔術師にとってはあまりにも致命的かつ不合理だった。

魔術無効化以外の魔術が使えなくなるという、代償。

エーテル体を高速で走らせるためには、その為だけに肉体をチューンしなければならなかったのだ。

もともと魔術を使えなかったダーシェンカにとってはどうということのない代償でも、普通の魔術師にとっては自分自身を根本から否定することとなんら変わらないことだった。

そんな、術式自体は単純でも、扱い得ない魔術を、ヴェルナールはいとも容易く披露して見せたのだ。

ダーシェンカが衝撃を受けない筈がない。

術式を見抜かれた衝撃は全くない。エーテルを見ることが出来る魔術師なら簡単に看破し得るのだから。実際、アルシェラにも看破されている。

だが、その術式を使われるとなれば話は別だ。ましてや、磨きあげた己が魔術に人生を掛けているような魔術師という人種に使われたとなれば。

「おや、大層驚いているようだな。よもや、こう思っているのではあるまいな。どうして魔術師がこの術式を扱えるのだ、と」

押し黙っているダーシェンカに気付いたヴェルナールは、口元を歪に吊りあげる。そして続けた。

「ふむ……なるほど確かに、一流の魔術師ですら出来ない術式ではある。だが、私にはさしたる問題ではない。ようは自分の肉体以外を媒体として、エーテルを高速回転させ続けられればいいだけの話だ」

ヴェルナールはごく当然のように語る。

「そんな、ことが……」

出来る筈がない、その言葉をダーシェンカはグッと飲み込む。現に、見せつけられてしまったのだから。

ヴェルナールが言った内容は、当時のキリコが何度も試し、失敗し、諦めた術式だった。

魔術とは、エーテルを媒体の中で循環させるということ。

その原理からすれば、魔術無効化の術式を、ヴェルナールが為したことはなんら驚くことではない。

だが、格が違う。

普通の魔術ならば、ある一定の公式の元に組み上げれば発動してくれる。それがどんなに複雑な公式であれ、魔術師の技術さえ卓越していればなんの問題もない。

だが、魔術無効化の術式はそうはいかない。

エーテルを高速で循環させ続けるだけでなく、状況に応じて速度を補正しなければ効果をなしてくれない。

だから、思考を持たないただの媒体では発動しえない。

もし仮に、発動させるには、媒体に一流の魔術師並の思考速度を兼ね備えさせなければならぬ。

そんなコトは不可能だ。

しかし、ダーシェンカには一つだけ思い当たる節があった。

それは、当時のキリコも着目し、研究したモノ。結局は失敗に終わったのだが。

「まさか……三次元の魔術を応用して……」

三次元の魔術——言ってしまうえば魔術に意志を宿らせること。

意志とは言ってもお粗末なモノで、所詮はプログラムに過ぎない。

山中でイズミに襲いかかった家族に掛けられていた魔術も三次元の部類に入る。おそらく、この街の人間の意識操作も三次元の魔術だろう。

ようは、一定の思考パターンをプログラミングするということ。

だが、三次元の魔術の究極は、五歳児と並ぶ程度の思考を植え付けるのがせいぜい。それも長い時間を掛けて、という条件付きでだ。

一流の魔術師に比肩する思考パターンを瞬時に植え付けるなど、到底不可能だ。「三次元の魔術？ ハハハハハ！ 思いあがるなよ、オルリック。三次元はおろか、私は貴様に対して二次元の魔術すら使う気が起こらない。一次元の魔術のみで十分事足りる」

ヴェルナールはダーシェンカを高らかな嘲笑で切り捨てた。「教えてやろう、オルリック。要は魔術的道パスを利用したに過ぎないのだよ。パスを通じて私の思考を伝達すれば媒体に意志を形成する必要などないからな」

ヴェルナールの言葉にダーシェンカは歯噛みする。

ヴェルナールがさも当たり前のように言っていることは、魔術師にとって信じられないことである。いや、普通の人間にも通ずるところで信じられない。

ヴェルナールが言ったこととは要するに、媒体と肉体の両方で、並行して高度な思考を行うということである。交互に思考するのですら困難なのに、完全並行で思考するなど人間には不可能だ。

それこそ、二人分の思考回路が必要になる。それも、ズバ抜けて優れた二人分の、だ。

そんなヴェルナールの圧倒的としか言えない力量を見せつけられてもなお、ダーシェンカは臆さなかった。

「だから、どうした？」

ダーシェンカは不敵に微笑みながら身構える。

肩の傷口から血を滴らせている使い物にならない右腕をヴェルナールに向け、左手を眼前に掲げ、サウスポーのスタイルを取る。

もともと、魔術云々の話ではないのだ。

ダーシェンカというリビングデッドは卓越した体術が武器。いかに魔術の技術で圧倒されようが、関係ない。

(力で、ねじ伏せる……！)

ダーシェンカは心の中で叫ぶと同時に地面を蹴った。

「ふん。馬鹿の一つ覚えが」

ヴェルナールは飛びかかってくるダーシェンカに蔑むように一瞥をくれ、先ほどと同じようにビー玉大の水晶を放り投げた。

水晶は先ほどと同じようにダーシェンカに襲いかかる。

だがダーシェンカは避けなかった。瞬発的にエーテルを走らせ、魔術無効化を相殺し、水晶を砕く。

水晶を軽々と砕いたダーシェンカはヴェルナールの間近に踏み込み、体を振じる。

ヴェルナールを葬り去る、その一撃を生み出すために。

「ああ……本当につまらない」

ヴェルナールは間近に迫っているダーシェンカを気に留める様子もなく天を仰ぐ。

「死ぬには、いい日和だな。オルリック」
ヴェルナールは空を見上げたまま呟いた。

ダーシェンカの拳はヴェルナールに届かなかった。

それどころか、ダーシェンカの背中が真っ赤に染まっていた。
ダーシェンカがヴェルナールに拳を突き刺そうとしたその瞬間、地面から数十個の水晶が飛びあがり、ダーシェンカに襲いかかったのだ。
それはあらかじめ、ヴェルナールが仕掛けていたモノ。何気なく放り投げたハットの中に。

ダーシェンカは警戒を怠っていなかった。砕け散った水晶の破片や、最初に体を射抜いた水晶の位置だって確認していた。ヴェルナール自身に対する警戒は言わずもがなだ。

ハットにだって警戒を払っていた。

だが、ものの見事に回避不可能の領域まで誘い込まれてしまった。

「ぐ……かはっ！」

ダーシェンカは憎々しげにヴェルナールを見つめながら、咳き込む。咳には真っ赤な血が混じっていた。

「ダーシェンカ！」

咳き込むダーシェンカにイズミが駆け寄る。

「く、来るな」

ダーシェンカはそれを途中で押しとどめた。その声は余りに弱々しく、聞くに堪えないほどのもの。

「に、逃げろ。わ、たしが引きとめるから」

ダーシェンカはイズミに向かって弱々しく微笑みかけた。

その笑顔はイズミを安心させるためのものではなく、自分への嘲笑だった。

出会ったころのイズミならいざ知らず、今のイズミがこの言葉を信じる筈がない。

何せ、ダーシェンカの両腕は力なく垂れ下がり、足も立っているのがやっとなほど激しく震えているのだから。

「で、でも……」

案の定イズミは不安げな視線をダーシェンカに投げかけてくる。

「嘘はよくないな、オルリック」

空を見上げ続けていたヴェルナールが視線をダーシェンカに戻して呟く。その口元には、

これ以上ないというほどに歪な微笑みが称えられていた。

ヴェルナールはダーシェンカを見下ろし、溜息を一つ吐く。

そしてつまらなそうに、ダーシェンカの足を払った。

「ぐっ！」

うめき声を上げながらダーシェンカが地面に倒れ込む。

「ダーシェンカっ！」

今度こそイズミは迷わなかった。

地面を力強く蹴って、倒れたダーシェンカの元に駆け寄る。

そして、悠然とヴェルナールの前に立ちはだかった。否、悠然ではない。ヴェルナールに向けている表情は陰しいものだったが、足はガタガタと震えていた。

「イ、イズミ？」

ダーシェンカはイズミの行動を咎めるよりも先に、呆然と呟く。

「キミは、何をしているのかね？」

ヴェルナールは、ダーシェンカよりも何倍も呆然とした口調で呟いた。本当に信じられないものを目の前にしている、と言わんばかりに。

「じ、自殺行為です」

イズミは上ずる声で述べた。

イズミは別に、ヴェルナールの圧倒的な魔術的能力に対する恐怖は抱いていない。目の前で魔術の高等技術を披露されようが、イズミにはほとんど理解できないのだから。

まず、そのミイラじみたヴェルナールの容姿が怖かった。

そして何より、人を簡単に傷付けられる精神が怖かった。

それでもイズミは恐怖を押し殺して、ヴェルナールの前に立ちはだかる。

「自殺行為？ 何がだね？ 何か君たちには隠し玉がまだ、」

「ぼ、僕の今現在取っている行動が、です」

イズミはヴェルナールの言葉を遮り、言った。

ヴェルナールはその言葉に、口をポカんと開けて呆けた。

「ハ、ハハハハハハハハ！ なんだ！ そういうことか！ 君は私の質問に答えただけなのか！」

ヴェルナールはイズミの言葉の意味を理解すると腹を抱えながら笑い始める。

怪訝な表情を向けるイズミとダーシェンカを気に留めることもなくヴェルナールはひとしきり笑った。

「キミは面白いな！ 立場が立場でなければ良き友人になれただろうに……残念だっ！」

ヴェルナールは心の底から残念そうに言うと、迷いのない蹴りをイズミに叩き込んだ。

イズミの体は三メートルほど飛ばされ、地面に叩きつけられる。それでも勢いは収まらず、何回か転がるハメになった。

「イズミっ！」

ダーシェンカはなんとか体を起こし、立ちあがろうとするが、ヴェルナールが軽々と蹴り伏せる。

「本来ならばキミの行動に敬意を表し、キミから処分するのだが……オルリックの出来損ないには大きな借りがあるのでね」

ヴェルナールは地面にうずくまっているイズミに向かい、恭しく言った。

「させ、ない」

イズミは地面にうずくまったまま呻くように呟く。

それを聞いたヴェルナールは少なからず驚きを感じた。

イズミに対して、気を失ってもおかしくないはずの打撃を加えたはずなのだ。訓練された者ならいざ知らず、平凡な日々を送る少年がああ蹴りで気絶しないはずがない。

それだけでも驚きを感じたというのに、ヴェルナールはさらに驚くことになった。

イズミがゆっくりと立ち上がったのだ。ばかりか、その手には少年の華奢な体には不釣り合いとしか思えない無骨なナイフが握られている。

それはダーシェンカが取り落とした、サバイバルナイフ。

「なるほど。蹴られたのはワザと、と言うわけか。ならば立ち上がってもなんら不思議はない」

「ええ。飛ばされるのがナイフの方向でなかったら、避けていましたよ。あなたの蹴りなんかより、ダーシェンカの蹴りの方が数倍速いのでね」

イズミは沸き上がる恐怖を押し殺し、先ほどまでの気弱な態度が演技だったと見せかけるため、出来るだけ不遜に聞こえるように言葉を紡いだ。

脚はかすかに震えているし、気を抜いたらナイフを握っている手も震えだしそうなのだが、必死に抑え付ける。

イズミの目で見る限り、ヴェルナールはプライドの高い男だ。

ダーシェンカに対する態度は元より、その戦闘方法もあえて相手のステージに立ち、相手の得意分野で圧倒することにこだわっていた。

ならば、真人間のイズミにコケにされては黙ってられないだろう。

そこから先、ヴェルナールが魔術を使うか否かは全くの賭けなのだが。

「……ふむ。どうやら私はキミを見くびっていたようだな。私の想像よりもはるかに面白い」

ヴェルナールはダーシェンカから視線を外し、イズミに向き直る。

イズミはヴェルナールをしっかりと見据え、固い唾をのみ込んだ。

なんとなくではあるが、分かった。イズミがヴェルナールという男に恐怖していたのは、異質な外見などではなく、身にまとっている雰囲気だったのだ。周囲とは決して相いれない、静かで穏やかだが、狂気に満ち満ちた雰囲気。

「キミは術式に必要な贄だから今は殺さんが……いま邪魔なのもまた事実。良かろう。キミの愚かしさに敬意を表し、お相手しよう」

ヴェルナールは極めて紳士的に言った。

だが、今のイズミには見えていた。

不気味に膨れ上がる、ヴェルナールの純黒のエーテルが。

それでも不思議と恐怖は増幅しなかった。自分でも信じられないほどに、落ち着いていた。ある程度の恐怖はあっても、それとは全く違う場所に、冷静なもう一人の自分がいるような感覚があった。

ヴェルナールは飛びかかってくるでもなく、一步一步ゆっくりとイズミとの距離を詰めてくる。ジワジワと、プレッシャーをかけるように。

「なに、魔術は使わんさ。少なくとも今の君にはね」

ヴェルナールは口元に愉悦を浮かべ、拳を構えた。

イズミもそれに習い、構える。

とりあえず、魔術を使われなかったのは僥倖だ。だが、イズミは避ける術は心得ていても、倒す術は心得ていない。いや、ヴェルナールを倒せるなんてこれっぽちも思っていなかった。

もし仮に、体術でヴェルナールに勝ち得たとしても、その危機的局面にヴェルナールが魔術を使わないはずがない。

もともとイズミ“には”勝ち目などないのだ。ヴェルナールの注意を引きつけ、なんとか隙を作り、そこをダーシェンカについて貰う以外に勝機はない。

それを理解しているからこそ、ダーシェンカも押し黙ってイズミとヴェルナールの戦いを見つめているのだ。

最初に仕掛けたのはヴェルナールだった。

鋭い拳打がイズミの顔面めがけて襲いかかる。

イズミはそれを軽々と避け、ナイフを横薙ぎに払う。それも結局はヴェルナールの軽いバックステップでかわされてしまうのだが、気にしない。

イズミは地面を蹴り、ヴェルナールに迫る。回避一辺倒では隙は生まれない。だから攻めた。攻撃の術は習っていないが、ダーシェンカの動きを嫌というほど見せられたからか、

ある程度様にはなっていた。

イズミの拳打では当たったとしても致命傷にはなり得ないので、ナイフでの斬撃を中心に繰り出していく。

どれもヴェルナールに巧妙に捌かれてしまうが、イズミもヴェルナールの攻撃を捌いているので、攻防は一進一退だった。

(また、だ)

イズミはヴェルナールの蹴りをバックステップでかわしながら胸中で呟いた。

また、青い靄が視界に掛りはじめたのだ。キリコの説明によって、青い靄がエーテルであるということは直感的に理解した。基本的にはヴェルナールやダーシェンカが発

しているものとなんら変わらないのだ。自分の眼が空気中に漂うエーテルを捉えている、ただそれだけのこと。

それだけの、ハズだった。

「グハッ！」

イズミはヴェルナールのボディブローをもの見事に喰らった。

あまりの衝撃に膝を折り、地面に倒れ込む。

「どうした？ 少年。今のもわざと喰らったのか？ 回避する様子がまるでなかったぞ？」

ヴェルナールの傲慢な声が、イズミの耳に届いた。

姿は見えない。

イズミは再び暗闇の中にいた。茫洋と広がる、心に不安しか生み出さない暗闇。どこかから、ダーシェンカの叫ぶ声が聞こえる。が、何と言っているのかはよく聞き取れなかった。

「もう終わりなのか？ ツマランな、少年」

不思議とヴェルナールの声はよく聞こえた。

ヴェルナールの声が響き、脇腹に激痛が走った。おそらく、蹴られたのだ。

イズミにとってその激痛はむしろありがたかった。ぼんやりとしていた体の輪郭がはっきりと感ぜられるようになった。

イズミはなんとか立ち上がる。体中から悲鳴が上がるが、気に留めない。その悲鳴はむしろ、体の輪郭をより一層はっきりさせてくれる感謝の対象だった。

「終わらないよ、ヴェルナール。終わるのは、お前だ」

イズミは見えないはずのヴェルナールを、はっきりと見据え、断言した。

イズミの目に、相変わらずヴェルナールは映っていない。だがハッキリとどこにいるのか分かった。何をしようとしているのかさえ、予想できた。

何故か。そんなことはイズミにも分からなかった。

ただ、ありありと見えているのだ。ヴェルナールの姿などではなく、その本質たるエーテルが。身にまとったエーテルなどではなく、その体に流れるエーテルが。

何も見えない暗闇の世界だが、自分の位置はしっかり掴める。ダーシェンカやヴェルナールの位置だってハッキリと理解できた。通行人たちの動きはいまいち判別がつかないが、

おおまかには掴んでいる。死角であるはずの真後ろまで。

イズミは体に走る激痛など気にも留めず、地面を力強く蹴った。

ヴェルナールの迎撃を警戒することなく、懐に潜り込む。

(ここで打ち下ろしの右が来る)

イズミは胸中に呟きながら、口元を我知らず緩めた。

イズミが胸中に呟いた通り、ヴェルナールは持ち前の長身を活かした打ち下ろしを

繰り返していたのだ。

すかさずイズミは必殺のカウンターを放つ。拳などと言う生易しいものではなく、ナイフによる斬撃で。

「な、に!？」

ヴェルナールは上げたこともないような素っ頓狂な声をあげ、辛うじてイズミの攻撃をかわした。

かわしたとは言っても致命傷は避けられたというだけで、傷は負ってしまっている。ヴェルナールの右頬はパツクリと裂け、ミイラじみた皮膚には似つかわしくない鮮血がしたたっていた。

平時のイズミがそんな光景を見たら卒倒しかねないが、このときは問題なかった。

何せ、

滴る血もエーテルの光としてしか捉えていなかったし、何よりも精神が異常に昂っていた。

自分が自分でないと思えるほどに。

6

「っ！」

アルシェラを抱え、雑踏を歩いていたキリコは雷鳴の如く突然走った頭の痛みにならずくまった。

意識を保つのも厳しいほどの痛みを受けながらも、キリコは何故か薄ら笑いを浮かべていた。

「俺の抑えがもう効かなくなったのか……さてはて、鬼が出るか蛇が出るか。あーあ、アルシェラがこんなにされなきゃナマで見れたのに」

キリコは自分の腕の中で息絶えている片腕の美女を見やり、心底残念そうに呟いた。

そして何事もなかったように立ち上がり、鼻歌混じりに歩き出す。

そんな奇妙な光景だというのに、誰ひとりとして目を留めない。

必然、キリコの鼻歌の内容に気付くものはいなかった。

キリコの口ずさんでいたそれは、鎮魂歌。

その歌が誰に向けられたものなのかは、キリコ自身にも分からなかった。

7

「……油断した、つもりはないのだがね」

ヴェルナールは頬を伝う血を拭いながら呟く。

「正直者で結構なことだな、ヴェルナール」

イズミは感情の籠らない瞳をヴェルナールに向ける。

イズミはもはや人を見ているという感覚をなくしかけていた。エーテルの光だけを見ていると、あたかも自分がコンピューターのプログラミング言語だけを見ているような気さえしてくる。

そう思えるほどに、エーテルの本質は正確な情報をイズミに与えてくれていた。「“覚醒”していないキミに魔術を使うのはいささか不本意なのだが……この傷の礼だ。受け取りたまえっ！」

ヴェルナールは右腕を振り上げながら叫ぶ。

ヴェルナールが声を上げると同時に、無数の水晶玉が地面から浮かび上がり、イズミに襲いかかった。

イズミは眼を細め、襲いかかる水晶玉の群れを見据えた。

状況を把握する。導き出される結果は、絶対不可避という絶望的なモノ。頼みのダーシェンカも体の機能が回復せず、身動きが取れない。

だというのに、イズミは微笑みを浮かべていた。

「つまらないな、ヴェルナール」

イズミはそう吐き捨て、ナイフを軽く一振りした。

子供が小枝を振るうような、何気ない、そんな一振り。

だが、そんな一振りで、イズミは全ての水晶玉を払い落して見せた。イズミの振ったナイフは、ただの一度たりとも水晶玉に触れなかったというのに。

「なっ!? ……なるほど。すでに“覚醒”していたという訳か。キミのエーテル量に変化が無いから気付かなんだ。ハハッ！ 眼を凝らせば見えるぞ！ まさか空気中に漂ってるエーテルが“全て”キミのものとはな！」

ヴェルナールは諸手を広げ、歓喜するかのように叫んだ。

「何を、言っているんだ？」

イズミはヴェルナールの言動が理解できず、呆然と呟いた。

本来ならばこの機に追撃しない手はないのだが、イズミはそう出来ずにいた。ヴェルナールが奇妙な言動を発した瞬間に、ヴェルナールのエーテルが一気に膨れ上がったのだ。体積が増した、というよりは密度がこれまでの比ではなくなっていた。目を背けたくなるほどの重厚感がそこにはあった。

「イズミっ！ 今のキミは際限なく魔術を使える状態なんだ！ 水晶をエーテルで払いのけたのがそうだ！」

必死に体を起こし、ダーシェンカがイズミに告げる。

普段のイズミなら何を言われているのか半分も理解できなかつたらうが、この時ばかりは違った。

すべてを理解できたわけではないが、重要なことはしっかりと理解した。

ようは、魔術という攻撃手段が増えたということだ。

水晶を払い落したときの感覚は残っているから、もう一度やってやれないことはないだろう。

「ほう、覚醒について知らなかったのか。オルリックめ、余計なことを教えおって……まあ、いい。どうせならば私からも説明してあげよう」

ヴェルナールはゴミでも見るかのような一瞥をダーシェンカにくれ、視線をイズミに戻した。

エーテルを見ているイズミには窺い知れなかったが、その表情は愉悦に浸っている気味の悪いものだった。

「人には魔術師か否か関係なしに、大なり小なりのエーテル貯蔵庫が一つある。だが、ネクロマンサーにはそれとは別にもう一つの機関がある。ネクロマンサーの覚醒とはね、エーテルを無限に生み出す機関が起動することをいうんだよ。これを我々は永久機関と呼んでいる」

「際限なく魔術を使えるってのはそういうことか……」

「ああ、その通り。まあ、厳密には魔術らしい魔術などネクロマンサーには使えないんだが、そんなことはどうでもいい。君にとって朗報なことを言うと、だ。覚醒したネクロマンサーに勝てる魔術師は、いない」

ヴェルナールは、自身にとって絶望的なことを快活に言い切る。

「いない、って割にはえらく楽しそうじゃないか」

イズミは頬を伝う冷たい汗を自覚しながら呟いた。

ヴェルナールが言っていることが本当なら、ここは攻めに攻めた方が得策だろう。エーテルの残量を気にしなければならない者と、気にせずとも良い者とでは後者が圧倒的に有利だ。少なくとも手数の上では。

だが、質という問題も絡んでくる。それに何より、ヴェルナールの態度がイズミの警戒心を掻き立てた。

ヴェルナールが嘘を付いていないと感じるからこそ、迂闊に仕掛けられなかった。

「ああ、魔術師では勝てないだろうな。だが、私は違う。私も二百年前の儀式で手に入れているからね……永久機関を！」

ヴェルナールは手をイズミに向かって振りかざしながら叫ぶ。

同時に、ヴェルナールのエーテルが膨れ上がった。その圧倒的な密度を保ったまま。「覚醒したネクロマンサーを贄にするのは二度目だが、覚醒したネクロマンサーと闘うのは初めてだ。血沸く、というのはこういうことをいうのだろうな！ 少年っ！」

ヴェルナールは一つの水晶玉を取り出し、イズミに向かって放り投げる。否、放り投げるという表現は適切ではない。

それはもはや、射出。

水晶玉は目視するのが厳しいほどの速度でイズミに襲いかかる。イズミの気のせいでなければ、その水晶玉には電撃が走っていた。

「ちっ！」

イズミは再びナイフを振るい、水晶を払い落とす。しかし、たった一つの水晶を払い落とすだけというのに、先ほどよりも大きな動きを要した。

イズミはその理由を瞬時に察する。

水晶玉を払い落とすという動作は、エーテルで壁を作って払い落とすといった類のものではなかった。

先ほどは何気なく払い落せたので気が付かなかったが、ようは一つ一つの水晶玉に、ヴェルナールが込めた以上のエーテルを込めて、軌道を変えるという動作なのだ。

イズミが無気なく行っているこの動作が、魔術師にとっては高等技術だといったことは今のイズミには全く重要なことではなく、今は何よりも、ヴェルナールが本領を発揮し始めたということの方が重要だった。

それは、イズミが払い落した水晶玉が如実に物語っている。最初に払い落した水晶玉が地面に転がっているだけというのに対し、二度目の水晶玉は地面にクレーターを作り出している。そしてやはり、イズミの気のせいでもなんでもなく、その水晶玉には電撃が走っていた。

「これがお前の本気ってわけか？ ヴェルナール」

バチバチと音を立てている水晶玉を横目で見ながら、イズミは尋ねる。

「本気？ 軽い挨拶だよ。気に入ってもらえたかな？ 媒体に属性を付加する二次元の魔術は」

ヴェルナールはニヤリと笑い、肩をすくめ、続けた。

「二次元の魔術は攻撃に最も特化している。そして私はこの二次元の魔術が最も得意でね……いくらでも射出出来るのさ、こんな風にね！」

ヴェルナールの叫び声とともに、無数の水晶玉が浮かび上がる。

イズミはエーテルしか見えない世界でその様を見、言葉を失った。

エーテルの本質を視ていたイズミには予期出来てしまったのだ。無数の水晶玉の群れが向う先が。

「ダーシェンカっ！」

イズミは叫び、地面を蹴った。

イズミからダーシェンカまでの距離は僅かに五メートルほど。

たった、たったそれだけの距離を転がるように駆けた。

イズミは走りながら、宙に浮かんだ水晶玉にエーテルを込め軌道の修正を試みた。だが無理だった。自分の間近にあるものでなければ、いまいちうまくエーテルの上書きが出来なかった。

しかし、無駄ではなかった。辛うじて水晶玉の速度を落とすことだけには成功した。

「くっ！」

イズミはダーシェンカに襲いかかる水晶玉の前になんとか立ち塞がり、水晶玉の群

れにエーテルを込め、軌道を書き変えた。

だが、響き渡ったのはダーシェンカの悲痛な叫びだった。

「イ、イズミっ！」

「や、やっぱり、傷付くって、い、痛いね。ダーシェンカ」

肩口と腹部に血を滲ませたイズミは、ダーシェンカに向かって微笑むと、そのまま目を閉じて地面に倒れ込んだ。

結局、イズミは全ての水晶玉の軌道を書き換えきれなかった。たった二つの水晶玉の軌道修正が間に合わず、その身に傷を負ってしまった。

その傷は無情にも少年の意識を刈り取ってしまう。ピンと張り詰めていた集中の糸が切れてしまったのだ。

「よもや、と思って試してみたがこうも見事に掛るとは。愚かしいな、少年。使い物にならない武器のために身を挺すなど、愚の骨頂」

ヴェルナールはつまらなそうに吐き捨て、倒れ伏したイズミに歩み寄る。

「近づくな！ 来たら、殺す！」

ダーシェンカはイズミが握っていたナイフを手に取り、ヴェルナールに向けた。

だが、立ちあがることもかなわず、辛うじて上半身を起き上がらせているダーシェンカなど、ヴェルナールにとっては意識する必要などないものに他ならなかった。

「殺す？ よくそんなことが言えるな。本来なら貴様を殺してから少年を贄にした儀式を行うつもりだったのだが、気が変わった。貴様の目の前でこの少年を贄にした方が面白いものが見れそうだ」

ヴェルナールは口元を歪に吊りあげ、イズミの体にエーテルを込めた。

イズミの体が浮かび上がり、ヴェルナールの元に手繰り寄せられるように近づいていく。

「イズミっ！」

ダーシェンカは懸命にイズミの体を掴もうとするが——届かない。

8

イズミの体はヴェルナールの間近まで引き寄せられ、足もとに横たえられた。

「さて、術式に取り掛か——」

「ネクロマンサー如月イズミの絶命を確認。これより、アクロマ機関“審判者”如月幸也が、禁忌を犯せし者、魔術師ヴェルナールへの審判を開始する」

ヴェルナールの言葉を遮り、雑踏から声が上がった。

抑揚のない、それでいて街の雑音に掻き消されることのない、よく通る男の声。

「誰だっ！」

ヴェルナールは声の上った方向に弾かれたように視線を向けた。

「きちんと名乗ったはずだ。アクロマ機関“審判者”如月幸也、と」

人混みの中から現われたのは、ベージュのスーツをまとった四十代半ばと見える紳士。

すなわち、イズミの父・如月幸也、その人だった。

「な、アクロマ機関だと？」

呆然と呟いたのはダーシェンカだった。

蘇生した時に一度会っただけのイズミの父だったが、ダーシェンカはその姿を記憶していた。どこか軽い雰囲気、の漂う人間として。

だというのに、目の前に現われた男は、雰囲気がまるで違う。

重々しい、見る者を圧迫する雰囲気をまとっている。

だがそれよりも気になったのは、幸也が口にした「絶命」という単語。

ヴェルナールがこれから贄にする人間を誤って殺すとは考えられなかったが、それでもその言葉は重くのしかかった。

イズミには「ネクロマンサーが死んだらリビングデッドも死ぬ」とは説明したが、エーテルさえ残っていればリビングデッドはネクロマンサーが死んでも、多少なりとも活動ができる。

かつては利点として捉えていたそのシステムも、イズミの生死がハッキリと確認できないため、今のダーシェンカにとってはもどかしいものに他ならなかった。

他のネクロマンサーならばいざ知らず、イズミが死んで自分が永らえるなど、ダーシェンカには耐えられないことだった。

ダーシェンカはそのことを思いやり、顔を歪める。

「安心して。イズミは生きてるわ。ただ“形式上”死んだことにした方がいい、ってだけだから」

不意に後ろから声が上がリ、ダーシェンカは肩をビクつかせた。

全く、気配を感じなかったのだ。

ダーシェンカがゆっくりと振り返ると、そこには黒髪の女性が佇んでいた。

肌の白い、三十代半ばに見えるその女性は、ダーシェンカの記憶の中にもいる、イズミの母・如月雪だった。

「あ、あの」

「喋らない方がいいわ。痛みを感じていないだけで、あなただって割と危ないんだから」

雪は気まずそうに口を開いたダーシェンカに微笑みを向けた。

それは、ダーシェンカにとって少なからず衝撃だった。

雪にとってダーシェンカは、愛する息子を守り切れなかった役立たずの道具のはずなのだから。

「今はあの人を信じて見守りましょう。とりあえずは、ね」

雪はもう一度ダーシェンカに微笑みかけ、視線をヴェルナールと対峙している幸也

に向けた。

ダーシェンカもそれに習い、視線を雪から幸也に移した。

「一般人に対する三次元魔術の施術、並びにネクロマンサーを犠牲にして不老不死を手に入れたことは罰して余りある。なれば、極刑」

幸也は、悠然とヴェルナールに歩み寄りながら告げる。

「……ほう。大層なことを言うな、不死殺し」

ヴェルナールは目の前に現れた者が何者かを察し、警戒を強めた。

“不死殺し”

どう考えても矛盾を孕んでいるその呼称は、ここ十年の間に、裏の魔術世界に広まった忌み名。

しかし、その矛盾に異を唱える者はいなかった。

それは、厳然たる事実があるから。過去に禁忌を犯し、完全な不老不死を手に入れたはずの者達が、次々と不可解な死を遂げていったのだ。

不老不死の者達が死ぬほど、その名は広まっていったが、その実“不死殺し”が何者であるかは不明だった。何せ、その姿を見て生き残った者は、誰一人としていないのだから。少なくとも、禁忌を犯した者達の中には。

それでもヴェルナールは目の前に現れた男が“不死殺し”だと直感する。

身にまとっているエーテルの質が、一流中の一流であるとともに、その歩き様ですらぞろぞろ怖いモノを感じる。

データでは知っていたはずの男だ。

如月幸也。今回の標的・如月イズミの父親にして、世界を叉に掛ける名医。無論ネクロマンサーとして覚醒しており、狙うには難易度が若干上がるので、標的からは除外した。

だがまさか、ここまでの曲者であるとは想像していなかった。

「私を“不死殺し”と察したことは褒めるべきかな。まあ、褒めたところで何も変わらないのだがね」

「しかし……何故今出てきた？ それは表の魔術世界の掟に反しているのではないか？」

「掟を守ろうともしない輩から掟について説かれるのは非常に不本意なのだが、私の何がいけない？ 貴様は私の愛息、イズミを犠牲にして完全な不老不死を手に入れた。だから私は貴様を葬り去ろうとしているのだ」

「貴様の息子はまだ生き――」

「反論は認めない！」

ヴェルナールの言葉を遮り、幸也は叫んだ。

同時に、ヴェルナールに向かって無数の光の槍が降り注ぐ。

「なに!？」

ヴェルナールは光の槍に目を見開いたものの、冷静にすべてをかわしてみせた。
正確には、かわすように誘導された、というべきか。

「……あなた、イズミは確保したわ。あとはどうぞご自由に。でもハメを外しすぎないで下さいね？ アレは見てて恥ずかしいですから」

ヴェルナールが槍を避けている間に、雪はイズミを抱えていた。

そして心配するような視線を幸也に向けると、たった一步で三メートルほど離れたガーシェンカの隣まで戻っていった。イズミを抱えたまま、だ。

結局、槍の降り注いだコースは全て、ヴェルナールをイズミから遠ざけるためのものに過ぎなかった。

そのことに気付いたヴェルナールは顔を歪めるが、時既に遅しだった。

「了解、母さん。すぐに終わらせるよ」

幸也は先ほどまでの陰しい表情を一変させ、快活に微笑む。ばかりか、ヴェルナールに向かってまで微笑みを向けた。

「いやあ、さっきから頑張ってシリアスな雰囲気醸し出そうと頑張ってたんだけど……僕にはどうも無理みたいだ。だから、こっからが僕の本気だよ？ ヴェルナール」

幸也は長年の親友にでも向けるかのような笑みをヴェルナールに向け、言った。

その笑顔は見た者を戦慄させるさせる、なんの意味もこもっていない、空っぽの笑顔だった。

「ふん、多くの不死者を葬り去った腕前、見せてもらおうか！」

ヴェルナールは幸也の笑顔に気圧されるのを自覚しながら、それを隠すように仕掛けた。

ポケットから新たに無数の水晶玉を取り出し、幸也に向かって射出する。その一つ一つの水晶玉は、イズミに差し向けた物の三倍ほどの大きさであった。

水晶玉は、電撃を纏い幸也に襲いかかる。それも一直線ではなく、数多の方向から。

幸也は特に表情を変えることもなく、嘆息を一つ吐いた。水晶玉を避けようとしなければ、防ごうともしない。

ただ一つ、つまらなそうに嘆息を吐いただけ。

だというのに、水晶玉はただの一つも幸也に触れることはなかった。

幸也は、イズミのように動作を取ることもなく、水晶玉の軌道を書き換えたのだ。死角から迫っていた水晶玉出さえも。

「ヴェルナール。私をイズミと一緒にしてもらっては困るよ？ しょせんイズミは覚醒したて、言わば足の震えるバンビちゃんってとこだ。それともキミは、その程度の相手を圧倒して悦に浸ってたというのかね？」

幸也は地面にクレーターを作り出している水晶玉を見下ろし肩をすくめると、苦笑を浮かべた。

「今のは軽い挨拶に過ぎん。だが、お前の実力は嫌というほど分かった。次は本気で
行かせてもらう」

ヴェルナールは幸也の実力に若干の驚きを覚えたものの、自身の勝利を信じて疑
わなかった。もし仮に疑っていたならば、この場からすでに逃げ出していたらろう。

「本気本気というヤツはたいてい小人だと思わないかい？ ヴェルナール」

幸也は再びヴェルナールに苦笑を向けた。憐れむような、そんな微笑を。

ヴェルナールがその言葉に異を唱えようとしたのも束の間。再び天から光の槍が降
り注いできた。

先ほどの数とは比べ物にならないほど、多くの槍が降り注いだ。それこそ、避ける隙
間もないほどに。

「神槍グングニル、と呼ぶのは少々驕りが過ぎるかな？」

幸也は、ヴェルナールが串刺しになっているであろう場所を見据えながら一人ごち
る。

ヴェルナールの姿は見えない。何せ、半径三メートルに隙間なく光の槍が突き刺さ
さっており、確認のしようがないのだ。

だが。

「少々、ではないだろう。大いに驕りが過ぎる」

槍の叢さむらと化しているその場所からヴェルナールの声が上がった。

声が上がるると同時に光の槍は砕け散り、その中から無傷のヴェルナールが姿を現
す。

「……ほほう。グングニルを完全に防ぐか。魔鏡のヴェルナールという名は伊達じゃな
いらしいね。他の魔術師はよくて一、二本刺さっちゃうんだけどね」

「無理もない。私だって危なかったのだ。空気を媒体にした魔術など想像出来なかつ
たからな」

ヴェルナールは肩をすくめながら飄々と答えるが、内心では目の前にいる男の実力
に少なからず恐怖を覚えていた。

空気中に漂わせた特殊な煙などを媒体にする魔術師ならば珍しくもないのだが、空
気を媒体にする魔術師など聞いたことがないし、可能とも思えなかった。

魔術の媒体にはそれぞれ、エーテルの伝導率がある。水晶玉然り、動物の骨然り、
魔導具然り、エーテルの伝導率の極めて高い物が媒体として多用される。

だが、それはどこにでも存在するというものではなく、また多くが消耗品だ。

だから太古の魔術師たちは、そこいら中に存在するものを媒体として利用できな
いかを試みた。

石ころ、みず、木の枝、果ては塵芥まで。

だが、どれもこれも十分な効力を発揮しなかった。エーテルの伝導率が低すぎたの
だ。むしろ抵抗を持っていたといっても過言ではないだろう。そしてその中には無論、

空気だって含まれていた。

だというのに、いま目の前にいる男が放った魔術は、確かに空気を媒体としていた。

そのことに、一切の恐怖を感じない魔術師など誰一人として存在しないだろう。

「別に大したことをしてるつもりはないんだけどね……大気ってのはエーテルの伝導率が極端に低いてだけで一切通さないってわけじゃないしね。エーテルを大量に込めれば魔術として発動するさ」

幸也は大したことではないと言わんばかりにサラリと言ってのける。

その言葉はヴェルナールをさらに驚愕させた。

大気のエーテル伝導率など、限りなくゼロに近い。そんなものにエーテルを込めるとなれば、それこそ天文学的数値になる。少なくとも、一般規格の魔術師には到底無理だ。

永久機関を持つネクロマンサーならあながち不可能ではないのかもしれないが、同じく永久機関を持つヴェルナールに出来るかといえば、かなり厳しいものがある。

一瞬で天文学的数値のエーテルを汲み出すなど、出来そうにない。

如月幸也という男は、魔鏡のヴェルナールをしても為せないことを平然とやってのけているのだ。

魔術無効化と同じように仕組みは単純。だが、あまりの力技に再現は不可能。

ヴェルナールはこのとき初めて、再現できない術式に遭遇した。

「フハ、フハハハハハハハハ！」

だが、ヴェルナールは恐怖に足を竦めるでもなく、歓喜の笑い声をあげていた。気でも触れたのかと疑いたくなるほど高らかな、笑い。

「おもしろい！ おもしろいぞ！ 不死殺し！ 流石はあの息子の父親、息子の上を行くおもしろさだ！」

ヴェルナールは天を仰ぎ、高らかに笑い続ける。

幸也はそんなヴェルナールの隙を突くでもなく、ただ退屈そうに傍観していた。

「……僕は退屈だけどね」

「なん、だと？」

幸也の言葉にヴェルナールの笑いが止まる。そしてヴェルナールは、射殺さんばかりの視線を幸也に向けた。

「退屈だと言ったんだ。僕の魔術を見るたび、どいつもこいつも同じリアクション。ステレオタイプ……もう、飽き飽き」

幸也は顔を俯け、ブツブツと呟きだす。

幸也のその様子を見た雪が「また悪い癖が……」と呟くのをダーシェンカは耳にした。

「私を愚弄するか、不死殺しっ！」

ヴェルナールは手を振りかざし、地面に転がっていた水晶玉を浮かび上がらせる。

威嚇の意味を込めてなのか、射出はしなかった。

「……それも、同じ。二言目には愚弄するな、馬鹿にするな。別に馬鹿にしてないよ、相手にしてないだけで」

「貴様！」

ヴェルナールは叫び、一斉に水晶を射出した。

先ほどと同じ轍は踏まない。水晶の一つ一つに、己が込められるエーテルの限界量を詰め込んだ。それだけ詰め込めば、体に到達するコンマ何秒の間には軌道を書きできないだろう。

だが、この時のヴェルナールは、怒りで正常な判断を欠いていた。平時のヴェルナールならば気付いていただろう。

一瞬で天文学的数値のエーテルを込められる魔術師にとって、コンマ何秒などという世界はスローモーションに過ぎないと。

「……光牢」

幸也は、一言呟いただけだった。

その言葉が何を意味するのか、ヴェルナールには分からなかった。だが、すぐに理解させられることとなった。

「なんだ、これは……」

ヴェルナールは眼前の出来事に目を瞬かせる。

ヴェルナールが放った水晶玉は、一つ残らず消えていた。地面にすら転がっていない。

代わりに、周囲には光の柱が無数に出現していた。それは水晶玉の行く手を一つ残らず遮り、あまつさえ水晶玉を消滅させてさえ見せた。

それだけではない。

光の柱はヴェルナールの周囲にも出現していた。身動きが取れないよう巧妙に、体に隣接して出現している。

まさに、光の牢獄。

「空気を媒体にするってことはこういうことだってできるのさ。ヴェルナール、君がやるべきだったのは水晶玉で僕を攻撃するなんてことじゃなく、いかに周囲の空気を媒体にさせないかだったんだよ」

「そんなこと、」

出来る筈がない、と呟こうとしたヴェルナールの口が止まった。

出来るのだ。高等な技術を使う必要もなく。

実際、魔術に関してほとんど素人のイズミが無意識のうちにやっていたことだ。

周囲に自分のエーテルを振りまく。

たったそれだけのこと。それだけのことをしていれば、幸也の攻撃を止められないとしても、術式速度は格段に下がっていたはずだ。

そんなことにも気付けなかった自身の無能を、ヴェルナールは呪った。幸也の圧倒

的な力量の前に驚愕し、歓喜し、安い挑発に乗って激怒した自分を呪い殺したかった。

いつものヴェルナールならば、魔鏡のヴェルナールと呼ばれる男ならば、冷静に状況を観察し、危機的状況を打破しえたはずだ。

だというのに、このザマだ。

ヴェルナールはそんな感傷を振り払い、自分に残された最後の選択肢を確認した。

そして、迷うことなくそれを実践した。

「私は、諦めん！」

ヴェルナールは吠えるように叫び、自らを取り押さえている光の柱にエーテルを込め、消滅を試みる。だが、光の柱は消えてはくれない。

そんなことは半ば以上承知だったヴェルナールは、次の行動に出た。

ヴェルナールは、自身の体がどうなるかなどということは気にせず、光の柱に体を突っ込ませる。

「……それも、かつて僕が殺してきた者達が最期にしたことだ」

幸也はヴェルナールの行動を容赦なく切って捨てた。

ヴェルナールはその言葉に異を唱えない。

否、唱えることも出来なかったのだ。

ヴェルナールの体は光の柱によってコマ切れにされ、無残にも、地面に転がっていたのだから。

「思ったよりは自重できたみたいですね、お父さん」

戦闘を黙って見守っていた雪は、ヴェルナールの凄絶な死を意に介す様子もなく幸也に声を掛ける。

「ああ、イズミが見てたらもうちょっと派手に戦ったんだけど……そのザマじゃあねえ」

対する幸也も、何事もなかったかのように、雪の腕の中で穏やかな寝息を立てているイズミに苦笑を向けた。

ダーシェンカはただただそんな不可解な光景を見つめるばかりで、口を挟む機会を見つけれなかった。

というよりも、思考が停止していた。

イズミとダーシェンカがあれだけ手こずったヴェルナールが、こうもあっさり倒されてしまったことが信じられなかった。

恨んでも恨み切れない仇が目の前で死んでくれたというのに、心の中にあるのは、喜びよりも、言い表しようのないモヤモヤとした感情だった。

「イズミはともかく、ダーシェンカちゃんは危ない。キリコを呼んで手当てしてもらおう。まだ近くにいる筈だから呼べばくるだろ」

「ええ、そうね。イズミの手当ても必要だから、キリコくんには病院に来て貰いましょう」

ダーシェンカのモヤモヤをよそに、夫婦はどンドンと話を進めていく。

「ちょっとごめんね」

いつの間にかダーシェンカに歩み寄っていた幸也は一言述べると、ダーシェンカを抱えあげた。

「あ、あのっ」

「聞きたいことは色々あるのだろうが話はあとあと。今は治療が先だよ？ ダーシェンカちゃん」

珍しく狼狽した声をあげたダーシェンカを幸也が優しく諭し、歩き始める。雪もそれに続いた。

幸也の言葉はダーシェンカを益々困惑させた。

イズミはともかく、役立たずの、なおかつイズミが覚醒した今となっては、お役御免の自分に治療など必要ないはずだ。役立たずの自分に待っているのは、イズミにエーテルを返して、永遠の眠りにつくということだけ。

それなのに、この夫婦は治療という。

「それに……まだ、終わってないからね」

困惑しきっているダーシェンカの耳に、幸也の呟きが響いた。

第四章 夢

1

「お父様、今日はどんなどんなお話をして下さるの？」

どこか舌足らずな、可愛らしい少女の声がイズミの耳朶を打った。

イズミはその声に、目を開けた。

そこは、イズミの知らない部屋だった。

壁には分厚い辞典類が収められた背の高い本棚が立ち並び、床には見るからに高級そうな絨毯が敷き詰められている。

部屋は、窓から差し込む穏やかな月明かりと、天井から吊るされているシャンデリアの明かりによって照らされていた。

そんな優しい明りが、壁に二つの影を作り出している。

「そうだね……ダーシェンカはなんの話が聞きたい？」

部屋の中央でロッキングチェアに腰掛けた、いかにも人好きのする初老の紳士が頬の皺を深めながら言った。

「えっとねえ……お父様が話して下さることなら、なんでもいいですわ」

老紳士の前に行儀よく座っている亜麻色の髪の少女——ダーシェンカは、朗らかに微笑んだ。

気品と利発さを兼ね備えた、そんな微笑。

「ダー……シエンカ？」

イズミは、目の前で繰り広げられている光景に首を傾げた。

確かに、言われてみれば少女にはダーシエンカと似通った点がある。いや、似通っているというよりも、ダーシエンカを幼くしたらこうなるだろう、というのが目の前にいる少女だった。

ここはどこだろう、という疑問より、これはなんだろう、という疑問がイズミの頭の中を駆け巡った。

「そうだねえ……それじゃあ、」

「ダーシエンカ！ 子供はもう寝る時間ですよ！ それにお父様も！ ダーシエンカを甘やかさないでください！」

老紳士が口を開くと同時に、扉が開き、イズミと同年代の少女が部屋に入ってきた。

その少女は、イズミの記憶の中にいるダーシエンカそのものだった。

「ダー……シエンカ？」

イズミは思わず呟いていた。

だが、部屋の中の者は誰一人としてイズミに視線を向けない。

「でも、ラズお姉様……」

「でもじゃありません！ いいから部屋に戻って寝なさい、ダーシエンカ！」

ダーシエンカ、ではなくラズと呼ばれた少女は、渋る幼いダーシエンカを引っ張り上げ、

強引に扉まで引きずっていく。

「お父様も！ ダーシエンカが可愛いのは分かりますけど、甘やかすのはこの子のためになりませんからね！」

部屋から出る間際、ラズは老紳士に向かって釘をさす。

そして、口調とは裏腹に丁寧にドアを閉め、渋るダーシエンカを引き連れ立ち去って行った。

「……やれやれ、ラズの奴め。年寄りの楽しみを奪いおってからに」

老紳士は溜息を吐き、ロッキングチェアに寄り掛かった。

椅子は、キィキィと音を立て、緩やかに揺れる。

「そうは思わんかね？ その少年」

老紳士の言葉にイズミは肩をビクつかせた。

先ほどイズミの呟きに全く反応しなかったというのに、老紳士はしっかりとイズミを見据えていた。

「僕が、見えていたんですか？」

「ああ、見えていたとも。ラズとダーシエンカには見えないようなので見えないフリをしていただけだ」

老紳士はロッキングチェアに揺られながらのんびりと言う。

「あの……ここは、なんなんですか？」

イズミは率直な疑問を口にした。

明らかにおかしい状況だ。

だんだんと思いだされる。先ほどまで自分は街中でヴェルナールと戦っていたはずだ。そして、ダーシェンカを庇って傷を負った。

そこまでは覚えている。そこから先の記憶は、ない。

気がつけば見知らぬ所にいた。

幼いダーシェンカと、ダーシェンカそのものの容姿をしたラズという少女、それに二人の父親らしい老紳士。

どれもこれも存在しようがない存在だ。

ダーシェンカの家族は二百年前に、ヴェルナールの手に掛って命を落としているのだから。

だとしたらここは死後の国？

答えは否、だ。

それでは幼いダーシェンカについて説明できない。

「ここは何か、と問われれば、私としては返答に窮するのだが……至極まっとうに答えるとするならば、ダーシェンカの記憶だ」

老紳士は顎をさすり、イズミの問いに答えた。

だがイズミはその答えの意味が今一つ理解出来ず、眉をひそめる。

「おかしなものでな、少年。私はダーシェンカの記憶の一部でありながら、そのことに気付いているのだよ。夢の中で、これは夢だ、と気付いているのと似たようなモノだろうな」

「は、はあ……」

イズミは老紳士の言葉に曖昧な返答しかできなかった。

何を言っているのかまるで理解できない。ここ数週間、魔術というものに触れてきたイズミをして、今の状況はさらなる怪異だった。

「自分で言うのもなんなのだが、私があまりに優れた魔術師“だった”からそのことに気付いているんだろうな」

老紳士は遠くを眺めるような視線でイズミを見据えた。

「だった、って……あなたまさか」

「すでに死んでいるのだろう？ 生身の私は」

老紳士は力ない笑みを浮かべ、椅子の背もたれに体を預ける。

「……ええ。あなたは、ヴェルナールという魔術師に殺されたらしいです。ダーシェンカ

以外のオルリック家の人達は、みんな……」

イズミは苦々しげに言いながら、先ほどの光景を思い出す。

魔術師だとか一般人だとか、そんなこと関係なしに繰り広げられる温かなやりとり。現在のダーシェンカと瓜二つな、ダーシェンカの姉である面倒見のいいラズ。今のダーシェンカからは想像もできない甘えん坊のダーシェンカ。二人を温かく見守る老紳士。

こんな場所を、ヴェルナールは奪ったというのか。

「ほう、魔鏡の……。まあ、記憶の私が知ったところでどうにもならんか」

悲しげに微笑む老人に、イズミはかける言葉が見つからなかった。

「ダーシェンカがどのような生を辿っているのかおおよそ想像はついている……時々感じるのだよ。ダーシェンカの苦しみを。あの子にとってこの記憶は、暖かな悪夢なのだろうな」

「そんなことは、」

「ああ、気にせんでくれ。年寄りの戯言だ。それより、少年。ここにいるということは、キミはダーシェンカにとって大切な存在のようだ」

老紳士は沈痛な面持ちを隠し、穏やかに微笑む。

それがまた、イズミの心をえぐった。

「僕が、大切な、存在？」

イズミはひとり言のように呟く。

自分がダーシェンカにとって大切な存在かと問われれば、それはもちろんイエスだ。何と言っても、イズミがいなければダーシェンカは活動出来ないのだから。

だが、老紳士の“大切な存在”というのはそういうものを指してではない。

もっと別の、利害関係を取り払った所での大切さだ。

そう問われると、どうなのだろう。

「フッフ、その様子、キミにとってのダーシェンカも大切な存在なのだろう。大切かどうかも分からないほどに、ね」

老紳士は悶々と悩むイズミを見、微笑んだ。

そんな老紳士に、イズミは「はあ」と生返事を返す。

「キミがダーシェンカとどのような関係なのか、などという無粋なことは聞かない」

老紳士は意地の悪い笑みをイズミに向けた。

「あ、あのっ！ 別にそういう関係じゃ、」

「ホッホ。冗談だよ、少年。だがな」

老紳士は表情をグッと引き締め、イズミを射抜くように見据えた。

その様に、イズミは思わず固唾を飲み、姿勢を正した。

「ダーシェンカを救ってやれるのは恐らく、キミだけだ。過去の苦しみを完全に消すことは不可能だろう。だが、暖かな記憶を思い出すときに苦しむというのは悲しすぎる。だ

からせめて、暖かな記憶は暖かな記憶として思い出せるようにしてやってくれ。頼む」
老紳士の言葉に、イズミは何と答えればいいのか分からなかった。
自分がダーシェンカを救う姿がまったく想像できない。
いつも助けられてばかりで、ダーシェンカにしてあげられることと言ったら、衣食住の提供ぐらいだ。それすらも、ほとんどが親の力によるものだが。
(僕に、出来ること?)
イズミは自分の両手を見つめ、自問した。
「自信がないのかね? 少年」
「……はい。正直、僕がダーシェンカにしてあげられることなんて」
イズミの言葉に老紳士は微苦笑し、言った。
「ならば、今までキミがしてきたことを変わらず続けてくれ。それが、娘に何もしてあげられなかった駄目な父親からの、最後の願いだと思ってくれ」
「それはもちろん、っ!?!」
イズミが老紳士の頼みに答えようとしたとき、部屋がグニャリと歪んだ。
壁が歪み、床が歪み、老紳士さえもが歪んだ。一つ一つが、乱雑に掻きまわされた絵の具のように混じり合っていく。
イズミもその例外ではなかった。
少しずつ、意識が薄れていくのを感じた。
「もうキミはお目覚めのようだ、少年。ダーシェンカのこと、よろしく頼んだぞ」
薄れゆく意識の中で、老紳士の声だけはハッキリと届いた。

2

遮光カーテンで締め切られた真っ暗な一室。何も見えないほどのその場所で、男の荒い呼吸音だけが響いていた。リズムも一定でなく、定期的に途切れるその呼吸は、まるで死に瀕した野獣のようだ。
「おの、れ、不死、殺しめ、次、こそは、必ず」
暗い部屋で、何かが蠢いた。
野獣とは違い、知能を持ち合わせているらしいソレは、立ちあがり、遮光カーテンを乱暴に開いた。
部屋の中に夏の強い日差しが降り注ぐ。
夏の陽光に照らし出された一室は思いのほか豪勢で、テーブル、ベッド、床に敷き詰められた絨毯に至るまで、一級の調度品。
そこは、とあるホテルの最上階にあるスイートルームだった。
だが、そんな上品な部屋には到底釣り合わない者が窓辺に立っていた。
皮膚はミイラのように黒く変色し、顔は肉という肉を削ぎ落した頭蓋骨のような形、

目玉は剥き出しになっており、少し動くだけでもギョロついて見えた。

その姿はまさしく、如月幸也が完膚なきまでに葬ったはずの男、ヴェルナールだった。「次は、必ず」

ヴェルナールは遥か下方に行き交う人々を見下ろしながら憎々しげに呟き、そのまま床に倒れ込んだ。

3

消毒薬の匂い漂う病院の廊下で、ダーシェンカは二人の男と向かい合っていた。四十代半ばの、ベージュのスーツに身を包んだ紳士・如月幸也と、病院では絶対に避けるべき服装、喪服に身を包んだ十代半ばの少年・キリコ。

キリコの姿を咎める者は誰一人としていない。

何せこの病院にはダーシェンカと如月一家とキリコしかいないのだから。ちなみに、イズミは応急処置を終えて病室のベッドで眠っており、雪はそれに付き添っている。

医師や患者が一切いないというありえない光景も、蓋を開けてみれば単純なこと。

この病院が、正規の医療機関ではない。ただそれだけ。

ここは、何の変哲もないオフィスビルに、如月幸也が秘密裏かつ非合法的に作り上げた闇医院だった。

街中になんの違和感もなく存在しているこの病院にダーシェンカを運び込んだ幸也は「簡単なオペなら出来る設備が揃ってるよ」と笑顔で説明してくれた。

それからは、幸也と雪がイズミの怪我の手当てをした。世界的名医だけあって、その手当は的確かつ迅速だった。

そして、普通の人間とは治療の方法が異なるダーシェンカは、幸也が呼び出したキリコによって治療された。

キリコはこの設備を使って何やらアルシエラも治療していたようだが、ダーシェンカはその辺りについて詳しく知らなかった——知ろうともしなかった。

「どうして、私も助けたんですか？」

ダーシェンカは伏し目がちに幸也に尋ねた。

ダーシェンカには幸也達の行動の意図が分からなかったのだ。

イズミはネクロマンサーとして覚醒した。それは、並の魔術師では到底届かない領域に立ったということ。

ヴェルナールには敗北したが、それもダーシェンカを庇っていなければどうなっていたか分からない。

皮肉なことに、イズミを守るはずのダーシェンカが原因で、イズミは傷ついたので。それを無様と思うよりも、イズミが庇ってくれたことを涙が出るほど嬉しく思っている

自分がいるということが、何よりもダーシェンカを苛んだ。

覚醒したネクロマンサーにリビングデッドは不要というのは、魔術世界の常識。

エーテルを無限に汲み出せる永久機関が起動したからといって、それをリビングデッドに分け与えることは出来ないのだ。永久機関が作り出すエーテル量は力任せに使う分には使い勝手がいいのだが、繊細な作業には全く向かない。

あまりに莫大な量で、制御がきかないのだ。

そんなものをリビングデッドに注ぎ込めば、リビングデッドの魂が崩壊してしまう。

だから、リビングデッドを使用し続けるには、一般人の総量と変わらない自身の魂を削るしかない。

そんな酔狂なことをする者は、いないだろう。

最低限の礼節を整えて送るという形をとってはいたが、自分自身のいたあの温かなオルリック家でさえ、そうだった。

そして何より、幸也自身もリビングデッドを連れていないというのが、何よりの証拠。「どうして助けたと聞かれてもねえ……まだキミには役目があるし」

幸也はめんどくさそうに頭を掻きながら苦笑した。

「役目？ もうイズミだけで十分じゃないですか。私など……」

「まあ、大抵の輩ならイズミで十分だろうね。というか覚醒後のネクロマンサーを狙う馬鹿はいないだろうし。でも、相手がヴェルナールなら、どうだい？」

幸也は苦笑を消し、真面目な表情でダーシェンカを見据えた。

「確かに、ヴェルナールレベルなら苦戦するでしょうが、私がいたところで……」

「ああ、もう！ 何ウジウジ言ってんだよ！ そんなに廃棄処分スクラップになりたいなら今すぐしてやるよ！」

言いよどむダーシェンカに、黙って会話を聞いていたキリコが堰を切ったように怒鳴り始めた。

「いいかつ!? 幸也さんはな、初めからお前の能力にはそんなに期待してなかったんだよ！ お前が、歴代キリコ随一の奇作、あるいは、魔術が使えない出来損ないと呼ばれているのを知ってて、買ったんだ。なんでか分かるか？」

優しげな顔に似合わぬ、気迫だけで子供を殺せそうな剣幕に、ダーシェンカは少なからずたじろいでしまった。

たじろぎながらも、なんとか首を横に振る。

「お前の覚悟を買ったんだよ。ネクロマンサーを狙う者達への並々ならぬ闘争心を、そして何よりヴェルナールへの恨みを、な」

「どういう、ことですか？」

ダーシェンカは呆然と幸也を見つめた。

自分が出来損ないだなんだと思われることに抵抗はない。当時のキリコにもそれを理由に、リビングデッド化を散々断られ続けたのだから。

だが、分からない。ネクロマンサーを狙う者達への闘争心というのはまだ、分かる。では、ヴェルナールへの恨みという、ひどく限定的なものはなんなのか。「幸也さんは、イズミくんが覚醒するまで平和に過ごせるようにと、あらかじめの危険因子は秘密裏に処分してたんだよ。不死殺しという忌み名は、これの副産物だ。でも……ヴェルナールだけは巧妙にその網を抜け、生き残っていた。だから、イズミくんを狙うのはヴェルナールだろうと見当が付いていた訳だ」

黙りこくっている幸也を見かねたキリコが嘆息混じりに説明する。「つまり、ヴェルナールと因縁のある私なら……適任だと？」

ダーシェンカの問いに、キリコは頷いた。「でも……ヴェルナールが死んだ今となっては、私の利点など」「ダーシェンカちゃん。キミはそんなにイズミが大切なのかね？」

黙りこくっていた幸也が不意に口を開く。優しいが、しかしどこか厳しさを併せ持った幸也の瞳が、ダーシェンカを見つめる。ダーシェンカは、幸也の問いになんと答えればいいのか分からなかった。だから、うつむき、沈黙せざるをえなかった。

「イズミの寿命を気にして、死に急いでるのかい？」

続けられた幸也の言葉に、ダーシェンカはハッと顔をあげた。幸也は相変わらず、優しくも厳しい表情をダーシェンカに向けている。「わたしは……」

言いよどむダーシェンカに、幸也は嘆息を漏らした。「本当はね、ダーシェンカちゃん。僕は、イズミを見殺しにしなければならない立場だったんだ」

幸也は力なく微笑む。

ダーシェンカはそれを聞き、雪の『“形式上”死んだことにしたほうがいい』という、いまいち要領を得ない言葉を思い出した。

「アクロマ機関は、魔術が一般世界を侵食しないように見張る役割と、魔術世界の掟を守らせる役割がある。掟なんて言うの間こえはいいけど……それは必ずしも弱者に優しいものじゃない」

「幸也さんなら何かやらかすとは思ってましたが……本当に掟を破っちゃうとはねえ」

キリコは苦笑いながら言った幸也を見やり、心底楽しそうに微笑んだ。

「掟を、破った？」

ちょっとした失敗談でも語っているようなキリコと幸也を交互に見ながら、ダーシェンカは呆然と呟いた。

魔術世界の掟とは、一般世界のそれよりも遥かに厳しい。一般世界では違法となっているようなことも魔術世界では合法という場合も多いの

だが、

その分、魔術世界の違法はそれだけで“死”を意味する。

幸也がいつそんなことをしたのか、ダーシェンカには皆目見当がつかなかった。

少なくとも、二百年前までなら掟破りに該当するものはなかったはずだ。

そんなダーシェンカの考えを察してなのか、幸也が口を開く。

「今は少しばかりネクロマンサーへの風当たりが強くなっていてね……自分の身を守れないネクロマンサーは、処分されるんだ。共闘すらも基本的には認められていない」

幸也は相変わらず、なんてことないとばかりに言う。

だがそれは、ダーシェンカを絶句させるには十分な言葉だった。

自分の身を守る。

それは、ネクロマンサーに当てはめられる場合には矛盾を孕む。何せ、覚醒するまでのネクロマンサーはリビングデッドに頼りきらなければならないのだから。

リビングデッドを蘇生させるのが自身の能力によるものだとしても、そこから先はリビングデッド次第。つまり、生き残りたければ強力なリビングデッドを蘇生させるしかない。

ダーシェンカは、自身が他のリビングデッドに引けを取らないと自負しているし、イズミの協力はあったもののアルシェラとだって対等に渡り合った。

だがそれでも、如月幸也の神経を疑う。

出来損ないと揶揄されるダーシェンカを“覚悟”などという非常に曖昧な理由で愛息にあてがうなど。

それはつまり。

「最初から助けるつもりだった？」

ダーシェンカは呟いていた。

幸也への問いかけではなく、自身への問いかけとして。

だが、答えは否だ。

最初からイズミを助けるつもりならば、もっとタイミングがあったはずだし、第一ダーシェンカを助ける必要がない。

「おいおい、ダーシェンカちゃん。見損なわないでくれよ。僕はこれでも掟に従順なんだ。

イズミが息子だから助けた訳じゃない」

幸也はやれやれとばかりに頭を振る。

「では、どうして……？」

「イズミが身を挺してキミを庇ったからさ。あそこでイズミがダーシェンカちゃんを見捨てていたら、間違いなく僕もイズミを見捨てていたね。イズミだけじゃ本気のヴェルナールには歯が立たないだろうしね」

幸也は真剣な表情で言った。

そこには、幸也が本気でそうしていただろうということが見て取れた。

「そんな、こと、だけで？」

「そんなことじゃない。とても重要なことだ。自分のために必死に戦ってくれている者を一人の人間ではなく道具としてしか見れないようなヤツは生きる価値がない。それに、僕はまだ完全にキミ達を助けていないしね」

幸也の言葉に、ダーシェンカは首を傾げる。

完全に助けていないとはどういうことなのか。ヴェルナールを葬った以上、当面敵がいるとは思えなかったし、何よりも、覚醒したイズミを狙うヤツなどそうそういないはずだ。

ましてや、危険因子を排しているとなればなおのこと。

「実はね、生きてるんだよ。ヴェルナール」

幸也はサラリと言った。本当になんてことのない、日常の一言のように。

「なっ!? だって確かに、」

「街の人の意識操作は解けていたかい？」

ダーシェンカの言葉を遮り、幸也は諭すように言った。

「……解けて、なかった」

ダーシェンカは呆然と呟いた。

何故今まで気付かなかったのか。自分が幸也に抱き抱えられながらここまで来る間、誰一人として視線を向けてはこなかった。

いや、もっと早くに気付くべきだったのだ。

ヴェルナールがバラバラになったあの時に死んだというのなら、魔術は解け、街は大混乱に陥っていたはずだ。

「ヴェルナールは、キミの家族を犠牲にして、表現としてはおかしいけど、不完全ではあっても不老不死を手に入れている。ダーシェンカちゃんは不老不死がどんなものか知っているかい？」

幸也の問いに、ダーシェンカは首を横に振った。

魔術世界では不老不死は実現可能なものとして捉えられているし、不老不死を手に入れた者達の名前もいくつかは知れ渡っている。

だがその実、不老不死を手に入れた者を見ることは、まず、無い。

禁忌を犯したから身を隠さざるをえないからだ。

だから、まっとうな魔術世界にのみ生きる者は、不老不死者には絶対に出くわさない。

「不老不死とは何も今ある肉体がそうなる訳じゃないんだ。不老不死者の肉体も、放っておけば老いるし、心臓だって止まる」

「じゃあ何が不老不死なんですか？」

「四次元魔術の永久施術。つまりは、自己の肉体の永久喚起」

ダーシェンカの問いに、キリコが答えた。

ダーシェンカはその内容に息を呑んだ。

四次元魔術。

最高位に位置する魔術で、これを行える者は一流と呼ばれる者達の中ですら稀有。それは技術面での難しさもさることながら、大量のエーテルを消費しなければ術式が発動しないという欠点があった。

四次元魔術とは、エーテルを媒体にエーテルを込め、エーテルを受肉させることを言う。

それは物質を作り出すことと同義であり、三次元魔術を組み込めば生命を作り出すこととも同義となる。

自己の肉体の永久喚起とは、自分自身のエーテルを媒体に、永久機関を利用して受肉させ続けることを指すのだろう。と、ダーシェンカは推測する。

そして、ヴェルナールの肉体が醜い姿なのはそのプロセスのどこかに欠陥があるからなのだろう。

そこをして、幸也は不完全な不老不死と表現したのだ。

「……では、ヴェルナールは再び肉体を喚起し、受肉している、と？」

ダーシェンカの問いに、幸也は頷く。

「いつもなら、媒体となるヴェルナールのエーテルごと消し去るんだけど……今回はしなかった。何が言いたいのか、分かるよね？」

「もう一度ヴェルナールと戦い、自分の身は自分で守れることを証明しろ、ということですね」

ダーシェンカはその一言一言に強い意志を込めた。

覚醒したといっても、イズミだけでは、ヴェルナールには敵わないだろう。ダーシェンカだけでは、ヴェルナールには敵わないだろう。

だが、二人なら、勝算はある。

(ならば自分は、戦うだけだ。家族の仇を討ち、イズミの未来を作ってみせる)

ダーシェンカは拳を強く握りしめ、自分自身に宣言した。

たとえそれが、自分からイズミへ最後の餞はなむけになるとしても、迷いはなかった。「それでこそ歴代キリコの作品だ。ダーシェンカ！ そうそう、エーテル量の心配なら要らないからな。さっきの治療の時に俺のエーテル込めといたから。イズミくんのエーテルじゃなくても“キリコ”である俺のエーテルなら問題ないしな」

キリコは快活にダーシェンカに言う。

「どうして、そこまで……？」

「アルシエラ奪還に協力してもらった礼だよ。まあ、これで貸しはチャラだから二度目はないがな」

「……礼を、いう」

ダーシェンカは、なんとかそれだけの言葉を絞り出した。

眼前の少年に、どこか、当時の、二百年前のキリコを垣間見た気がしたのだ。

「さて、話が済んだのならダーシェンカちゃんはイズミに付いてやっててくれ。起きた時にキミがいないと、不安になりそうだからな」

幸也はダーシェンカの肩にそっと手を置き、優しく言った。

ダーシェンカは黙って頷き、ゆっくりとイズミの病室へ歩いていった。

4

「……驚いた」

ダーシェンカがイズミの病室へ入ったのを確認したキリコは、呆然と呟いた。

「何が？」

「ネクロマンサーを狙うやつを殺すためなら、ネクロマンサーを利用すると断言していたダーシェンカが、あんなにしおらしくなるなんて。イズミくんって、恐ろしい女殺しだな」

「おいおい、人の息子をそんな風に言うなよ。というか今は“当代”のキリコでいいんだよな？」

「さあ？ どうでしょうね」

幸也の問いに、キリコはいたずらな微笑みを浮かべる。

「……まったく。変な形で年食ってるヤツらはみんなこれだから嫌いなんだよ」

幸也は深い溜息を吐き出し、肩を落した。

「まあ、そう言わないで下さいよ。それよりも俺らは楽しもうじゃないですか。若い二人の行く先を、ね」

「まったく……親としては気が気じゃないんだがね」

幸也はまんざらでもなさそうに苦笑し、ダーシェンカが消えていった病室を眺めていた。

5

ダーシェンカが扉を開けて病室に入ると、イズミに付き添っていた雪が振り返った。

ダーシェンカは何か言おうと口を動かすのだが、言葉が出てこなかった。それどころか足も病室の入り口で止まってしまう。

「こっちにいらっしやいな。ダーシェンカちゃん」

雪は微笑み、壁に掛けてあったパイプ椅子を広げて指し示す。

「は、はい……」

ダーシェンカはおずおずと頷き、パイプ椅子に腰をおろした。

それでも雪と向かい合うことは出来ず、伏し目がちにイズミの様子をチラチラと見るのが精一杯だった。

イズミは穏やかな寝息を立てて眠っている。

傷自体は肩口と腹部の二か所で、幸い臓器などに欠損は見受けられなかった。普通なら眠り続けるような怪我ではないのだが、極度の緊張の反動でこの状態になっている、というのが手当をした幸也の見立てだった。

とても、緊張したのだろう。

ゾンビのような攻撃をかいぐり続け、感覚を共有してダーシェンカに助力し、あまつさえヴェルナールとも戦って見せた。

そして、自分を庇って傷を負った。

ダーシェンカはそのことを思い、唇を噛みしめる。気を抜けば、涙も溢れてきそうだった。

「……気にすることないのよ。ダーシェンカちゃん」

顔を俯けるダーシェンカを不意に、雪が抱き寄せた。

ダーシェンカを雪の温もりが包み込む。

ダーシェンカは雪の唐突な行動に目を見開いたものの、その温かさを突き離すのは躊躇われ、そのまま雪に身を任せた。

「イズミがこうなったのはダーシェンカちゃんのせいじゃないわよ。イズミが自分の意思でダーシェンカちゃんを庇ったんだから。なんならこう言ってあげてもいいわ。悪いのはイズミよ」

雪はダーシェンカの肩をポンポンと叩きながら、優しく、囁くように言った。

「で、でも、私さえ、私さえ、しっかりしていれば」

ダーシェンカの声は震えていた。

雪から何か罵倒される、という類の恐怖ならばどれだけ良かったことか。罵倒され、殺されかける恐怖のほうが何倍優しかったことか。

ダーシェンカは、雪の優しさが怖かった。雪から漂う温かな空気が、ただただ恐ろしかった。

涙が出そうなほどに恐ろしく、嬉しかった。

「……そうね。確かにあなたがイズミのエーテルを搾取して、万全の状態でヴェルナールと戦っていれば、もっと違う結果になっていたかもしれない。けどね」

雪は語気を強め、ダーシェンカの両肩に手を置き、ダーシェンカとしっかりと視線を絡ませる。

ダーシェンカも、雪から視線を外すことが出来なかった。外したら、二度と向かい合えなくなる気がしたから。

「私はイズミのリビングデッドがダーシェンカちゃんで、本当に良かったと思う。自分のことよりもイズミのことを考えちゃうような甘々のダーシェンカちゃんで、本当に良かった」

たと思う」

雪は、ダーシェンカは見据え、断言した。

「わ、私は……」

「そんなに難しく考える必要はないし、気に病む必要もないわよ。イズミは自分の意思でダーシェンカちゃんを庇った。それに忘れたの？ イズミはあなたを庇いながら微笑んでたのよ？ そこに後悔があるはずないわ」

雪はダーシェンカの肩から手を放し、明るい微笑みを浮かべる。

「……あ」

ダーシェンカはイズミが倒れていく瞬間のことを鮮明に思い出した。

あの瞬間のことは、はっきりと覚えている。全てがスローモーションとなって頭の中に再生される。

確かに、イズミは微笑んでいた。体に血を滲ませながらも、満足そうに。

「ね？ ようはダーシェンカちゃんが、庇いたいと思えるほどのいい女だったってことよ」

雪は微笑み、念を押すように首を傾げた。

ダーシェンカはなんと答えればいいのか分からず、頬をほんのりと赤らめた。

それでも、先ほどまでの陰鬱な表情は消えていた。

「あとはイズミが起きるのを待ちましょ。……まったく。たかだか二か所の傷でいつまで眠ってるつもりなんだか」

雪は愛おしそうな視線をイズミに向け、呟いた。

ダーシェンカも、切実さを秘めた瞳で、イズミを見つめた。

6

ダーシェンカと雪が見守ること三十分。

イズミの瞼がピクピクと動いた。そして、ゆっくりと目が開かれる。

「やっと起きたみたいね。私はお父さんと呼んでくるわ」

雪は寝ぼけ眼のイズミを見て微笑み、部屋を出て行った。呼んでくるとは言ったものの、

父親とキリコは先ほどから部屋の前で待機しているのだが、ダーシェンカはそれを知らなかった。

「ん、あれ、ここ、は……？」

扉の閉まる音でハッキリと目覚めたのか、イズミは目をしばたかせながらあたりの様子を窺っている。

「病院だ。イズミが私を庇って倒れたあと、イズミの両親に助けられ、私共々運び込まれたんだ」

「父さんと母さんが？ それより、っ！」

イズミは体を起こそうするが、肩と腹に走る痛みに顔を歪め、再びベッドに体を沈めた。

「無理をするな。そのまま話してくれて構わない……いや、それよりも先に言っておきたいことがある」

「言って、おきたいこと？」

「ああ。私を……庇ってくれて、その、ありがとう」

ダーシェンカは顔を俯けて言った。横たわったままのイズミにとってはその方が、ダーシェンカの表情がよく見えたのだが、ダーシェンカはそれに気付かなかった。

雪との会話がなければ、ダーシェンカは真っ先にイズミに対して謝っていただろう。だが、そうしなかった。それはきっと、イズミにとっては嬉しくない言葉だと気付かされたから。

「あ、いや、どういたしまして……なのかな？」

案の定、イズミは照れ臭そうに笑いながら頬を搔いていた。

傷を負ってなお変わらぬイズミの態度に、ダーシェンカは心の底から安堵した。冷たく当たられることも心のどこかでは覚悟していたのだが、要らぬ覚悟だったらしい。

「本当に、ありがとう……」

ダーシェンカの声は震えていた。

先ほどよりもより深く、顔を俯けている。

温かいしずくが、頬を伝い、流れ落ちていく。

「え!? ちょっと! どうしたの!? ダーシェンカ! ぼ、僕なにかした!？」

イズミは体の痛みなど忘れて起き上がり、ダーシェンカの肩に手を置いた。

「なんでも、ない。ただ、ちょっと……」

ダーシェンカは必死に涙を止めようとするのだが、止まってはくれなかった。次から次へと溢れ出てくる。

雪の優しさはなんとか耐えられたのだが、イズミの優しさは、どうしても、耐えることが出来なかった。

イズミはなんとかダーシェンカを落ち着けようといろいろと言葉を掛けるのだが、それは全く逆の効果を発揮してしまった。

ダーシェンカは「大丈夫だから」とほほ笑むのだが、涙は止まらない。

そんなときに、扉がガチャリと音を立てて開いた。

そこから姿を現したのは、いやらしい笑みを浮かべた幸也と、口元に微笑を称えたキリコ。少し遅れて、呆れ顔を幸也とキリコに向けた雪が現れた。

「その歳で女の子を泣かせたとすると、案外キリコの言う通りなのかもな。うちの息子は」

幸也はシゲシゲと頷きながら、キリコを見やる。

「ですよ。まったく、末恐ろしい、いいえ。既に恐ろしいですよ」

キリコも幸也を見ながらワザとらしく頷いた。

「父さん、母さん。それに……キリコ、さん？」

イズミは部屋に入ってきた者達を視界に入れ、呆然と呟いた。

ダーシェンカも慌てて涙を拭い、幸也達に視線を向ける。

「二人きりのところを邪魔して非常に申し訳ないのだが……正直、時は一刻を争うのでな。

手短かに説明させてもらおうぞ」

幸也はニタついていた顔を引き締め、口火を切った。

幸也は要点だけをまとめ、自分の立場、ヴェルナールの生存、イズミが為すべきことなどを説明する。

その言葉には親としての情は一切含まれておらず、アクロマ機関の“審判者”としての淡白な言葉だった。

「……分かった」

それでもイズミはぼやき一つ漏らさず、力強く頷いた。

それにはダーシェンカを除いた部屋の者全員が、少なからず驚きを覚えた。

だが、ここ数週間のイズミを間近で見てきたダーシェンカにはなんら驚くことではなかった。

イズミという少年は、こういう強さを持っているのだ。

何の仕掛けもないような肝試しにさえビビろうと、回避術の訓練中になんど情けのない言葉を吐こうとも、やるときは、やる。

ゾンビのような男達の攻撃だけでなく、ヴェルナールの攻撃にすら立ち向かっていく。

咄嗟に、ダーシェンカを庇うことだってする。

「しばらく見ないうちに、いい表情をするようになったな……まあいい」

幸也はしみじみと言いながら頭を振り、続けた。

「とにかく、お前たち二人はヴェルナールを倒す必要がある。だが正直、普通に戦っても勝算は低いだろう」

「そんなの——」

やってみなきゃ分からない、と言いかけたイズミを、幸也は手で制する。

「だから、普通に戦わなければいい」

幸也はニヤリと笑い、イズミ達に秘策を伝えた。

それを聞いたイズミとダーシェンカは顔を見合わせ、二人同時にゴクリと固い唾を飲み込んだ。

幸也の秘策は王道中の王道である、奇襲。

イズミとダーシェンカが固唾を飲んだのは、奇襲という作戦ではなく、その決行日時。

奇襲の日時は、二日後。

傷を負っているイズミにとってはなかなか厳しい日時。だが、そこに明確な理由があ

る以上、それ以外の案は思いつけなかった。

不老不死者が肉体の喚起を行うには、多大な疲労が伴うらしく、攻めるには早い方がいいというのが第一の理由。

そして、第一の理由だけならば今すぐにでも奇襲を仕掛けるのだが、そこには問題があった。

イズミの、魔術に対する防御・回避能力がまだ低いということと、身に負った傷。

だから今日は体を休め、明日は魔術の訓練に費やすというのが幸也の狙いだった。

本来一朝一夕で魔術に対する防御・回避能力は身にかないのだが、ダーシェンカとの訓練である程度の基礎能力を身につけていたイズミは学ぶことが少ない、というのが幸也の弁。

何よりも、感覚的にではあるが、ヴェルナールの水晶玉を退けていたのが大きかった。

「とりえず今日は体を休めて、」

「必要ないよ」

幸也の言葉をイズミは遮る。

皆一斉に、目を見開き、イズミを見つめる。

「どうせ怪我は今日一日じゃ治らない。だったら、今日から訓練を始めたほうがいい」

イズミは皆の視線を気にすることもなく言い切り、ベッドをすわりと抜け出し、立ちあがった。

イズミは少しだけ顔をしかめたが、立つ分には問題ない程度の苦痛だった。動くにはどうか、と考えると若干問題がありそうだったが、気にしている場合ではない。

「お、おいイズミ。無理はよくないぞ」

ダーシェンカは立ち上がったイズミに歩み寄り、不安げな視線を向けた。

「大丈夫だよ、ダーシェンカ。キミの傷と比べたら大したことない」

イズミはダーシェンカの姿を見やり、微苦笑する。

ダーシェンカは体中に——首から下全部と言っていいほど——包帯が巻きつけられていた。

ダーシェンカの負った傷は、生身の人間ならばショック死しているほどのもの。だが、リビングデッドには致命傷の一手手前という程度で、キリコの迅速な手当によってことなきを得ていた。

エーテルを注ぎ込み、身体組織の復旧を終えてしまえば、リビングデッドとしては完治も同然で、包帯もあまり意味をなさないのだが、傷が塞がるまでは巻いておけという幸也の指示でこのような姿になっていた。

ダーシェンカは何を無駄なことを、と考えたのだが、今にして思えば、傷だらけの姿を見せるよりは、包帯まみれの体の方がイズミを傷付けずに済むという幸也なりの配慮があったのだろう。

ダーシェンカもいまは幸也の判断に感謝していた。

「私は……大丈夫だからいいんだ」

ダーシェンカは白のワンピースから覗く包帯だらけの体を見ながら苦笑した。

「僕も大丈夫だからいいんだよ……それに、頼まれたから」

イズミは微笑みながら言う。最後の言葉は、誰にも聞き取れないほどの声量で。

「大丈夫って……ん？ 何か言ったか？」

「え？ 何も言ってないよ？」

不思議そうに首を傾げるダーシェンカに、イズミはとぼけた返事を返す。

「本当に、大丈夫なんだな？」

黙ってイズミの様子を窺っていた幸也は、念を押すように尋ねた。

イズミはその問いに、力強く頷いた。

「よし。ならついてこい」

幸也は真剣な表情で言い、部屋を出ていく。

幸也につき従う形で、イズミ達も部屋を後にした。

イズミ達が行き着いた先は、病院の屋上だった。

バスケットコート半面ほどの広さの屋上は、割と高い位置にあるらしく、周囲のビルの屋上をいくつか見下ろすことができた。

吹きぬける風も心地よく、照りつける陽光を差し引いても、夏にはなかなか過ごしやすそうな場所だった。

いつものイズミならば、ここでお昼を食べだしたら気持ちいだろうなあ、などと考えていただろう。

だが、今は違った。

緊張した面持ちで、眼前に立っている幸也の背中を見つめている。その額には、びっしりと脂汗が浮かんでいた。

大丈夫とは言ったものの、歩くたびに鈍痛が体を苛み、何度も歯を食いしばることとなった。

だがそれでも、立ち止まるわけにはいかない。ヴェルナールとの戦いは自分自身の問題でもあり、同時に、ダーシェンカの父から託された願いも絡んでいるのだから。

ダーシェンカの父との邂逅が、痛みに浮かされて見た夢なのか、感覚共有の延長で垣間見たものなのかは、どうでもいいことだった。

ヴェルナールを倒せば、全て解決するのだから。

イズミ自身の問題も、ダーシェンカに絡みつく因果も、全て断ち切ってみせる。

そんな覚悟を秘め、イズミは幸也が口を開くのを待った。

「……正直、ヴェルナールはイズミにとって強敵中の強敵と見て間違いないだろう」

幸也は、背中を見せたまま語り始める。

「普通の魔術師ならば、エーテルに限界があるから、ネクロマンサーとして覚醒してしまえば圧倒的エーテル量と力技で押し切れる。だが、ヴェルナールはそれが通用しない。それがどういうことか分かるか？」

幸也は振り返り、並び立っているイズミとダーシェンカを見据えた。

「技術で競り勝つしかない、ということですか？」

首を傾げるイズミに代わり、ダーシェンカが答える。

「それも選択肢の一つではある。だが、そんなことは一朝一夕でイズミに出来るようになる筈がない」

「そもそも、どうやってヴェルナールを消滅させるのさ？ 普通に倒しても何度でも再生するんだろ？ それもその場でじゃなくて、他の場所で。逃げられたら面倒じゃないか」

思案顔のイズミは、独り言のように呟いた。

「逃げることはないから安心しろ。ヴェルナールの体はもう限界に近い。肉体喚起は、出来てあと数回だろう。だから、確実にもう一度イズミを狙ってくる。いや、父さんを狙っていると見るべきかな。大方ヴェルナールはイズミの前には父さんが立ち塞がっているの思ってるだろうし」

幸也は肩をすくめ苦笑し、続けた。

「とにかく、ヴェルナールに勝つ方法はただ一つ。一撃必殺しかない」

幸也は至って真剣な表情で言い切る。

その言葉に、イズミとダーシェンカは同時に首を傾げた。

自分より遥か上の技量を誇る相手に、一撃必殺など望める筈がない。

「ねえ、父さん。本気で言ってるの？」

「本気さ。あ、でも一撃必殺という言葉は適切ではないかもな。いくつかの手数を繰り返しつつ、必殺の一撃で仕留める、と言った方がいいかもしれない」

「……余計に分からないんだけど」

イズミはこの上ないジト目を幸也にぶつける。

幸也はその視線を軽い嘆息で受け流し、微笑んだ。

「まあ、実際に訓練した方が早いかもな。ところでイズミ。お前いま、エーテルが視えてるか？」

幸也の問いにイズミは首を横に振る。

エーテルを視る、ということがどういうことなのか、イズミはいま一つ分からなかった。淡い光がエーテルらしいということは分かったが、どのような条件下でそれが視えているのかが分からなかった。

靄のように見えることもあれば、視界を完全に覆うこともある。

結局のところ、イズミ自身としては自分の何が今までと変わっているのかが分からなかった。

ヴェルナールとの戦いのさなかに感じたエーテルを操る感覚も、あまりに自然に操っていたせいで、どのように操っていたのか覚えていなかった。

「……ふむ。キリコ、どう思う？」

幸也は思案顔をキリコに向ける。

「そうですねえ……正直イズミくんのエーテル可視領域は異常ですからね。脳に負担を掛けないように身に危険が及ばないと視えない、とかですかね。ま、そんな事例は聞いたこともないですけどね」

キリコは苦笑しながら肩を竦めた。

「エーテル可視領域って、なんですか？」

「まあ、エーテルに関する視力と考えてもらって構わないよ。普通の視力がどれほど遠くのものを見渡せるか、なら、エーテルの可視領域ってのは、どれだけ密度の薄いエーテルを見ることができかってことかな？」

イズミの問いに、キリコは即座に解説を加える。

「はあ……異常ってのは、良い方向にですか？ それとも悪い方向に？」

「うん……一概には言えないかな。イズミくんは可視領域が異常に高いんだ。確かにそれは戦闘には有利だけど……あの暗闇を覚えてるでしょ？ あれは、空気中に漂う微量なエーテルも捉えることによって起こるんだ。つまり、普通の視界はゼロになっちゃう」

「一長一短、ってことですか……」

キリコ言葉は、イズミの背中に寒いものを走らせた。

あの暗闇は、とてもじゃないが、心地いいものではなかった。ただ瞼を閉じるのとはまるで違う。陽の光の届かない深海にいるような、とても寂しい、茫洋とした恐怖を感じるのだ。

「まあ、イズミがエーテルを操れなければ話にならない。まずはそこからだな」

暗く顔を俯けたイズミを励ますように、幸也は明るく言った。

「そうだね。やることをやろう」

イズミは心の底に渦巻く不安を振り払うように、力強く、自分に言い聞かせた。

やることをやるとは言ったものの、何をすればいいのか、イズミにはまったく見当がつかなかった。

回避術の訓練、などならばいくらでもイメージがつかめるのだが、魔術の訓練など想像することも出来ない。

エーテルが視えていないこの状況で何が出来るのか、という疑問すら持っていた。

イズミは幸也に、率直に疑問をぶつけてみることにした。

「僕は、何をすればいいのか？」

「簡単だ。まずはエーテルが視えるようにならなきゃいけない。それも、自分の意思で自由自在に。まあ、まずは強制的に見えるようになって貰うけどね」

幸也は意地の悪い笑みを浮かべる。

「そんなこと、出来るの？」

不安げに、イズミは呟く。

イズミの中では、自由自在にエーテルを視えるようにするという事は、幽霊を視えるようにするのと同じくらい難解なことだった。ようは、想像が追いつかないということ。「出来るさ。なんてったってここには人体改造のスペシャリスト様がいらっしゃるんだから」

幸也はニヤリとほほ笑み、傍らに立つキリコを親指で指し示した。

「人体、改造……」

イズミはいかがわしいモノを見る目つきをキリコに向けた。

「おいおい、そんな目で見ないでくれよ。確かに、リビングデッドを作っているという点で、俺は人体改造のスペシャリストだが、なんかイズミくんは間違っただけの想像をしてる気がする」

キリコは苦笑いながら肩をすくめた。

「なにも俺は頭に電極刺したり、腕をドリルにしたりする訳じゃないよ？ ただちょつとだけ人としての限界を越えさせてあげるだけさ」

「……どの道、危ない気がするんですけど」

「まあまあ、案ずるより産むがやすしと言うじゃないですか」

イズミの怪訝な視線を意に介する様子もなく、キリコは優しげな微笑みを浮かべながらイズミに歩み寄る。

「ちよつとごめんね」

キリコはそう言うと、イズミの額に手を当てた。

イズミが、キリコの手の冷やかな感触を感じたのも束の間、頭に衝撃が走った。

激痛ともまた違う、衝撃としか言い表しようのない奇妙な感覚。

「はい、お終い。どう？ 視える？」

呆けているイズミの顔を、キリコが覗き込む。

その言葉に意識を取り戻したイズミは周囲を見渡した。

確かに、視界は一変していた。

屋上にいる全員の体から淡い光が発せられている。それぞれに個性があるらしく、幸也は赤色、雪は白色、ダーシェンカは淡い青色、キリコは金色だった。

そしてイズミ自身は、奇しくも、ダーシェンカと同じ淡い青色だった。

「視え、ます」

イズミは初めてコンタクトを付けたかのような様子で周囲の景色を眺め続けた。

「無事成功みたいです。それじゃ、あとは幸也さん、お願いします。たぶん半日はその術式でもつと思います。運が良ければそのままコツ掴んで、自分で可視領域を調節できるようになるでしょうね」

キリコは微笑みながら言うとその場を離れ、屋上に張り巡らされたフェンスに寄り掛かり、腰をおろした。

「よし。それじゃあ始めるとしようか。基礎やらなんやらは時間が全く足りないので、実戦形式でいこう」

「実戦、形式？」

「そう、実戦形式。父さんをヴェルナールだと思って、イズミとダーシェンカちゃんの二人で掛けてきなさい。無論、本気でね」

幸也は微笑みながら言い、拳を構えた。

ダーシェンカも異を唱えることもなく身構える。

だがイズミはすぐに身構えられなかった。

ヴェルナールを退けたということは、父は確かに強いのだろう。だが、目の当たりにしていない者としては、父に二人掛かりで挑むのは躊躇われた。うち一人がダーシェンカとなればなおさらだ。

「イズミは見えていなかったから分からないだろうが、イズミの父上は強いぞ？ それもかなり」

すっかり臨戦態勢に入っているらしいダーシェンカはイズミを見据えたまま言った。

イズミもその言葉に覚悟を決め、身構える。

ダーシェンカと共闘するのは初めてのことだし、何よりも共闘するなどとは夢にも思っていなかったのだが、緊張はなかった。

これまでの訓練でダーシェンカにみっちり叩きこまれたことは、何も回避術だけではない。そこには、ダーシェンカの呼吸や、思考の癖だって沁み込んでいた。

(なんとか、動きを合わせてみせる)

イズミは胸中に眩き、幸也かダーシェンカが動くのを待った。

最初に動いたのはダーシェンカだった。

地面を力強く蹴り、一步で幸也との距離をゼロにする。そのまま躊躇いのない拳打を幸也の顔面に放つ。

「初手としては悪くない」

幸也は口元に笑みすら浮かべながら頭を振り、ダーシェンカの拳打を避ける。

しかし、幸也が頭をずらした場所にはイズミの拳が迫っていた。

ダーシェンカの動きから幸也の行動パターンいくつかを割り出していたイズミは、正確無比な一撃を幸也に叩き込んだ。

イズミの拳打に体勢を崩した幸也を、ダーシェンカの蹴りが襲う。

幸也はそのまま吹き飛び、屋上のフェンスに叩きつけられた。

フェンスがしなり、けたたましい金属音を上げる。

呆気なく攻撃を喰らった幸也に、イズミとダーシェンカは互いに顔を見合わせた。

こんなハズではない、と。

「ふむ。統率の取れたいい動きだ」

ダーシェンカの一撃を喰らったというのに、幸也は何事もなかったように呟き、拳を構え直す。

「……だが、それだけでは足りないのは分かるよね？」

ニヤリと、幸也は笑った。

イズミは視た。幸也が笑みを浮かべた瞬間に、幸也のエーテルがザワザワと蠢いたのを。

「ダーシェンカ。父さんのエーテルの質、変わったよね？」

イズミは幸也に視線を向けながらダーシェンカに問うた。

「私は魔術無効化を発動させてる時だけしかエーテルをハッキリ捉えることは出来ないんだが……それでも感じる。何か危ない」

そう呟いたダーシェンカの顔には、緊張がありありと浮かんでた。

「どう、する？」

動く様子を見せない幸也を見ながらイズミは呟く。

イズミもある程度の判断能力は付いているが、攻めるとなるとダーシェンカに頼らざるをえなかった。

ダーシェンカの判断力にはまだ劣るというのが第一の理由で、イズミの攻撃手段では相手に致命傷を与えられないというのが第二の理由だった。

「ほら、それ。それじゃ勝てないっての、わかるよね？」

幸也は構えを解き、苦笑しながら肩をすくめた。

そしてそのまま、イズミとダーシェンカに歩み寄った。

「攻撃の基軸は常にダーシェンカちゃん。イズミはあくまで陽動。まあ、よしんばイズミの攻撃が当たったとしてもなんのダメージもないから陽動としての価値は低い。なんならイズミの攻撃なんて回避しなくてもいい」

「それは……そうだけど」

「父さんが二人に望むことは何も統率のとれた動きじゃない。二人がそれぞれに父さんを殺せるぐらいの一撃を喰らわせることだ。ダーシェンカちゃんも無意識のうちに蹴りの勢いを殺していた。安心しなさい、僕はキミの本気の蹴りを喰らったところで死なないから」

幸也はダーシェンカに向かって微笑みながら、自分の胸を叩いた。

ダーシェンカは幸也の言葉におずおずと頷く。

ダーシェンカとしても、なんら魔術を施していない人間に本気の一撃を叩きこむのは抵抗があったようだ。

「それからイズミ。お前は自分がエーテルを視れるという利点を全く活かしていない。いいか？ その能力は意外と役立つんだ。しばらくは戦闘に参加しなくていいから、ダーシェンカちゃんと父さんの訓練を眺めてなさい」

幸也の言葉に、イズミは黙って頷く。

それを見た幸也は満足そうに頷き、ダーシェンカとの戦闘訓練を再開した。

ダーシェンカと幸也のやりとりは、戦闘訓練とは思えないほどの様相をなしていた。何も知らずにこれを見たら、確実に殺し合いをしていると判断してしまうほど、凄絶なやりとり。

ダーシェンカの動きは最初よりも格段に鋭さを増し、ほんの少しかすただけでも肉を削げ落せそうなものと化していた。

対する幸也も全く引けを取っていない。ダーシェンカの動きを最小限の動きでかわしつつ、所々でカウンターを返したりしている。

何よりもイズミを驚かせたのは、幸也がダーシェンカの攻撃を要所要所で受け止めていることだった。

生身の人間には不可能なことを、幸也は軽々とこなしている。

エーテルの視えないイズミならそう判断していただろう。だが、見えているイズミはそう判断しなかった。

冷静に幸也のエーテルを観察し、その原因を探る。

幸也は、ダーシェンカの攻撃が自身の体に触れる寸前に、何か小細工をしている。微かではあるが、幸也のエーテルが打撃点に集まるのを、イズミは見逃さなかった。

だが、幸也が何をしているのかまでは皆目見当がつかなかった。もっとも、魔術の知識に乏しいイズミに術式の解明まで求めるのは、甚だ酷な話なのだが。

「幸也さんが何しているか、分かるかい？」

いつの間にやらイズミの脇に立っていたキリコが口を開いた。

その視線は、イズミにではなく、幸也とダーシェンカに向けられている。

「エーテルが集まってる、というのだけは分かるんですけど……あとは全然」

イズミも戦闘から目を逸らさずに答える。

「今の状態でそれだけ分かれば合格、かな。まあ、ヴェルナールと戦ってたときのキミなら直感で理解したんだろうけど……アレはね、キミがヴェルナールの水晶玉にやっていたことと同じだよ」

「僕がやってたこと？ エーテルのベクトル変更、ですか？」

「そう。ダーシェンカちゃんの攻撃が触れるその刹那に、肉体強化のエーテルのベクトルを変更して力をいなししてるのさ。ま、あんな化け物的な技を使えるのは世界に五人としないんじゃないかな？ 実際に見たことあるのは、幸也さん以外では一人しかいないけど」

キリコはクスクスと笑った。

何が面白いのかはイズミにはよく分からなかったが、幸也が只者でないということは嫌でも理解させられた。

ダーシェンカの拳打をコンマ何秒の世界で捌くなど、イズミには一生出来そうもない。

「父さんが凄いつてのは分かりましたけど……そんな化け物にどうやって一撃を加えろって言うんですか？」

「うーん……本気の幸也さん相手なら一撃なんて望むべくもないんだけど、これは訓練だからねえ。きっと幸也さんはどこかにワザと隙を作り出してるからそこを突けばいいんじゃないかな」

キリコはしばらく考え込んだのち、苦笑いを浮かべて肩をすくめた。

キリコ自身も、幸也に隙は見いだせていないらしい。

それを察したイズミは眉を寄せ、より一層幸也の動きを注視した。

幸也が見ている、と言ったのはエーテルの流れを見るだけでなく、隙を見出せということなのだろう。

だが、見つめれど見つめれど隙は見えてこない。

分かったのは、幸也が状況を常にゼロに保っているということだけ。

ダーシェンカがいつものようにチェックを掛けるための攻撃を仕掛ければ、幸也はそれを巧妙にいなして、攻め込ませない。かといって自分は攻めるでもなく、ひたすらにダーシェンカの攻撃をゼロに戻すことしかしていない。

訓練だから、と片付けることもできる。だが何かが引っかかった。

「……あれは、僕？」

イズミの頭の中で、今の幸也と、ヴェルナールと戦っていたときの自分の姿がぴったり重なった。

戦闘のパターンこそ違えど、ダーシェンカの攻撃に応じ続け攻めに転じない幸也と、ヴェルナールの攻撃を捌き続ける自分の姿は同じものだ。ベクトルの変更という対処法もピッタリ重なる。

「そう、それだよイズミ！」

イズミの眩きを聞き取ったらしい幸也は、眼前に迫ったダーシェンカの回し蹴りを何食わぬ顔で受け止め、満面の笑みを浮かべた。

ダーシェンカが顔を赤らめながらスカート裾をおさえたことに、イズミは思わず意識を持っていかれそうになったが、雪がことの重大性に気付いていないらしい幸也に駆け寄り、ボディブローをかましてくれたおかげで事なきを得た。

幸也は腹を押さえながらダーシェンカに謝罪すると、顔を歪めながらも口を開いた。「ようは、アレだ。今のイズミの能力は、フル活用したところで防戦一方にしかならないということに気付いてほしかった訳だ」

「そんなの口で言ってくれば、」

「口で言ったところで、それがどれほど惨めで役立たずか伝わらないだろ？」

幸也の容赦のない言葉に、イズミは渋々ながらも顔かざるをえなかった。

確かに、百聞は一見にしかず、だ。だが、それでも納得がいかない。

それを知らされたところで、どうしろというのだ。知ったところで、イズミにはどうしよう

もない。ばかりか、今のイズミにはエーテルのベクトル変更もままならないのだ。

むしろ、こんな事を気付かせるよりも先にベクトル変更のやり方でも叩きこんでくれ、というのがイズミの考えたことだった。

「だから、エーテルのベクトル変更なんてみみっちいコトは忘れなさい」

幸也は、本当に、なんてことなく、サラリと、言いきった。

「なっ!? そんなことしたら僕は本当に役立たずになっちゃうじゃないか！」

イズミは幸也の元に歩み寄り、今にも掴みかからんばかりの勢いでまくし立てた。

だが幸也はそれを意に介する様子もなく笑みを浮かべ、続けた。

「イズミは役立たずでいいのさ。覚醒したてのネクロマンサーが、禁忌に手を染めているヴェルナールのような魔術師に対抗できるもんじゃない。奇襲の要はダーシェンカちゃんだ」

「……それじゃあ父さんは、僕は結局ダーシェンカのお荷物ってことを教えたかったのかよ」

イズミは顔を俯け、両拳を、手の甲が痛くなるほどきつく握りしめた。

「イ、イズミ、私はそんなことは思っていない。キミがいるだけで私は……」

「イズミを慰める必要はないよ？ ダーシェンカちゃん。だって僕はまだ一言もイズミがお荷物だとは言っていないもの」

幸也は口元に微笑を浮かべながら、優しく言った。

その言葉に、イズミは顔を上げる。

「どういう、こと？」

イズミの目は微かに潤んでおり、声は震えていた。

イズミのそんな姿に、ダーシェンカは息を呑んだ。

イズミは、自分のことなどこれっぽちも考えていないではないか。普通の人間ならば、こうはなるまい。幸也の容赦ない言葉は、イズミが役立たずだとしても、ダーシェンカがイズミを守ってくれるということの証明なのだから。

それでも、イズミは涙を浮かべている。

それは他ならぬダーシェンカのために。自分の命がどうこう以前に、ダーシェンカ一人に負担を掛けることが辛いと、心の底から思っている。

なぜそこまで単なる道具の自分を気に掛けるのか、などということは、もはや考えなかった。

イズミという少年はこういう存在なのだと、痛いほどに分かっているから。本当に、痛いほどに。

だからダーシェンカは、イズミにそれ以上言葉を掛けず、胸のうちでイズミを守り抜く決意を固め、幸也の言葉を待った。

イズミとダーシェンカが注視する中で発せられた幸也の一言は、恐ろしく単純で、恐ろしく難解なことだった。

幸也の発言内容に則した訓練もあつという間に最終日の二日目を迎えていた。

二日目の今日、一日中ぶっ通しで訓練を受けたイズミは、今にも死にそうな表情で病室のベッドに倒れ込んだ。

「つか、れた……」

枕に顔を埋め、イズミは呟く。死にそうな表情である反面、声は達成感が滲み出ていた。

肉体的には疲労の限界値まで追いつめられたが、自分にもやれることがあるということは、

イズミにとって何よりも救いとなっていた。

ダーシェンカはそんなイズミに苦笑しながら、ベッドの横に置かれたパイプ椅子に腰を下ろす。

陽はすっかり落ち切り、病室を照らすのは蛍光灯の明かりだけだった。白く無機質な光だというのに、やけに優しく感じられる。

「……大丈夫か？」

顔を埋めたままのイズミを見やり、ダーシェンカが声を掛ける。

「大丈夫だよ。まだ少し頭がズキズキするけど……最初よりはだいぶマシになった」

イズミは埋めていた顔を上げ、ダーシェンカに苦笑を向けた。

その表情に、ダーシェンカも安堵の微笑を洩らす。

実際のところ、幸也がイズミに貸した課題は苦笑で済ませられるほど生易しいものではなかった。

幸也がイズミに貸した課題は、二つ。

ダーシェンカもそのうちの一つをこなしたのだが、リビングデッドであるダーシェンカと、生身の人間であるイズミとでは、苦勞の度合いが違っていた。

二人がともに課された課題は、感覚共有。

それも、アルシェラとの戦いで発揮されたあやふやなものとは比べ物にならないほど、精緻せいちなレベルの感覚共有。

感情ではなく、視覚を共有するのが幸也の課した課題だった。

確かに、戦闘を眺めているイズミの視界と、戦闘を行っているダーシェンカの視界を共有できれば、状況把握の精密度は格段に増す。なんと言っても、俯瞰と凝視を同時に行え、

さらには、イズミが視ているエーテルの流れを、ダーシェンカも視ることが出来るようになるのだから。

しかし、それには代償が伴う。二つの視覚情報を一つの脳で捌くのだ。その負荷は生半可なものではない。下手をすれば脳が壊れてしまう。

そのリスクをキリコの魔術で下げられるまで下げて感覚共有の訓練は行われたのだが、それでも、イズミを襲った頭痛は気を失いかけるほどのものだった。

それでもイズミは泣き言一つ吐かず、訓練を終えた。

「ちゃんと、出来るかな？」

イズミは体を起こし、窓の外に広がる星空を眺めながら、ポツリと呟いた。

その出来る、というのが感覚共有を指していないことを、ダーシェンカは即座に察する。

感覚共有は、キリコの助けがなくても、問題なく発動できるようになっているから。

イズミが出来るかどうか不安なのは、イズミにのみ課された二つ目の課題のことだ。

「出来るさ。イズミなら」

ダーシェンカはイズミの視線の先を見ながら、静かに答えた。

幸也がイズミに課した二つ目の課題は、永久機関を使用した莫大な量のエーテル放出。

莫大な量のエーテルを一秒以内に放出する、という課題。

イズミは意外にも、その課題をいくつかコツを聞いただけで、いとも容易くこなした。

魔術師としてもネクロマンサーとしても才能のないダーシェンカとは違い、イズミはその方面の才能が秀でている、というのはキリコの弁。

それでもイズミが不安に駆られているのは、ヴェルナールとの戦いにおいて、それを行うのが最重要局面だからだ。

イズミの大量のエーテルをヴェルナールに叩き込み、ヴェルナールのエーテル全てを消し去る。

言ってしまうと、止めの一撃がイズミに課された課題だった。

ダーシェンカは、イズミがその一撃を成功させられるかどうかということよりも、イズミが一人の人間を消し去らなければならないということの方が気掛かりだった。たとえそれがヴェルナールのような、人の道を外れた存在だとしても、イズミの心に重くのしかかってしまうだろう。

本来ならばダーシェンカがトドメを請け負うのだが、不完全とは言え不老不死のヴェルナールに限っては、それが不可能だった。

不老不死者を殺す方法はただ一つ。不老不死者のエーテルを完全に消し去ること。つまりは膨大なエーテル量をもつネクロマンサーにしか為し得ない業。

ネクロマンサーの魂によって不老不死をえた者が、ネクロマンサーによってのみ殺されるというこの上ない皮肉。

それがどうにも、今のダーシェンカには憎らしかった。

「ねえ、ダーシェンカ」

イズミは星空から視線を戻し、ダーシェンカを見つめた。

「ん？ なんだ？」

「僕がキミのお父さんと話したことがある、って言ったら、信じてくれる？」

「な……信じられないが、信じよう」

ダーシェンカは目を見開いたあと、口をとがらせながら呟いた。

「何それ、信じてるのかどうかよくわかんないよ」

イズミはクスクス笑う。

「その発言は信じられないけど、イズミはその手の嘘はつかないと信じてるからな。その手の冗談なら言いかねないが……」

「安心して。嘘でも冗談でもないから。……ただ、夢の話かもしれないってのはあるんだけどね」

「夢の、話？」

「そう。夢かもしれない話」

イズミは微笑み、自分の身に起こった不可思議な出来事をダーシェンカに包み隠さず語った。

聞き終えたダーシェンカはただ呆然と目を見開き、何か言葉を発そうとはするものの、口がパクパクと動くだけだった。

イズミの語った内容はあまりにも正確すぎたのだ。

シャンデリアが照らし出す父の書斎、姉のラズの目を盗んで、父にお話をせがんでいた幼いダーシェンカ。

イズミの語ったことは何もかも、ダーシェンカの記憶そのままだった。

ダーシェンカがイズミに家族のことを語った事は一度もない。ましてや、父の書斎についてなど語る筈がない。

それでも、イズミの言ってることは正確だった。

「もし、ダーシェンカの記憶を勝手に覗いちゃったんだったら、ごめん。でも、僕はダーシェンカのお父さんとの会話が夢であろうとなかろうと、ヴェルナールを“殺す”ことに迷いはないよ」

イズミは“殺す”という言葉に強調した。

イズミの中でもやはり、考えざるをえないところだったのだろう。覚悟を決めてリビングデッドになったダーシェンカとは違い、平和な時間を過ごしてきたイズミにとっては人を“殺す”ということは多くの苦痛を伴うことだ。

それでもイズミは“倒す”などではなく“殺す”という言葉を使った。

「イズミ、キミは、どうして、そこまで優しいんだ……？」

ダーシェンカはところどころ言葉を詰まらせながら、言った。

「優しくなんか、ないよ。ヴェルナールを殺すことだって、結局は僕自身のためってことで片付けられるんだから……迷いが無いっていうのも、きっと嘘だよ。本当に迷いが

なかったら、こんな話、ダーシェンカにしないもの」

イズミは弱々しく微笑む。

「迷って、当然だ。イズミは私と違ってまっとうな人間なんだから」

ダーシェンカは、そっとイズミの手に自分の手を重ねる。

イズミの手は、微かに震えていた。

こんな状態でも、イズミはダーシェンカのことを気にかけている。

そのことが、ダーシェンカにとって何よりも嬉しく、切なかった。

「ヴェルナールを殺すという罪を、全て私に押しつけてくれても構わない。私は、最初からアイツを殺すつもりだったんだから」

ダーシェンカはイズミの手をそっと握りしめる。

願わくば、イズミの不安が、罪の意識が消えるように、と。

「それは……やっちゃいけないことだと、思う。だから、ダーシェンカに一つだけお願いがあるんだ」

イズミはダーシェンカの手の上に手を重ね、ダーシェンカを見据えた。

ダーシェンカもイズミを見つめ、イズミの言葉を待つ。

「僕と一緒に、罪を背負ってほしい」

イズミは、静かに、力強く、言った。

ダーシェンカはその言葉に、言葉を忘れた。

言葉を忘れたダーシェンカは、ただ、黙って頷いた。

その返答が、嘘になるということを知りながらも。

第五章 決戦

1

奇襲当日、朝。

イズミ達は病院のロビーに集合していた。

病院のロビーとは言っても、違法・無許可というだけあって、一般の病院とは異なり、オフィスビルと同じような様相だった。

ブロンズで出来た幾何学的な彫像や、観葉植物がポツリと一つ置いてあるだけで、他には上に上がるエレベーターと外に出る自動ドアしかない。

「それじゃ、行ってくる」

イズミは横に並んだダーシェンカとともに、両親とキリコに向かって軽く頭をさげた。

その口調は、学校に行くときに交わすモノとなんら変わらない。

普段の表情と変わらないイズミに対して、送り出す者達の顔はどこか重々しかった。あの常にどこか飄々とした雰囲気醸し出している幸也でさえ、口を固くつぐみ、押し黙っていた。

「気をつけて、行ってくるのよ」

雪はイズミとダーシェンカを交互に見やり、どこかぎこちなさを感じさせる微笑みを浮かべた。

イズミは雪の言葉に黙って頷くと、踵を返し、外に歩み出る。ダーシェンカもそれに続いた。

「……しかし、よく黙ってられましたね。幸也さん」

二人の姿が見えなくなったのを確認したキリコは息を吐き出し、隣に立っている幸也を見上げた。

キリコの視線を受け止めた幸也は真剣な表情を崩し、肩をすくめ苦笑した。

「余計なことは言うなっていう母さんの命令なんだから仕方ないさ」

「私は別に一言も口を聞くなとは言ってますよ？ 何か思いつかなかったんですか？ 息子に掛ける言葉」

雪は呆れ果てたとばかりに深いため息を吐き出す。

「考えてはみたけど……出てこなかった」

「だと思いましたよ。どうせ思いついたのは下らない言葉ばかりでしょうね」

雪はお手上げのポーズをする幸也に、肩を落としながら微笑み、続ける。

「まあ、言葉を掛けようが掛けまいがあの子たちはやると信じてますけどね」

イズミ達が歩いていった方向を遠い目で見ながら、雪はポツリと呟いた。

「でなかったら、母さんがヴェルナールを始末しに行きそうだもんね」

「ええ、当然です。誰がなんと言おうと、ね」

雪は悪戯な微笑みを浮かべながら呟いた。

そんな雪の言葉に、幸也とキリコは顔を見合わせ苦笑した。

雪は、こう言ってるも同じなのだ。

たとえ魔術師全てを敵に回しても息子を守る、と。

それを思えば、必死に自衛の手段を身につけたイズミはなんと親孝行なのだろう。

「まったく……最高に恐ろしくて面白い夫婦ですよ、あなた達は」

キリコは肩をすくめながら呆れたように微笑んだ。

2

眼前にそびえ立つ巨塔を前に、イズミは固い唾を飲み込んだ。

なんてことはない、市街を歩けばなんとなく視界に入り、単なる一風景としか映らないちょっとした高級ホテルだというのに、今のイズミに対しては重々しさすら感じさせた。

ヴェルナールがいるという、ただそれだけの理由で。

「気負う必要はない。訓練したとおりにやればいい」

表情を固くするイズミに、ダーシェンカは優しく微笑みかける。

相も変わらずダーシェンカは体中包帯だらけだったが、目をとめるものは誰ひとりしていない。

それはまさしく、ヴェルナールが健在ということの証左。

それを再認識しながらも、イズミは柔らかい笑みをダーシェンカに返す。

「分かってる。しくじる訳にはいかないからね」

イズミはそう言うと、ホテルの最上階を見上げた。

あそこにヴェルナールがいるということは、幸也達の調査で確認済みだったのだが、イズミは自分の力でそれを確認した。

エーテルを周囲に飛散させ、レーダーの役割を果たさせるという能力。訓練のさなかで付随的に身につけたものだったが、これが案外役に立つ。

半径三百メートル圏内なら、特定の人物を探し出すことができる。もっとも、イズミの力では、特殊なエーテルを纏う魔術師の類しか探り当てられないのだが。

「急ごう。弱ってるとは言っても、ここまで近づいてしまえば、ヴェルナールも勤付くだろう」

ダーシェンカの言葉に頷いたイズミは、しっかりと足取りで、ヴェルナールが待ち受けるホテルに足を踏み入れた。

ホテルのロビーは平時と変わらず、宿泊客や従業員がせわしなくいきかっていた。

イズミとダーシェンカはその中を、少しだけ警戒しながら進んでいく。だが、周囲の人間たちは、街中の人々と同じように、イズミとダーシェンカを不自然に避けるだけだった。

「父さんの、言った通りだね」

周囲の人間を横目に見ながら、イズミは呟く。

幸也の見立てでは、ヴェルナールは余計な小細工はしてこないということだった。向こうとしても役に立たないモノのために無駄なエーテルは消費したくないということなのだろう。

「そうだな。だが、油断しない方がいい」

ダーシェンカはエレベーターのスイッチを押しながら、陰しい表情で呟く。

ゆっくりと、エレベーターの扉が開いた。

「シューティングゲームとかだと、エレベーターからゾンビが飛び出してきたりするんだけどね」

イズミはエレベーターからゆっくりと降りてきた人の好きそうな老夫婦を見やり、苦笑

した。

「そんな冗談が言えれば上出来だな。あとは、ヴェルナールの部屋までエレベーターが無事にたどり着くことを祈ろう」

ダーシェンカはエレベーターに乗り込みながら苦笑を返した。

イズミもダーシェンカに続き、エレベーターに乗り込む。

そして、十階のボタンを押した。

ヴェルナールがいる階はそれよりさらに上の十三階なのだが、十階より上のスイートルームがある階に行くためのボタンは付いていない。十階でエレベーターがいったん停止した時に、コンソールにパスコードを打ち込むことで、それより上の階に行けるという仕組みになっている。

無論、幸也の手引きの元、パスコードは入手済みだ。

そこまで手伝っても大丈夫なのか、という疑問は当然浮かんだのだが、幸也曰く「ヴェルナールから助けてしまったことと比べたら、大したことはない」だそうだ。

そんな幸也の取り計らいに感謝しているうちに、エレベーターは十階で一旦停止する。

イズミは教えられたとおりのパスコードをコンソールに入力した。特にエラーが出ることもなく、エレベーターは再び上昇し始める。

「それじゃ、予定通りに」

イズミはダーシェンカに向かって言うと、瞼を閉じた。

ダーシェンカもイズミに習う。

精神を極限まで集中させ、二人の間にあるエーテルの繋がりを認識する。その繋がりにさらに意識を集約させていく。

(繋がった……！)

イズミが心で叫び、目を開けると、ダーシェンカが目を開けるのは、寸分違うことがなかった。

開けた視界は、これまでと一変している。二人が見ている光景は、まだ大差のないものだからそれほど違和感はないのだが、視野が格段に増しているというのは確かだった。

イズミはそれを確認しながら、今度はエーテルの可視領域を調節する。高すぎてもダーシェンカの視野を阻害するだけだし、低すぎてもなんの役にも立たない。絶妙なさじ加減が要される作業だったが、イズミは難なくそれをこなす。

エレベータの扉の外にいる人間の位置さえも、大まかではあるが分かるようになった。

そうして、エレベーターは目的の十三階に停止した。

チーン、とスイートルームには釣り合わない音が鳴り響き、扉がゆっくりと開く。

扉が開くと同時に、ダーシェンカが力強く飛び出した。

視界が激しく揺れ動くが、訓練で耐性を付けたイズミは慌てなかった。

ダーシェンカとは対照的に、ゆっくりとエレベーターを降りる。

そして、ゆっくりと、忌々しいモノを見る視線を、対象へと向けた。

「おやおや、礼儀知らずな御客人だ」

繰り出されたダーシェンカの回し蹴りをバックステップでかわしたヴェルナールは、さして慌てる様子も見せずに呟いた。慌てる様子がないどころか、その佇まいには余裕すら感じられる。

ヴェルナールに回し蹴りをかわされたダーシェンカは素早く飛び下がり、イズミの横に戻る。

「自分の命を狙うようなヤツに礼儀を通せるほど、心が広くないのでね」

ダーシェンカが戻った事を確認したイズミは一步前に踏み出し、不遜な笑みを浮かべた。

本来ならば口もきかずに状況把握に努めたいイズミではあったが、多少なりとも牽制の意味を込めて口を開いた。

前回の戦いよりは格段にイズミの能力が向上しているとはいえ、ヴェルナールの実力が上回っているという事実は揺るがない。

それを補うために、多少のブラフは必須だった。

「ずいぶんといいいお部屋にお住まいじゃないか。あなたには薄暗い地下墓所カタコンベがお似合いだと思うが？」

イズミは悠然と部屋を見渡しながら肩をすくめた。

事実、ヴェルナールの住まう部屋はあまりに豪勢だった。十一・十二階のスイートルームとも異なり、十三階は、一階層まるまるがヴェルナールの部屋となっている。

外に面したところは全面ガラス張りとなっているらしく、見晴らしもよさそうだった。もっとも、今は窓全てに遮光カーテンが張り巡らされており、室内を照らしているのは無機質な蛍光灯の光だけだったが。

「カタコンベは少々住み飽きてね。たまにはこういう陽気なトコロもいいだろうと思ってさ」

ヴェルナールはイズミの安い挑発に乗ることもなく、ミイラじみた顔に苦笑を浮かべた。

「遮光カーテンを閉め切っというてよく言う。まあ、どうでもいいか。とりあえず、あんたを殺さなきゃ、僕が殺されちゃうらしいんでね……その命、貰います」

イズミは、感情を込めずに滔々と語る。

「ふん。こちらとしても、キミが来てくれたことはありがたい。何と言っても、不死殺しに挑む前に完璧な不老不死が手に入れられるのだからね」

ヴェルナールはニヤリと笑い、手をゆっくりと掲げた。

それに呼応し、部屋のあちらこちらから水晶玉が浮かび上がる。その数は、街で見

せたモノの比ではなかった。

イズミはその光景に少しだけ気圧されながらも、たじろぐ様子は微塵も見せなかった。ばかりか、無数の水晶玉に一瞥をくれ、あざ笑うように鼻を鳴らした。

(怖いくらい、予想通りの展開だ)

イズミは胸中に眩き、水晶玉が飛びかかってくるのを待った。

ヴェルナールは掲げていた腕をスッと下ろす。

同時に、無数の水晶玉がイズミとダーシェンカ目掛けて飛来した。いや、正確には全て、ダーシェンカに向かっている。

「イズミ、頼む」

ダーシェンカは回避動作を取ることもなく、ヴェルナールを見据えたまま眩いた。

その言葉にイズミは黙って頷き、周囲に自分のエーテルを振りまいた。そして、水晶玉一つ一つのベクトルを修正する。

イズミは払い落すでもなく、全ての水晶玉のベクトルを自分自身に書き換えた。

全ての水晶玉がダーシェンカを避け、イズミに襲いかかる。止まる気配は、ない。

「なっ!? 馬鹿なっ!」

ヴェルナールは目を見開き、慌てて水晶玉のベクトルを、ダーシェンカに再変更する。

だが、ダーシェンカは水晶玉が自分の脇を通り抜けていくのと同時に地面を蹴り、ヴェルナールの眼前に迫っていた。

「馬鹿じゃないのか?」

ダーシェンカはヴェルナールに向かって冷たく言い放つと、鋭い拳打をヴェルナールの左肩に叩きこんだ。

ただの拳打とは言っても、リビングデッドの放った一撃となれば威力がまるで違う。

それは、千切れ落ちたヴェルナールの左腕が証明している。

ダーシェンカはヴェルナールにさらなる一撃を加えることもなく、そのまま前方に飛んだ。

取り残されたヴェルナールに、無数の水晶玉が襲いかかる。そのすべてが、ヴェルナール自身がダーシェンカに仕向けたもの。

「くっ!」

ヴェルナールは忌々しげに顔を歪め、残った右腕を振るって水晶玉を地面に払い落した。

「無様だな、ヴェルナール」

イズミは体中から沸き起こりそうになる震えを必死に押さえつけ、払い落された水晶玉を睥睨しながら吐き捨てた。

ギリギリのところで戦っていると悟られてはいけない。あくまで、淡々と圧倒しなければいけない。少なくとも、最初のうちは。

イズミのして見せたことは至って簡単だ。ヴェルナールが最初にダーシェンカを潰し

に掛ることは予想がついていた。だから、ダーシェンカの周囲にエーテルを多めに配置し、空間把握の精度を向上させた。

あとは、その空間に入り込んできた水晶玉に込められたエーテルのベクトルを、地面にではなく、自分自身に向けるだけ。

ヴェルナールも水晶玉が払い落されることは予想出来ても、イズミに変更されるとは予想できなかっただろう。

だから、イズミを殺すわけにはいかないヴェルナールは慌てて水晶玉のベクトルを変更したという訳だ。

ダーシェンカはその隙を逃さず、見事にヴェルナールの片腕を落として見せた。

すべて、筋書き通り。

幸也が役立たずと切って捨てたエーテルのベクトル変更ではあったが、使いようによつては役に立つ。

例えば、エーテルのベクトル変更を基軸にヴェルナールに傷を負わせ、あたかもこれで勝負を乗り切る、と思わせたりするのに。

「……少しはやるようになったじゃないか。少年」

イズミとダーシェンカに挟まれる形になったヴェルナールは、二人を交互に見やりながら呟いた。

「なに、簡単な詰将棋みたいなもんですよ」

イズミは微笑み、肩をすくめた。

そう。イズミがやったことは詰将棋に限りなく近かった。

ヴェルナールの操る水晶玉は、一見すると自由自在に飛びかかって来るように見えるが、実際はそうではない。あらかじめ定められたコースに従い飛ぶのだ。途中で変更できるにしても、またコースを定めなければいけない。要は“少しだけ”便利な弾丸に過ぎない。

だから、飛来するコースを数手先まで読み、コースを書き換えていけば相手に一杯食わせることもできる。

幸也は笑いながら「まあ、ちょっとだけデンジャラスなテニスだね」と言っていたが。

案の定ヴェルナールはイズミの球を返すことが出来ず、地面に落とすという選択をした訳だ。

「……まったく、私はキミを甘く見過ぎていたようだ。愚かしいな、本当に」

ヴェルナールは顔を俯けて呟き、クツクツと喉を鳴らし始めた。その音は徐々に激しさを増し、高笑いの域に達する。

その狂気じみた様に、イズミとダーシェンカは息を呑む。

この展開も、予想通りではある。慢心を突かれて遅れを取ったヴェルナールが猛り狂うという展開。

むしろそこからが真の意味でヴェルナールとの戦いなのだが、イズミは恐怖を感じずにはいられなかった。

「よかろう。殺すつもりでお相手しよう」

ヴェルナールは俯けていた顔を上げた。そこにはもはや、なんの感情も宿っていなかった。

ヴェルナールの言葉は、事態が幾通りか想定されたパターンの中でも最悪の部類に移行したことを示していた。

ヴェルナールがイズミを殺傷することを厭わないとなれば、ダーシェンカを前面に押し立て、イズミは後方支援に徹するという理想の形が崩れてしまう。

必然的にイズミは、傷を負った体を動かさなければならないということだ。

最悪のパターンを想定しながら訓練してきたとは言っても、実際にヴェルナールを相手に、どれだけ動けるのかという不安はあった。

「最初からそうこないから片腕を失うんですよ？」

それでもイズミは心の中でのたうち回る恐怖を押さえつけ、あくまで不遜に言い切った。

イズミが固めた覚悟は、こんなことで揺らぐほどちやちなものではない。たとえ、恐怖が湧きおころうが、絶望が押し寄せようが、退きはしない。

「腕？ ああ、そういえば千切れ飛んでいたね」

ヴェルナールは床に転がった自分の腕をつまらなそうに眺め、続けた。

「それに、無いのなら……造ればいいじゃないか」

ヴェルナールは不敵に微笑んだ。

ヴェルナールが微笑むと同時に、失った腕の部分にヴェルナールのエーテルが収束していく。

ヴェルナールの闇を映したような漆黒のエーテルがみるみる腕を形作っていく。そしてそれは最終的に、質量を持った腕となった。

「……肉体、喚起」

イズミは先程までと寸分違うことないヴェルナールの腕を見やり、呆然と呟いた。

部分的に肉体喚起が出来るということは、幸也から前もって聞かされていたし、ヴェルナールがそれを使ってくることも想定はしていた。

それでも、目の当たりにした衝撃は大きかった。なんと言っても、無から有が生まれる瞬間を目撃してしまったのだから。

「これで、片腕を失った失態はチャラだ」

ヴェルナールは、感覚を確かめるためにか喚起した左腕をグルグルと回している。

「まあ、魔術師に腕なんて不要なんだがね……！」

ヴェルナールは怒りに顔を歪めながら吠えるように叫ぶ。

叫ぶと同時に、部屋中に転がっていた水晶玉が跳ね上がり、イズミとダーシェンカに

襲いかかった。その速度は、目視不可能な域まで達している。

それでもイズミは慌てない。周囲に振りまいたエーテルで水晶玉の群れの動きを察知し、

コンマ以下の速度でベクトルを書き換えた。少し離れたダーシェンカに迫る水晶玉のベクトルさえも、変更してみせた。

「……コレはもう通じないと、言われなきゃ分からないんですか？」

地面に余すことなく払い落した水晶玉を見やり、イズミは悠然と呟いた。

不遜な口調はなんとか保つことができたが、額から流れ落ちる一筋の汗だけはどうにもならなかった。

イズミが口にしたことは嘘ではない。水晶玉を何千何万と差し向けられようが、捌き切ることはできるだろう。だがそれと、なんの圧迫感を感じることもなく作業がこなせるかという話は別だ。

ミスしなくなるまで訓練を積んでいようが、エーテルの書き換えにはプレッシャーが掛る。

「ほんの数日でここまで成長するとは……ネクロマンサーの覚醒とはかくも恐ろしいものなのか。だが、私の敵でないことには変わらない」

ヴェルナールがニヤリと笑った。同時に、部屋中の水晶玉が再び浮かび上がる。

先ほどまでと、なんら変わらない動き。それでもイズミは警戒を強めた。

ヴェルナールのエーテルの質が変わったのだ。絶望すらも感じさせるような、重厚な漆黒。間違いなく、ベクトル変更し損じるようなエーテル量が部屋中の水晶玉のいくつかには込められている。

だがそれは、訓練前のイズミなら、という話だ。今のイズミになら書き換えられないレベルではない。あくまでも、一次元の魔術ならば、という条件が付きだが。

「なに、死にはせんさ。せいぜい瀕死だよ」

ヴェルナールは喉をクツクツと鳴らしながら愉しそうに言い、指をパチリと鳴らした。

部屋に指が鳴る音は響かなかった。代わりに、凄まじい爆音が響き渡った。

音だけでなく、衝撃が部屋中を駆け回り、窓という窓は甲高い音とともに碎け散っていった。部屋中の装飾品も、原形を微かにとどめる程度まで破壊されている。

「……ほう。今のも防ぐか」

ヴェルナールは目を細めながら呟いた。

その視線の先には、地面に片膝をつきながらも、確かに意識を保っているイズミと、ヴェルナールからイズミを庇うようにダーシェンカが悠然と立っていた。

「今のは、かなり危なかった」

イズミはゆっくりと立ち上がり、ヴェルナールを見据えた。

イズミの服は所々破れ、焦げ付いていた。体のあちこちにもかすり傷が走っている。

一方のダーシェンカは全くの無傷だった。

「また、道具を庇ったのか？ 愚かしいな、少年」

そんな二人の様子を見比べヴェルナールは、つまらなそうに鼻を鳴らす。

「本当に愚かしいと思っているならば、愚かしいのはあなただよ。ヴェルナール」

イズミは体中に纏わりついた埃を叩き落としながら、つまらなそうに吐き捨てた。

そして、感情の籠らない——正確には、努めて籠っていないように見せかけた——表情でヴェルナールを見据えた。

「僕じゃ、あなたに決定打を放てない。だからダーシェンカを庇うのは当然でしょ？」

イズミは肩をすくめて微苦笑する。

それは、あらかじめ設定された通りの言動。ヴェルナールを少しずつ、しかし確実に破滅へと追いやるための。

先ほどヴェルナールが水晶玉を媒体として雷——一瞬のことで爆音としか感ぜられなかったが——を放つ二次元魔術を発動させたとき、イズミはすぐさま自分とダーシェンカの周辺にエーテルを配置し、主にダーシェンカに迫る雷のベクトル変更を努めた。イズミの加護によって雷の脅威から逃れたダーシェンカはイズミの元に駆け寄り、雷によって砕けた家具の類がイズミに襲いかかるのを防いだ。

その程度の二次元魔術ならば完全に防ぎ切ることも不可能ではないのだが、イズミはあえてそれをしなかった。

すべてはヴェルナールの油断を誘うために。

ヴェルナールはいまだ実力の底を見せていない。なんだかんだと言いながらも、自尊心の強いヴェルナールは、格下のイズミとダーシェンカ相手に本領を発揮すること渋っている。それは、手札を隠したいなどという計算じみたものではなく、ヴェルナールの本質から来ていることだった。

ならば、そこを突かない手はない。

イズミ達の計画は、ヴェルナールの慢心を突き、イズミが止めを刺すということだった。

今まで取ってきた全ての行動は、最後の一撃への布石に過ぎない。

布石を盤石のものとするためには、ダーシェンカが積極的に攻めなければならない。

それこそ、ヴェルナールを殺せる一撃があるかのように。

「ふむ。確かにリビングデッドは攻撃の要だ。だが、先の戦いでオルリックの娘は使い物にならなかったではないか」

ヴェルナールは顎をさすりながら悠然と呟く。

「イズミが成長したように私も成長しているのだよ、ヴェルナール」

ダーシェンカはそう言い、ゆっくりと拳を構えた。

拳は軽く握られ、ほとんど力は込められていないようだった。肩にも全く力が入っていないように見える。

「ふん。道具が成長できるわけがないだろうに。よもやまだ自分を人間と思っているの

ではあるまいな、オルリック」

「お前の言うとおり、私は道具に過ぎない。だがな、道具だって改良は出来るだろ？」

ダーシェンカは不敵に笑い、地面を力強く蹴った。

今までとなんら変わらない速度に、変わらない軌道。それでも、明らかに異なっているモノが、一つだけあった。

それは、視覚情報。

今のダーシェンカには、イズミが捉えている視野もある。ヴェルナールのエーテルは勿論のこと、イズミが周囲に張り巡らせたエーテルによる部屋全体の姿もある。

それだけで十分心強いというのに、加えてイズミの援護もある。

そのおかげでダーシェンカは攻撃に集中することができた。

ダーシェンカはヴェルナールの間合いに潜り込み、顎の先目掛けて鋭いアッパーを放つ。

それは当然の如く回避されてしまうのだが、ダーシェンカは気にも留めない。そのまま何度か拳打や回し蹴りを放ちヴェルナールを翻弄していく。

「ッ！ 小賢しいわ！」

痺れを切らしたヴェルナールは舌打ちしながら声を張り上げる。

同時に、ダーシェンカの周辺に水晶玉が出現した。

浮かび上がったのではなく、出現。無から有の発露。それはまさしく、四次元魔術の一つだった。

「砕け散れ！」

ヴェルナールが叫ぶと同時に、爆音とともに激しい稲光がダーシェンカを包み込んだ。いや、ダーシェンカを中心として、部屋中が稲光に包まれた。

その雷に込められたあまりのエーテル量に、イズミの視界も真っ暗になる。だが、イズミは慌てなかった。慌てないどころか、ダーシェンカを襲った雷のベクトル変更すらも行わなかった。

それでも。

稲光が止んだ室内には、無傷のダーシェンカが悠然と佇んでいた。

「やっぱり馬鹿だな。お前」

ダーシェンカは、ヴェルナールの腹部に鋭い回し蹴りを叩きこみながら吐き捨てた。

ヴェルナールの上半身と下半身は無様に千切れる。

地面に叩きつけられる数瞬の間ヴェルナールは、呆気にとられた表情でダーシェンカを見つめていた。

「な、ぜ……？」

地面に叩きつけられたヴェルナールは虚空を見つめたまま呆然と眩く。

ダーシェンカはそんなヴェルナールを追撃することもなく、ヒョイと地面を蹴り、イズミの元に舞い戻った。

ヴェルナールは呆然とした表情のまま、四次元魔術によって下半身を再喚起し、立ちあがった。

片腕だけの喚起とは異なるのか、その表情には疲労が色濃く滲み出ていた。

「……へえ。てっきりアメーバのように二体が増えるのかと思ったら一体だけなのだな」

ダーシェンカは立ち上がったヴェルナールに冷たい視線をぶつけながら吐き捨てた。

イズミのソレとは違い、ダーシェンカの言葉は演技でも何でもなく、心の底から吐き出されているものだった。

「……そうか。すっかり失念していたよ。貴様には魔術無効化という虎の子があったのだったな」

ヴェルナールは顔に手を押しあてながら、呻くように声を漏らした。

手を顔にきつく押し当てたまま、ヴェルナールはクツクツと笑い始める。

その様は、余りに狂気じみており、イズミの背筋は微かに震えた。

「確かに、この私といえども二次元魔術に魔術無効化を施すことはできないし、仮に一次元魔術で試みようとも、少年にことごとく打ち破られる。本当に、キミたちには驚かされてばかりだ。だがそれもここまで」

ヴェルナールは肩で呼吸しながらも、はっきりと宣告する。

その言葉に、イズミとダーシェンカは息を呑んだ。

二人はヴェルナールがいかに大仰なセリフを吐こうが、たじろがない覚悟の下にいた。それでも僅かな恐怖が沸き上がるのは、厳然たる現実が目の前に喚起されようとしているからに他ならなかった。

イズミとダーシェンカの前に、ヴェルナールのドス黒いエーテルが渦巻いていく。エーテルは密度を増していき、凄まじい速度で集束する。

そしてソレは、最悪のカタチを成した。

身の丈二メートルほどの巨大な犬。いや、大きさだけなら熊とでも言い表した方がしっくりくるだろう。

それでもイズミは犬と判断した。それは、目の前の生物が、聞き知っている空想上の化け物と同じ姿をしていたから。

三つ首の魔犬・ケルベロス。

「……馬鹿、な」

イズミは眼前の光景に、ただ呆然と呟いた。

「馬鹿なことがあるかね。召喚術は四次元魔術のもっともオーソドックスな使用法だよ？」

さて、狩りの時間だ」

ヴェルナールは芝居がかった口調で言うと、ケルベロスの脇腹を思いきり叩いた。

ケルベロスは凄まじい咆哮を上げながら地面を蹴り、ダーシェンカへ体当たりをかました。

ダーシェンカの体は吹き飛ばされ、エレベーターの扉に叩きつけられる。扉はあまりの衝撃に、ひしゃげていた。

ケルベロスは再び地面を蹴り、ダーシェンカに追撃を掛ける。

「ダーシェンカ！」

「心配ない」

イズミの叫びにダーシェンカは平然と答えると、追いつがってきたケルベロスの鼻に鋭い回し蹴りを喰らわせる。

ケルベロスの肉体はリビングデッド並に頑丈なのか、碎け散ることはなかった。それでも確かにのけ反りはした。

「この犬畜生は私が引きとめる。イズミはヴェルナールの相手を頼むっ！」

ダーシェンカは宙高く舞い上がり、ケルベロスに盛大な飛翔回転かかと落としを決めながら言った。

そんなダーシェンカの姿に安堵したイズミは、視線をヴェルナールへと戻す。

「これで二対二だな、少年。ここからはフェアプレーの精神にのっとなって勝負しようか」

ヴェルナールは口元を不気味に歪めながら肩をすくめた。

「フェアプレー、ねえ……まあ、疑問はさておき、僕も全力で行きます」

イズミはため息とともに呟き、精神を研ぎ澄ませた。

ケルベロスとの戦闘に集中し始めたダーシェンカとの視覚共有を断ち切り、エーテルの可視領域を最高レベルまで引き上げた。

イズミの視界は闇に覆われる。正確には、エーテルの光に覆われて何も見えていない状態なのだが、そんなことはどうでもよかった。重要なのは、エーテルの本質が視えているか否かということ。

暗闇の中でエーテルの本質を視ていることを確認したイズミはニヤリと嗤った。その笑みはもはや演技ではなく、本能から漏れ落ちたモノ。

「フェアプレーの精神で……殺し合おうか」

イズミは瞳孔の開き切った瞳をヴェルナールに向けながら断言した。

その表情は、普段のイズミからは想像もできないような酷薄な表情。

多大なエーテルの情報を脳で処理する反動から起こる理性の低下。それがこの表情の原因だった。

すなわち、人間のもっとも原始的な欲求の一つ。

破壊衝動。

「その表情……本当に面白いな、キミは」

ヴェルナールはイズミの表情に気圧されるどころか、その声には恍惚としたものすら感じられた。

「面白すぎて、壊したくなってしまうよ！」

ヴェルナールは目を見開きながら叫んだ。

叫ぶと同時に、イズミに向かって雷が走る。

イズミはさしたる動作を取ることもなく溜息をついた。

雷はあたかもイズミの溜息に退けられたかのように、イズミの脇を通り過ぎていく。

「こんなんで壊せるほど、僕は安くないんですけどね」

イズミは首を傾げながら微苦笑し、ゆっくりとヴェルナールに歩み寄る。

あと半歩ほどでヴェルナールの拳が届くという間合いで、イズミは立ち止まった。

「あなたがケルベロスを召喚したとき、どうして僕が『馬鹿な』って呟いたか分かりますか？ それはね、あなたの壊れかけた永久機関にそこまでの余力があったのか、って驚いてたんですよ。だというのに」

イズミは残念そうに頭を振ると、ヒョイと地面を蹴ってヴェルナールの間合いに滑り込んだ。

ヴェルナールは雷をイズミめがけて放つのだが、ことごとくベクトル変更され徒労に終わる。

「本当に……この程度のエーテルしか残っていないなんて、拍子抜けです」

イズミはゴミに向ける視線の方がまだ温かいのではないかという視線をヴェルナールに向けると、ヴェルナールの腹部に拳を押しあてた。

そして、ヴェルナールに反撃の隙を作らせる間もなく、膨大なエーテル量を自身の永久機関から汲み出し、ヴェルナールに流し込んだ。

イズミのエーテルが、ヴェルナールのエーテルをかき消していき、ヴェルナールの肉体は一瞬の閃光を放ち消え去った。

あまりにも呆気ない幕切れ、それでも、それはイズミとダーシェンカが心から願ってやまないものだった。

それでも、喜びの叫びなどが上がることはなかった。

代わりに漏れ響いたのは。

「……どうして？」

というイズミの呆然とした呟きだった。

イズミの視線の先には、ダーシェンカと凄まじい攻防を繰り広げているケルベロスの姿があった。

ヴェルナールが消滅すれば、ヴェルナールが施した魔術は効果を失う。街の住人の意識操作はもちろん、ヴェルナールが召喚したケルベロスだって消えうせるはずだ。

だというのに、ケルベロスは健在。

イズミは暗闇の中で、ケルベロスのエーテルに目を——正確には脳を——凝らした。

イズミはケルベロスの正体を見抜き、今度こそ額面通りの意味で漏らした。

「……馬鹿、な」

イズミは啞然とした表情で、ケルベロスを見つめた。

「イズミっ！ これはどういうことだ!? なぜヴェルナールを葬ったのにケルベロスが消

えないっ！」

ダーシェンカは唸るような風切り音とともに繰り出されるケルベロスの爪牙をかわしながら叫んだ。

「ソイツが……ヴェルナール、なんだ」

イズミはゆっくりとケルベロスを指さし、ボソリと呟いた。

イズミの言葉にダーシェンカも、顔色を失っていく。

ダーシェンカは普段よりいっそう白くなった顔を、ふいに動きを止めたケルベロスに向けた。

「……ほう。こうも迅速に見破られるとは思わなんだ。よっぽどいい眼を持っているようだな、少年」

ケルベロス＝ヴェルナールはダーシェンカとイズミの視線を一身に受けながらも、気負う様子もなく声を発した。

その声はまさしくヴェルナールのもので、ケルベロスの口からではなく、体全体から響いているような感じだった。

「キミ達には何か奥の手があると踏んで自分の姿を変えて喚起してみた訳だが、まさかあれほどの隠し玉を持っていたとはな、少年」

ケルベロス＝ヴェルナールは楽しそうな声を上げ、ドスの利いた声で「だが」と続ける。

「おそらく先ほど少年が放った一撃がジョーカーにして唯一の切り札。さて、手札を暴かれた以上、キミ達に勝機はあるまい」

ケルベロス＝ヴェルナールの表情が変わることはないが、声音から歪な笑みを浮かべているだろうと推測する。

「……手札を暴かれたところで問題ない。ようはお前にもう一度さっきの一撃を叩きこめばいいだけの話だ」

イズミはさも当たり前のことであるというように言った。

だがその頬には一筋の汗が伝っている。

エーテルの情報処理により理性が低下して気が大きくなっているとはいえ、冷静な判断力は消えていない。

その判断力は再大音量のアラームでイズミに告げている。

目の前の化け物は危険だ、と。

そもそもケルベロス＝ヴェルナールの身体能力は並外れている。ダーシェンカの攻撃でほとんどダメージを受けない肉体強度に、イズミの体程度ならば一撃で肉片に変えられるような攻撃力。

そんな化け物相手に、ダーシェンカならともかく、イズミがどうやって触れればいいのかというのだ。

イズミは幾通りかのパターンを頭に思い浮かべるが、どれも成功率が三十パーセン

トを割っている。

成功率三割ともなれば高いと取ることも出来なくはないが、残りの七割が即死亡を意味するとあつては選択するわけにはいかない。さらに絶望的なことに、ケルベロス＝ヴェルナールの体に触れることができたからとしても、殺し切ることができるかは甚だ怪しい。

それほどまでに、ケルベロス＝ヴェルナールのエーテル密度は高かった。

ヴェルナール本体よりもケルベロスのエーテル密度が高いという時点で、ヴェルナールの企みに気付くべきだったのかもしれない。

それでも気付けなかったのは、ヴェルナールの巧妙な隠蔽だけでなく、イズミの心に油断が生まれてしまっていたからだろう。

それを思いやり、イズミは歯をギリリと軋ませながらケルベロス＝ヴェルナールを睨めつけた。

「二対一ではフェアプレーとはいかないが、いいだろう。ちょっとしたハンデと考えればフェアプレーだ」

ケルベロス＝ヴェルナールは悠然と言い放つと、床がえぐれるほど力強く地面を蹴り、ダーシェンカに飛びかかった。

ダーシェンカは背にしょった壁を蹴ってその直線的な攻撃をかわすと、さらにはケルベロス＝ヴェルナールの背後を取って見せた。

「退がって！」

そのままケルベロス＝ヴェルナールに攻撃を仕掛けようとしたダーシェンカを、イズミが引きとめる。

ダーシェンカは疑問の表情を数瞬浮かべたものの、すぐにイズミの横に戻った。

「魔術無効化はヤツには無駄だよ」

イズミはダーシェンカの不満げに燻ぶるエーテルを感じ取り、淡々と告げる。

「なっ……そうか」

ダーシェンカはイズミの指摘に目を丸めるが、すぐに元の表情を取り戻した。

ダーシェンカは試みようとしたのだ。魔術無効化によってケルベロス＝ヴェルナールにダメージを与えられないかと。あの並々ならぬ肉体強度が魔術によるものならばあ

るいは、

と。
「本当に目ざといな、少年」

ケルベロス＝ヴェルナールはのっそりと顔をイズミとダーシェンカに向けると、どこか楽しそうな声を発した。

「お前のその肉体は肉体強化でも何でもない。“ただ単に”頑丈なだけだ。だからこそ手に負えない」

イズミは無表情のまま吐き捨てるように言う。

だがその実、心の中では勝機をつかむ策を探り続けていた。

ケルベロス＝ヴェルナールの肉体は物理的ダメージをほとんど受け付けない上に、その肉体強度が魔術的強化でない生粋の強靭さであるから、ダーシェンカの魔術無効化によるダメージも望めない。

ようは、戦車を相手に生身で戦わなければいけないというような状況だ。

それでもイズミは隙を見つけ出すためにケルベロス＝ヴェルナールのエーテルを注意深く観察し続ける。

「ダーシェンカ。エーテルの可視領域を最大限にしたまま視覚共有しよう」

イズミはケルベロス＝ヴェルナールに視線を向けたまま、ダーシェンカへ囁くように告げる。

「っ！ しかしアレはイズミに負担が、」

「ダーシェンカにだって負担はかかっているじゃないか。それに、僕のことは気にしないでいい。僕はこの戦いに覚悟をもって臨んでいる。それこそダーシェンカと同じくらい」

不安な表情を向けるダーシェンカに、イズミは付き離すような口調で告げる。

瞳孔が開き切っていることもあり、イズミの表情は冷酷そのもので、その温度は絶対零度に達しているといっても過言ではなかった。

「……分かったよ」

ダーシェンカはイズミの表情に気圧されもせずに苦笑し、肩をすくめた。

どんなに表情がなくても、イズミが何を考えているのか分かってしまうのだ。感覚共有などがなくても、はっきりと。

イズミはこう考えている。

自分がどうなろうとヴェルナールは打ち滅ぼす、と。

イズミの言葉の端からそれを感じ取ったダーシェンカは心の中で強く誓った。

(たとえこの身に換えても、イズミは守る……！)

誓いを立てたダーシェンカは隣のイズミに習い、瞼を閉じた。

瞼を閉じた時間は一秒に満ちるか満ちないほどの僅かな時間。

それでも、二人の視覚は確かに繋がった。

「行こう、ダーシェンカ」

イズミは目を開き、暗闇と色彩が混濁する視界の中でダーシェンカに静かに告げた。

ダーシェンカは力強く頷き、地面を力強く蹴る。

イズミも地面を蹴り、ダーシェンカとは反対方向に駆けだした。

そして、二人はケルベロス＝ヴェルナールを挟む様な布陣を展開する。

視覚共有が最も活きる位置取りにして、自分の身は自分で守らなければならない位置取り。

互いが互いを信頼していなければ取れない布陣を、二人は言葉を交わすことなく選択した。

イズミとダーシェンカの間にある信頼は、互いが絶対に自分の身は自分で守れるという力強いものでは決してなく、相手の身は自分が守ってみせるといふ、信頼と呼べるのか甚だ怪しいモノの上に成り立っているものだったが、それでも二人はこの布陣に一切の迷いも感じていなかった。

「……ふむ、挟み撃ちか。何がしたいのか分からんが無駄なことを」

ケルベロス＝ヴェルナールは値踏みするような視線をイズミとダーシェンカに交互に向け、大儀そうに呟いた。

それでも警戒はしているのか、迂闊に動くようなことはしなかった。

その間にイズミはケルベロス＝ヴェルナールを観察し続ける。

可視領域を最大限まで引き上げながらの視覚共有は、イズミとダーシェンカの視界の差が大きいせいで、脳への負担が尋常なものではないのだが、かまっている暇はなかった。

脳みそをかき回されるような苦痛の中、イズミはケルベロス＝ヴェルナールの綻びを見つけるため思考し続ける。

ダーシェンカも同様のことをしていた。

イズミがエーテル面での綻びを探しているというなら、ダーシェンカは肉体的な面での隙を探していた。

ダーシェンカの役割はただ一つ。イズミの道を作り上げること。

そのためには、止まっているだけでは役不足だった。

「シッ！」

ダーシェンカは短く息を吐き出し、地面を蹴った。

ケルベロス＝ヴェルナールの間合いに潜り込み、痛烈な回し蹴りを放つ。

ケルベロス＝ヴェルナールの体は大きくのけ反るが、これといったダメージは全く見受けられなかった。

その証拠に、ケルベロス＝ヴェルナールはすぐさま、その巨大な牙でダーシェンカを噛み砕こうとした。

ダーシェンカは牙を紙一重でかわし、噛み砕こうと迫った頭の下顎を蹴りあげる。

ケルベロス＝ヴェルナールは大きくのけ反り、たたらを踏んだ。

それを見た瞬間に、イズミの中にある種の違和感が芽生える。

(ヤツは魔術を……使えない?)

イズミは微かに眉を寄せながら胸中に呟いた。

よくよく考えてみれば、ケルベロス＝ヴェルナールはあの姿になってから一度も魔術を使っていない。

イズミのベクトル変更に対抗できないから、という理由も浮かぶには浮かぶのだが、どうにも決め手に欠ける。先ほどまでヴェルナールが仕掛けてきた水晶玉を媒体とした魔術はどれも、手すさびに過ぎない程度のものだった。いわば、イズミの実力を測

っていたにすぎない。

だというのに、ヴェルナールはその上の魔術を発動させることなく今の姿になった。

それが意味するところは、二通り。

ともあれ、それを絞り込むために、イズミは行動を起こした。

力強く床を蹴り、ケルベロス＝ヴェルナールに攻撃を仕掛ける。

無論、拳打や蹴りなどではなく、エーテルの上書きという一撃必殺。

だが――、

「甘いわっ！」

ケルベロス＝ヴェルナールの叫びと同時に繰り出された前足に、イズミは呆気なく吹き飛ばされた。

床に叩きつけられ、反動で何度か体を跳ねさせるハメになった。

体が跳ねて地面に叩きつけられるたびに肩と腹の傷に激痛が走ったが、イズミは苦痛に顔を歪めることはなかった。

ばかりか、地面からのらりくらりと立ち上がったイズミは確かに、笑っていた。

地面に叩きつけられたときにでも切ったのか、額からは一筋の鮮血が滴っていたが、イズミは全く気にしていない。

「気でも触れたか？ 少年」

イズミの不気味な笑顔を目にとめたケルベロス＝ヴェルナールは、あざ笑うように言う。

ダーシェンカでさえ、イズミを呆然と見つめていた。

「やはり僕を殺さないんだな、ヴェルナール。いいや、こう言いかえるべきかな？ 殺せない、と」

イズミは口元にうっすらと笑みを浮かべたまま呟く。

鮮血を滴らせながら笑うその様は、狂気じみてすらいた。

イズミの立てた予想は、ケルベロス＝ヴェルナールが魔術を使えないというものと、使わないというものの二通り。

今の一撃だけでそれを判断するのは不可能だった。実際、イズミはそれを決定していない。

だがそれでも確かに、勝機は見えた。

イズミが活着しているというのが、その何よりも証拠。

「ふん、なにを言いだすかと思えば、そんなことは当然だ。貴様は大切な贄なのだか、」

「違う、僕が言ってるのはそういうことじゃない。こう言っているんだ。殺す能力がない、とな」

イズミは不遜な笑みを浮かべ、続けた。

「おかしいと思ったんだよ。人間としてのお前は醜悪な姿なのに、ケルベロスとしての姿は様になっている。永久機関に不具合があるから肉体喚起が不完全らしいが……

「じゃあなぜケルベロスの肉体は綺麗に喚起できたんだろうな」

イズミは苦笑し、肩をすくめる。

その言葉に、微妙ではあるがケルベロス＝ヴェルナールはたじろいだ。

「そこから推測される答えは一つ。永久機関を使わなかったってだけの話だ。つまり、お前自身のエーテルを使って化け物の体を顕現させたということだ」

「まったく……恐れ入ったよ、少年。それすらも短時間で見抜くとは。だが、だからなんだというのだ？ キミ達に勝ち目がないことに変わりはない」

ケルベロス＝ヴェルナールはとくに焦る様子もなく言葉を発する。

イズミはそんなケルベロス＝ヴェルナールに肩をすくめると、ダーシェンカに目配せをした。

それを確認したダーシェンカは即座にイズミの横に舞い戻る。

「勝ち目がなかったらこんな態度はとれないさ、ヴェルナール」

イズミはニヤリと笑い言いきると、続けてケルベロス＝ヴェルナールには聞こえない程度の声量でダーシェンカに囁いた。

「僕達がとる行動は単純だ。僕はヤツのエーテルを掻き消すことだけを考えて、ダーシェンカはさっきまでと同じように」

「し、しかし、イズミが先ほどと同じような一撃を何度も喰らったら」

「それは心配いらない。ヴェルナールは僕を殺したら自分も死ぬしかないんだ。僕の判断を信じてくれ」

心配そうな視線を向けるダーシェンカに、イズミは力強く断言する。

ダーシェンカは戸惑うような表情を数瞬向けたものの、すぐにかき消し力強く頷き返した。

「相談は終わりかね？ 少年」

ケルベロス＝ヴェルナールはイズミとダーシェンカを見据えながら悠然と告げる。

自分の有利を信じて疑っていないのか、その声に弱気な部分はなかった。

もっとも、イズミがケルベロス＝ヴェルナールの立場だったとしても、弱気な態度は微塵も見せないだろうが。

いや、実際にイズミは見せていない。

勝ち目は見出したものの、確率的には決して高いものではない。それでもそれを確実なものとするために、自信に満ちた態度を演出していた。

理性の低下はそんな傲慢な態度を演出するにはうってつけだったのだが、それもここまで。

イズミはケルベロス＝ヴェルナールに立ち向かうため、エーテルの可視領域を急激に下げ、戦闘開始時と同程度のレベルにしていく。

可視領域を最大まで上げた方がなにかと便利なのだが、その状態で視覚共有しつつ激しく動くとなると負荷が高すぎた。

「行こう、ダーシェンカ。しがらみを断ち切りに」

暗闇から靄の掛ったような視界に変わったことを確かめたイズミは、覚悟を秘めた声で言った。

平時の理性を取り戻したせいで、眼前の三つ首の魔犬に対する恐怖が増大するが、不思議と体に震えは起こらなかった。

「ああ、そうだな。断ち切ろう」

ダーシェンカはイズミの言葉に応じ、頷く。

そのままヴェルナールに凍てつくような視線を向け、続けた。

「家族の仇、討らせてもらうぞ！」

ダーシェンカは叫び、ケルベロス＝ヴェルナールに飛びかかった。

間合いに潜り込み、真ん中の頭を鋭く蹴りあげる。

イズミはダーシェンカが作ったわずかな隙を突き、ケルベロスの足の間をくぐり抜け背後に回り込んだ。

すぐさま体を起こし、ケルベロス＝ヴェルナールの後ろ脚に手を押し当てる。

一瞬のうちに自分の体に流れるエーテルを把握し、その流れとは別の流れを察知する。

そこにあるイメージはロダンの地獄の門にも似た巨大で禍々しい扉。

そこを押し開き、無限に溢れ出るエーテルを汲み上げる。余りの膨大な量に、制御は全く効かない。ただひたすら力任せに汲み上げ続ける。

(喰らえ……！)

イズミはエーテルを掌に収束させ、ケルベロス＝ヴェルナールに流し込みながら心中に叫んだ。

「小賢しいっ！」

ケルベロス＝ヴェルナールは叫び、後ろ脚でイズミを蹴りあげる。

「ぐっ！」

ほぼノーガードの状態を喰らったイズミは吹き飛び、再び地面を転がるハメになった。

だがそれも計算のうちとなれば気にはならなかった。

イズミはすぐさま体を起こし、蓄積されたダメージを確認する。

幸い、骨などに異常は無かった。やはり、ケルベロス＝ヴェルナールは細心の注意を払ってイズミを攻撃しているのだろう。

イズミの推測が正しければ、ケルベロス＝ヴェルナールを構成している膨大なエーテルは永久機関のモノではなく、ヴェルナール本来のモノ。

つまり、ケルベロス＝ヴェルナールに余力など残っていない。残っているのは壊れかけか、あるいは既に壊れてしまっているかもしれない永久機関のみ。

永久機関のエーテルは制御不能と断言して構わないほど扱いが難しい。イズミのよ

うにエーテルの可視領域が高ければレーダーとしても機能するが、そうでなかったらそれこそ力任せに相手のエーテルを打ち消すかベクトル変更にしかり使い道がない。となれば。

「警戒するのは物理攻撃だけで構わない……！」

イズミは“あえて”口に出した。

口に出し、再びケルベロス＝ヴェルナールに飛びかかる。

凄まじい速度で迫る後ろ脚を紙一重でかわし、再びケルベロス＝ヴェルナールの体に触れる。

やることは単純。

地獄の門のイメージ、解放、エーテルの流入。

刹那の間にその流れをこなし、ケルベロス＝ヴェルナールのエーテルを少しずつではあるが、確実に掻き消していく。

しかし一気に掻き消させてくれるほどヴェルナールも甘い相手ではなく、イズミは再び蹴り飛ばされた。

先ほどよりも強力な蹴りに、イズミの呼吸が一瞬止まる。その呼吸は、地面に叩きつけられた際に苦悶の声とともに吐き出された。

「ぐっ！」

イズミは地面に叩きつけられるように落ちた。叩きつけられたときに響いた音は先ほどまでとは比べ物にならないほど鈍く、重かった。

「イズミっ！」

ダーシェンカは叫び、駆け寄ろうとするが、イズミは地面に顔を埋うずめたままそれを制した。

「……大丈夫だ、ダーシェンカ。言ったろ？ ソイツは僕を殺せない」

イズミは腹部を両腕で抱えながら、フラフラと立ち上がった。

イズミの顔面は青白くなっており、額から流れる血がより際立っていた。ばかりか、唇もどこか紫色に変色していた。

「……まったく、魔術師が聞いて呆れるな、ヴェルナール。みぞおちに蹴りを叩きこんで酸欠チアノーゼを起こさせようとするなんて、どこの格闘家だよ」

イズミは青白い顔に微苦笑を浮かべた。

息を吸うたびに腹に激痛が走る。経験のないイズミには本数などは分からないが、あばらの何本かは持っていかれてるだろう。

だがそれも構わない。酸欠を起こしかけているイズミはただひたすらに呼吸したかった。

が、慌てて息を吸い込んだところで今度は過呼吸に陥る。過度な呼吸を抑えさせてくれる痛みはありがたかった。

「……まあ、一発でここまで酸欠気味になるのは十分魔術的かもしれないがね」

イズミは言葉を紡ぎ続ける。

今はただ時間を稼ぎたかった。酸欠によってぼやけた視界を鮮明なものに戻すだけの時間を。

「少年、そんなフラついた体で何ができるというのだ？ それにキミは思い違いをしている。私は魔術が使えないんじゃない、使わなかったんだ！」

ヴェルナールは雄叫びを上げた。

次の瞬間、ケルベロス＝ヴェルナールの眼前に、凄まじい量のエーテルが収束していった。

エーテルは渦を巻きながらブラックホールのような球体をなしていく。そのエーテル密度は、エーテルが視えない者でもはっきりと見えるレベルまで達していた。

言い表すなら、エーテルという物質そのものの喚起。

圧倒的な光景に、イズミとダーシェンカは言葉を失った。迂闊に近づけば、消し飛ばされそうなほどの重圧がその球体には宿っていた。

「言ったはずだ、私は一度視た魔術は理解すると。これは君の父上から盗み、改良したモノだよ、少年！」

ヴェルナールは叫び、その球体を射出した。

動きを止めているダーシェンカ目掛け、凄まじい速度で。

「っ！ 間に合わない！」

(間に合った……！)

イズミは口にした言葉とは真逆の言葉を思い浮かべながら地面を蹴った。

鮮明な視界を取り戻したイズミは駆けながら、エーテルの可視領域を最大にする。同時に、ダーシェンカの視界によって、迫りくる球体も見据えていた。

二つの視覚によってより正確な球体の情報を得たイズミは、一つの答えをはじき出した。

ダーシェンカの方向に駆けだしながら、地獄の門をイメージする。続いて解放、流出。全快のイズミが掛けたところでダーシェンカに迫る球体には届くはずがなかった。ましてや満身創痕となれば間に合うべくもない。

それでもイズミはダーシェンカに手を伸ばした。いや、正確に言い換えるならイズミは。

ダーシェンカに迫る球体に手を伸ばしていた。

その刹那。イズミの脳裏には縁起でもないことに、走馬燈が流れていた。

しかしそれは生涯を振り返るようなものでなく、病院の屋上で行った訓練中の一場面。

『いいか、イズミ。ダーシェンカちゃんに迫る魔術的攻撃は全てお前が防ぐんだ。それは同時に、ダーシェンカちゃんが一切の回避行動を取ってはいけないということとイコールだ。攻撃にだけ集中してもらおう』

相も変わらず幸也は簡単に言っただけでいた。

『なっ！ そんな危ない事！ 避けられる攻撃はダーシェンカが避けた方が安全じゃ、』

『自分が楽しようとしているのか？ イズミ』

『別にそういう訳じゃ！』

ニンマリ顔で言う幸也に、イズミは掴みかからんばかりの剣幕で反論する。

『なら自分の力を信じろ。ダーシェンカちゃんはイズミを信じられるだろ？』

幸也はイズミから視線を外し、イズミの横にいるダーシェンカを見据えた。

ダーシェンカは幸也の問いに、力強く無言で頷いた。

2

(まったく……この状況でも動かないとはね。期待には応えなきゃね、男としてさ)

イズミは口元に淡い笑みを浮かべながら、汲み出した膨大なエーテルを球体に注ぎ込んだ。

次の瞬間、球体は弾け、散弾銃の弾のように無数に散らばった。

だがイズミは慌てなかった。それはイズミ自身が組み込んだプログラムだから。

無数の弾丸は部屋中を穿ち、削り取られた床や天井が砂埃を上げる。

砂埃が風に乗って窓の外に流れていったあと、そこには無傷のダーシェンカと傷だらけのイズミが並び立っていた。

「なん、だと……？」

その光景に、ケルベロス＝ヴェルナールは息を呑んだ。

信じられないとばかりに。

「まさか、想像できなかったんですか？ 僕たちを鍛えたのはあなたが敗北したあの“化け物”ですよ？」

イズミは肩をすくめ苦笑する。

そしてゆっくりとケルベロス＝ヴェルナールに歩み寄る。

「ち、ちがう！ キミは今何をしたんだ！」

対するケルベロス＝ヴェルナールはイズミが足を進めるたびに後ろに退いていく。

「何って……単純なコトですよ。エーテルのベクトル変更ですよ」

イズミはなおもゆっくりと足を進め、今度はケルベロス＝ヴェルナールに手を伸ばした。

「ち、違う！ 先ほどのあれはそんな次元じゃなかった！ 明らかにエーテル内部でエーテルの消失現象が、」

「なんだ分かってるじゃないですか。まあ、父さんのように動作なしには出来ないけど……この程度の距離なら十分変更できますよ？ 有から無へのベクトル変更も、ね。ましてや、最後の一撃を使ったあなたに対してなら……容易い」

イズミは無表情に言い切り、伸ばした手をグッと握り締めた。

「ぐっ！ グオオオオオオ！」

ケルベロス＝ヴェルナールが苦悶の声を上げる。しれは苦悶の声というよりもいっそ、その姿に似つかわしく、獣の咆哮と言い表した方がいいモノだった。

ケルベロス＝ヴェルナールの四肢はあらゆる方向に曲がり、三つ首も互いがねじれあって一つの物体と化していた。

イズミはそんな残虐な光景を意識することなく、ヴェルナールのエーテルに上書きを掛けていく。残虐な光景から目を背けているわけでは決してなく、ただ単に景色を見る余裕がなかったのだ。

“計画通り”ヴェルナールのエーテルを消費させたとはいえ、残っている量も馬鹿にならない。少しの油断が命取りだった。

ましてや、体中の傷のせいで意識を保つのがやっとなればなおのこと。

それでもイズミは地獄の門をイメージし、膨大なエーテルを汲み出し続ける。

ヴェルナールという存在の消去に、全意識を傾ける。

それは、言ってしまえば最大の油断だった。

「ゴ、ドオ、ウ！ ゴロズ！ コロス！」

もはや原形を留めず、ただの球体と化したケルベロス＝ヴェルナールは、禍々しい声を上げた。

同時に、球体からエーテルの弾丸がイズミに向かって射出される。無数に、容赦なく。

イズミならば何気なく書き換えられる量ではあったが、エーテルの上書きに集中している今のイズミには不可能な話だった。

弾丸が射出されるやいなや、ダーシェンカは地面を蹴り、弾丸の前に立ちふさがった。

「シッ！」

ダーシェンカは短く息を吐き出し、魔術無効化を発動させる。

身を何度も翻し、イズミに向かってくる弾丸をすべてその身で打ち消した。

もし弾丸にあ術無効化の術式が込められていたら、という懸念もあったが、余裕のないヴェルナールはそんなこと考えつきもしなかったらしい。

もっともダーシェンカは、その身を何度貫かれようがイズミを守り切るつもりだったが。

「クロス！ コロス！ コロス！」

ケルベロス＝ヴェルナールの球体は怨嗟の言葉を吐き出し続けながら縮小し、終いには完全に消え去った。

「……終わ、った」

ケルベロス＝ヴェルナールが消え去った事を確認したイズミは安堵の息を吐き出し、倒れ込む。

「お、おい！ 大丈夫か？」

倒れ込んだイズミをダーシエンカが咄嗟に抱きかかえた。
ダーシエンカの腕の中でイズミは、弱々しげに微笑みながら。
「……ありがとう、ダーシエンカ」
と言い、穏やかな寝息を立て始めた。
そんなイズミにダーシエンカは苦笑とともに溜息を洩らし、呟く。
「ありがとうを言うのはこっちだよ、まったく」
ダーシエンカは廃墟と化したといってもいいほどボロボロになった室内から、晴れ渡った空に視線を移す。
窓がことごとく割れているおかげで、窓の外には綺麗な空をはっきりと見ることが出来た。

エピローグ

八月も終わりの頃、イズミの部屋。
「ダーシエンカ、もう終わった？」
扉の外から掛けられたイズミの声に、ダーシエンカは「あと少しだ」と返す。
(そう、あと少しだ……)
ダーシエンカは目の前の鏡を覗き込みながら、どこか寂しげに心のうちで呟いた。
そんな寂しげなダーシエンカの呟きとは裏腹に、鏡の中にはめかしこんだダーシエンカの姿があった。
しなやかな亜麻色の髪は結いあげられ、体は清廉さを感じさせる浅葱色の浴衣に包まれていた。顔には薄く化粧が施され、ダーシエンカの美しさを普段よりもいっそう際立たせていた。

ヴェルナールとの戦いのあと、幸也と雪は騒動などの事後処理をこなし、あっという間に“表”の仕事の都合で海外へと旅立っていった。

旅立つ前に雪が「どうしても教えておかなければならないことがある」などと真剣に言うものだから、ダーシエンカは思わず身構えてしまったのだが、蓋を開けてみればなんてことはない。

「もうすぐ夏祭りがあるから、おめかしの仕方を覚えなさい」
ということだった。

かくしてダーシエンカは縁のなかった化粧の仕方と浴衣の着方を叩き込まれ、夏祭り当日に至っているというわけだ。

「変じゃ、ないよな？」

ダーシェンカは体を動かし、帯の結び方や髪のかい方を再度確認する。

(うん。どこもおかしくない)

とは思うものの、表情は優れなかった。

「あと、少しだな。本当に」

ダーシェンカは手を握ったり開いたりしながら自嘲気味に呟いた。

「ダーシェンカ、まだ時間掛るなら下で待ってるよ？」

「ああ、すまない。もう済んだよ」

ダーシェンカは顔に浮かんでいた影をサッと隠し、扉を開ける。

そこには、現われたダーシェンカの姿に呆けているイズミの姿があった。

ダーシェンカとは対照的にイズミはジーンズにTシャツという、ありふれた格好だった。もともと、Tシャツから覗く、ヴェルナールとの戦いで出来た傷跡の数々はありふれたとは言い難かったが。

「どうした？ 呆けた顔をして。そんなに似合っているか？」

ダーシェンカは痣の心配を口にしようとしたのだが、そんなことはいつもしているので今日ばかりはと、からかうような笑みをイズミに向けた。

「う、うん。想像以上に、似合ってるよ」

イズミは若干夢見心地な調子で呟く。

「フフ、そうか。ありがとう」

ダーシェンカは柔らかな笑みを浮かべ、イズミの脇を通り過ぎる。

「ほら、行くんだろ？ 夏祭り」

ダーシェンカは振り返り、動かないイズミに微笑みかける。

「あ、ああ、そうだね。早く行かないと道が混み出しちゃうね」

イズミは頬を赤らめながら言い、ダーシェンカの横に並んだ。

「思った以上に、混むんだな」

ダーシェンカは道行く人々を避けながら、不愉快そうに眉をよせた。

「これくらいはまだマシだよ、あと一時間もすればこの倍になるよ」

しかめっ面のダーシェンカとは対照的に、イズミの顔は楽しげだった。

イズミの街で毎年夏に行われる夏祭りは、地元企業や商店街がスポンサーとなって行われる地元民しか訪れないようなささやかなモノなのだが、それでいて祭りの最後に打ち上げられる花火はなかなか見ごたえのあるものだった。

イズミとダーシェンカは人混みを縫いながら、出店が立ち並ぶ場と打ち上げ会場とを兼ねているグラウンドに向かっていった。

時刻はまだ花火打ち上げ開始二時間前の午後六時だというのに、グラウンドへ向かう

道は家族連れやカップルなどで賑わっていた。

(僕とダーシェンカも恋人に、見えるのかな？ いや、ないないない。どうせ留学生を案内してるホストファミリーだよ、せいぜい)

イズミは頭を軽く振り、思い浮かんだ想像を排したい、
——の、だが。

不意にイズミの右腕が少しだけ重く、そしてほんのりと温かくなった。加えて言うならば少しだけ痣も痛んだのだが、そんなことはすぐにどうでもよくなった。

「こうも人が多くては……はぐれてしまう」

ダーシェンカが不愉快そうに眉を寄せながら、イズミの腕にその細い腕を絡ませていた。

「う、うん、そうだね」

イズミは火照り出した顔をダーシェンカから背け、ゆっくりと歩き続ける。人混みは好きではないが、ゆっくりと歩く大義名分をくれるなら、少しだけ好きになれそうな気がした。

我知らず口元を綻ばせ、イズミはダーシェンカの顔をチラと盗み見る。

瞬間。ダーシェンカも同じことをしていたのか、二人の視線がぶつかり、即座に逸らされた。

「お腹、空いたな……」

「そ、そうだね。夜店で何か買おうか」

顔を赤らめながら呟いたダーシェンカに、イズミは頬を掻きながら応じる。

ヴェルナールとの戦いの前と後では明らかに違う、二人の距離感。関係性とも言い換えられるそれを、イズミもダーシェンカもなんと形容すればいいか判断できずにいた。

違う。判断したくなかったのだ。このあやふやな、それでいて心地いい関係を壊したくなかったから。二人がそれぞれ違う言葉で形容してしまえばいともたやすく壊れてしまうそれを、手放したくなかったから。

二人はそんな薄暗い不実を胸の内に抱えながら、祭りの夜に繰り出して行った。

胸に抱く感情に関係なく、祭りは二人をもてなしてくれた。

二人は射的やら金魚すくいやら日本の夏祭りの基本をおさえながら出店をいくつか回った。そのあとはダーシェンカの気の向くままに食べ物類のお店を回った。イズミよりもダーシェンカの食べ物の方が三倍は多かったのだが、慣れっこのイズミは特に突っ込まなかった。

焼きそばの屋台を出していたおばちゃんに「買い出しかい？ 大変だね」などと言われたとき、ダーシェンカは笑顔で「はい。人数が多くて大変なんです」などと答えていたのだが、そのときはさすがのイズミも「一人で食べるんでしょ」と突っ込みたくなった。

が、

ぐっと堪えた。

そしていま、イズミは両手に焼きそばや大判焼きなどが入ったビニール袋をぶら下げ——そのほかにちっぽけな覚悟も胸に抱いて——ながら階段を上っていた。

「おいイズミ、花火の打ち上げはグランドなんだろ？ どうしてわざわざ離れた神社に向かうんだ」

ダーシェンカは不思議そうにイズミを見つめた。

「花火は適度な距離で見るのが一番なんだよ。それに、ダーシェンカ嫌いだろ？ 人混み」

——それに人がいないほうが都合がいい、と密かに胸の内に呟きながら、イズミは微笑んだ。

「まあ、人混みは好きではないが……」

「ほら、もう着いたよ」

唇を尖らせるダーシェンカに、イズミは優しく微笑みかける。

登りついた先は、薄暗く、本当に人気のない神社だった。人がいないのは結構なのだが、周りを背の高い針葉樹に囲まれているせいで、花火など見えそうになかった。

「これでは、花火など見えないのではないか？」

ダーシェンカは怪訝な視線をイズミに向ける。

だがイズミはそんな視線を意に介す様子もなく肩をすくめ、微笑んだ。

「花火が簡単に見られそうだったら人がたくさん集まっちゃうでしょ？ だからここは穴場なの。付いてきて」

イズミはそう言うと、堂の裏の林にズイズイと足を踏み入れていく。

ダーシェンカは一瞬首を傾げたのだが、仕方なくイズミの後に続いた。

「これは……凄いな」

ダーシェンカは林を抜けた先に広がる光景に、そんな呟きを洩らした。

それを聞いたイズミは得意そうに微笑む。

堂の裏は切り立った崖になっており、そこからは花火の打ち上げ会場だけでなく、街全体を見渡すことが出来た。

日の落ち切った暗闇の中に、人家の明かり達が瞬いている。百万ドルの夜景とは比べ物にならないが、これはこれで温かみのある光景だった。

花火を見物するにしても、間引かれた切り株などがあり、座る場所にも事欠かない。

「あ、あそこに座ろうか」

イズミは少し我慢すれば二人で座れそうな切り株をを見つけ、そこに腰を下ろす。

ダーシェンカもイズミに続いて腰をおろした。

イズミは切り株に腰をおろし、ぼんやりと街並みを見渡した。

一軒一軒の家の明かりを見つめながらも、イズミの頭の中には様々なものが渦巻い

て、景色を見るような余裕はなかった。

ただひたすら、胸に去来すものを反芻し、反芻し、反芻する。

「……こうして平穩に過ごしてるとき、ヴェルナールとの戦いが夢だったんじゃないか、
って思うんだよね、たまに」

イズミはうっそりと口を開いた。

視線は街並みに向けられたままで、表情は相も変わらず心ここにあらずといった風。

ダーシェンカはイズミのそんな横顔を眺めながら苦笑する。

「……残念ながら夢ではないな、現に私がいる」

「まあ、そうなんだけどさ」

イズミは初めて街並みから視線を外し、ダーシェンカの苦笑に苦笑を返した。

自信なさげな、それでいて不快ではない、人好きのする苦笑。

「ヴェルナールとの戦いが夢であったら、とは思うけど、僕はダーシェンカと出会えたことには心から感謝してるよ。僕はキミと出会えて本当に良かったと思ってる」

イズミははにかんだ笑みを浮かべながら、言う。

ダーシェンカはその言葉に息を呑み、嬉しそうな表情を浮かべ——たのも束の間。

その表情はすぐさま曇り、苦々しい表情で襟を手で握りしめる。

「……寿命を、削ったとしてもか？」

ダーシェンカは伏し目がちに問うた。

理解する。今がそのときなのだ。自らのうちにあった不実と向き合わなければなら
ないときなのだ。

あたたかな、魔法のような時間の、終わりなのだ。

ダーシェンカはギョッと目を閉じた。これから訪れる未来を想像し、胸のうちが掻き
乱される。他でもない、自分自身の心によって。

分かっていたことだ。覚醒したネクロマンサーに、リビングデッドは必要ない。最初か
らそれを知った上でこの道に足を踏み入れたはずだ。ネクロマンサーを利用するだけ
利用する、そんな心積もりのはずだった。

だというのに、自分はそれをしなかった。

なぜ？ そんな問い、立てるのも愚かしかった。

自分はイズミのことを——。

その先の言葉は努めて思い描けなかった。思い描けば今度こそ、耐えられなくなっ
てしまうから。心の中で暴れる気持ちを言葉にしまいそうだったから。

「寿命なんか、関係ないよ」

暗闇の中で、ダーシェンカはそんな言葉を聞いた。自分の願望が聞かせた幻聴かと思った。

けれど。

「目を開けてよ、ダーシェンカ」

そっと、自分の肩にイズミの手が乗せられるのを感じる。

感覚のないはずの自分がそう感じるのはひょっとしたら、イズミの感覚のせいなのかもしれない。肩に乗った手は、とても温かい、いいや、熱いくらいだった。

ダーシェンカはゆっくりと目を開ける。

イズミがまっすぐ、自分の瞳を見つめている。いつもは頼りなさそうな瞳なのに、このときの瞳は、とても力強かった。

まるで、自分を庇ったときと同じような。

「僕は、キミのことが……好きだ」

イズミはダーシェンカの瞳をまっすぐ見つめ、言った。

その言葉に、ダーシェンカの双眸から温かいものが溢れだす。止めどなく、ただひたすらに。

その姿に、先ほどまでの表情が嘘のようにイズミが慌てだし、おずおずとポケットからハンカチを取り出して差し出す。

「あ、あの、ぼ、僕……ごめん」

イズミはハンカチを手渡ししながら、それだけ言った。

「い、いや、謝ることじゃない……私は、嬉しくて泣いたんだ。きっと」

ダーシェンカは溢れ出る涙を拭うことも忘れ、手渡されたハンカチをぎゅっと握りしめる。

「じゃ、じゃあ」

「でもそれは駄目だ」

何かを言いかけたイズミを、ダーシェンカがキッと鋭い視線で制す。溢れ出る涙はそのままだ。

「どうしてっ……！」

ハッキリと拒絶の意思を表示したダーシェンカに、イズミは顔を歪めた。今にも泣き出しそうな表情で。

「イズミには、これから明るい未来が待っている。その未来に……私は必要ない」

ダーシェンカはそう言うと、寂しそうに微笑んだ。

自分の感情を必死に押し殺し、ただひたすらに、イズミのことを想いながら。

「どうして……どうしてそんなこと言うんだよ」

イズミは視線を落として言った。その声は震えていた。悲しみに、あるいは怒りに。

「私がイズミと一緒に居るためには、イズミの寿命を削らなければならない……そんなことは、嫌だ」

「じゃあなんで嬉しくて泣いてるんだよ……嬉しいなら、僕と一緒に居てくれていいじゃないか」

「それは……駄目だ。嬉しいから、駄目なんだ」

ダーシェンカは駄々をこねる子をあやすように、優しい声音で言う。

「分からないよっ！ そんなの！」

イズミは顔を上げ、腕を振るった。その瞳にはジワリと涙がにじんでいる。

「僕は……きちんと考えて答えを出したんだ。寿命が縮んだって構わない。僕は、僕はキミと一緒に居たいんだ、ダーシェンカ」

イズミはすがるような思いで、言葉を振り絞る。

それでもダーシェンカはゆっくりと首を横に振る。

「その気持ちだけで、私は安らかに逝ける。リビングデッドとしてではなく、人として」

ダーシェンカはそこで初めて涙を拭い、微笑んだ。寂しそうにではなく、どこか満ち足りた微笑みだった。

「一緒に背負ってくれるって言ったじゃないか、罪を」

「すまない。あれは……嘘だ」

「初めから、このつもりだったの？」

「……ああ」

ダーシェンカはイズミから顔を背ける。

「そう。分かった……なら、いいよ」

イズミが引き下がるのを感じたダーシェンカは、再び視線をイズミに戻し。

唇に、熱いものが押し付けられるのを感じた。

それがイズミの唇だと気付くのに五秒。イズミの左手がその心臓の上に添えられていることに気付くのにもう三秒。それが何を意味するか気付くのにさらに三秒。

気がつけばものの十秒もの間、そうしていた。

「ば、ばっ！ 何をしている！」

ダーシェンカは慌ててイズミを突き飛ばす。

加減はしたつもりなのだが、イズミは思い切り背後の木に叩きつけられていた。

「何って……エーテルの補充を」

イズミは打ちつけた背中をさすりながら、悪びれる様子もなく言う。

「気付いて……いたのか？」

ダーシェンカは微かに残った唇の感触を思い出すかのように、手を唇に添えていた。

「気付かないはずがないだろ。僕とキミは繋がってるんだから……だから、キミが死ぬ気なんじゃないか、っていうのも薄々気づいてた」

「ならどうしておとなしく死なせてくれなかった！ どうして！ どうして……こんなことを」

ダーシェンカは言いながら、ぼろぼろと涙をこぼす。
「最初は分からなかった。どうすべきなのか。キミを死なせてあげるのが正しいんじゃないか、なんて考えました」
「ならどうして！」
「嬉しいって、言ったから。キミが、嬉しいから泣いたって言ってくれたから」
イズミは静かに、それでいてよく通る声で言った。
「キミが僕と居たいって思ってくれてるなら、僕はどんなことをしてでもキミと一緒に居る道を選ぶよ、ダーシェンカ」
「私は……リビングデッドなんだぞ？ 道具なんだ、ネクロマンサーの。それも、覚醒したキミにとってはもう必要のない」
ダーシェンカは自分の肩を抱きしめ、イズミから視線を逸らす。
「確かに、そうなのかもしれない。けど、だからって……人間としてのキミが必要ないってことにはならない。絶対に」
イズミはダーシェンカに歩みより、その肩に手を添える。
「僕とずっと一緒に居てよ、ダーシェンカ」
ズイと向けられたその視線にたじろぎながらも、ダーシェンカは目を逸らすことが出来なかった。
しばらく見つめあったのち、ダーシェンカはゆっくりと首を縦に振った。
「私は……イズミと一緒に居たい。ずっと——」
ダーシェンカは泣きだしそうな顔で言った。
その瞬間。夜空にいくつもの花火が瞬き始めた。轟音が二人のほかには誰もいない神社に木霊する。
花火の明かりが二人の顔を映し出すなか、どちらからともなく、イズミとダーシェンカは唇をそっと重ねた。
それは、今までのどんなキスとも違う、なんの意味もない、それでいて重大な意味が籠ったキスだった。

fin

Copyright(C) Jikei Group. All Right Reserved.

当サイトに掲載されている全ての画像・文章の無断転載・転用を禁止します。